

鹿兒島県史料

島津
齊興 齊宣
公史料

題
字

鎌田 要人
鹿兒島県知事

解題

本巻は「鹿兒島県史料 島津齊宣齊興公史料」として、薩摩藩主にして島津家第二十六代の当主齊宣及び第二十七代齊興の關係史料、「齊宣公史料」「齊興公史料」「文化朋党実録」「文化朋党一条」を収めたものである。

齊宣は安永二年十二月六日、藩主島津重豪の長子として、江戸に生まれた。母は側室於千萬（堤前中納言代長の娘）である。幼名を虎寿丸、次いで又三郎忠堯といい、天明六年十二月七日元服し、將軍家齊の偏諱を許されて齊宣と改名し、從四位下・侍從に叙任し、豊後守と称した。天明七年正月二十九日襲封し、三月十八日左近衛少將、寛政二年十一月二十七日從四位上・左近衛中将に昇り、文化元年九月十三日薩摩守と改めた。文化六年六月十七日隠居し十八日修理大夫と称し、同十四年十二月九日総髪して溪山と号した。その後天保十一年十二月四日正四位上に進み、翌十二年十月十三日江戸高輪邸において、六十九歳で没した。法号を大慈院殿舜翁溪山大居士という。

齊興は寛政三年十一月六日齊宣の長子として、鹿兒島に生まれた。母は側室於八百（鈴木甚五郎勝直の娘）である。幼名を憲之助のち虎寿丸といい、次いで又三郎忠温といった。文化元年十月四日元服し、將軍家齊の偏諱を許されて齊興と改名し、從四位下・侍從に叙任し、豊後守と称した。文化六年六月十七日襲封し、同十二月十六日左近衛少將、文政元年十二月十六日從四位上・左近衛中将に進み、天保三年五月十八日大隅守と改めた。同年閏十一月二日正四位下、天保九年十二月五日参議に進んだ。嘉永四年二月二日隠居し、安政四年十二月五日從三位に進み、同六年九月十二日鹿兒島玉里邸において、六十九歳で没した。法号を金剛定院殿明覚亮忍大居士と

いう。

齊宣・齊興両者は、前に島津重豪、後に島津斉彬という名だたる二藩主をかかえ、その間に介在して、ともすると影の薄い存在である。

しかも齊宣は文化朋党事件（近思録崩れ・秩父崩れなどともいう）、齊興は嘉永朋党事件（お由羅騒動・高崎崩れ・近藤崩れなどともいう）という藩内稀有の朋党事件で、共に藩主の座を去ったという奇しき共通性を持つ。齊興に限っていえば、文化朋党事件で藩主の座につき、嘉永朋党事件でその座を明け渡すというように、朋党事件にその進退を左右されたという、島津家歴代の中でも類を見ない藩主である。

ところでこの両藩主の正史・関係史料は、当然「鹿兒島県史料旧記雑録追録」に収められるべきであり、事実その六・七・八巻に収められている。しかしそれらに収められた史料の出版をみる時、重豪公御譜に比べ齊宣公御譜・齊興公御譜の比重が、はるかに軽い感じを与える。

例えば七巻の収載内容は天保六年までであるが、重豪死去の天保四年までが大部分を占め、天保五年分二〇件（二七四七件中）、同六年分六件に過ぎない。このことは齊宣・齊興時代、いずれもその初期重豪が藩政を介助し、介助を停止した後でも、重豪の存在を無視して藩政を推進できなかったことから、勢い重豪関係の件数が、大きなウェイトを占めることになった結果だということであろう。

しかも追録最後の八巻に至っては、この一卷に齊興・斉彬・忠義の三代分が収められている。これは追録全八巻中、重豪関係が五巻の後半半分と、六巻すべてを占め、更に七巻に大きな比重を占めていて、追録全体に占める重豪関係史料のスペースの大きいのに比べると、思い半ばにすぎないものがある。このことは薩摩藩政の中における、重豪の存在の大きさを物語るものであろうが、それはともかく、このような単なる形式上からのことであ

るが、斉宣・斉興時代の取扱いについて、その比重の軽さが注目されるのである。

そこで更に追録八巻の内容をみると、天保七年から明治二十八年まで一三四二件を収めるが、そのうち斉興治世の嘉永四年二月初め迄一七三件、以後斉彬治世はその死没の安政五年迄、僅かに八八件が収められているに過ぎない。

このうち斉彬・忠義時代に関しては、別巻「斉彬公史料」「忠義公史料」にもまとめられていることであるし、当面の検討範囲外でもあるので、ここでは除外して考えることにし、斉宣・斉興時代について考えてみる。

これについて、追録六巻の一・二九号史料にある平田宗高の記述が、貴重な参考になる（同文が鹿児島県立図書館所蔵の「島津秘譜」巻二にもある）。すなわち次の通りである。

藩主光久の時代、平田純正を文書奉行として、島津家譜の編集を命じた。そこで純正によって、島津家初代忠久から家久の初世まで、およそ十八代の正統系譜百十四冊、家久の中世以後死去までの正統系譜続編七十九冊と、支流系譜五十二家九十六冊が編纂された。その後史官相うけついで編纂を続け、光久から重豪までの七代五百八冊が完成して、これも正統系譜続編とされた。

なおその次の斉宣・斉興二代の譜は、編纂がほとんど終ろうとしていた時、明治四年の廃藩置県のことが起こり、史官も廃止されて編纂事業は中止となってしまう。その後数年すると又西南戦争が起こり、鹿児島島の地が戦場となった。その時島津家累世の「譜諜文書」類で、岩崎文庫に所蔵されていたものは、島津家家令その他の人が力を尽して保護運搬したため、兵火を免れることができた。しかし、それ以外の築地邸にあったものは、力及ばずすべて焼けてしまった。幸いに正統系譜正統編無慮七百一冊と支流系譜九十六冊は、岩崎文庫にあったため今に現存する。

自分は旧藩時代記録奉行の職を奉じていたので、明治二十一年四月島津家々譜統編々集の命を受けた。そこでいろいろ調べてみると、ほとんど編纂の終っていた斉宣・斉興二代の「紀事写文の類」は、築地邸にあって焼失したものが、いくら捜してもみつからなかった。したがってこの二代の系譜編纂は、全く新しく着手せざるを得ないことになった。

これまでの先公譜をみると、その史料は藩の文庫や史館の記録、家老座や右筆所の簿籍等から採り、また琉球中山王及び藩内諸家の文書等から採っている。しかし今史館の記録、家老座や右筆所の簿籍はどこにいったのだろうか、廃藩の際県庁所管になって兵火にあったものか、その所在は分からない。

この点に関しては、市来四郎の記す次のようなことが参考になろう。

明治五年夏大山綱良県令たりし時、旧幣を打破するとの惑説に動かされ、県庁構内にある旧藩の書庫に貯蔵の書類を焼捨るの挙あり、此際予偶々其場に至る、貴重書類を焼燬するを見て、遺憾に堪へず、手から書類を搜索し、御筆入と記したる小箱を発見し、披き見るに斉彬公の御真蹟なり、之を一炬に付するに忍ひず、県属松元良藏等に請ふて、其一箱を貰ひ、其中にあるを一通ハ予、一通ハ松元、一通ハ大山と分ちたるものなり（「忠義公史料七」一〇〇六頁）という。

廃藩後大山県令は旧藩文書を焼却させており、西南戦争をまたなかつたのである。

また旧中山王家の文書簿籍も廃藩の日に混乱散失して、今は一つも存しない。藩内諸家についても、世の転変に加うるに罹災ということで、その文書等の存するものは稀である。

そういう事情で、この両公譜を編纂するに当っては、僅かに岩崎文庫で戦災を免れた史料や、二・三家にある文書等に頼る以外にない。

「嗟譜中之寥寥、弗勝遺憾、將如之何哉」

すなわち斉宣・斉興譜は、明治二十一年四月以降、平田宗高が命を受けて、編纂したものと分かる。ここで平田の記す「正統系譜」というのは、現在東大史料編纂所々蔵の島津家史料中の「新編島津氏世録正統系図」に相当すると思われる。この世録正統系図の編制は、新編百十四冊、統編七百三冊中重豪迄の分が五百八十七冊、支流系図九十六冊で、これは平田の記す正統系譜正統編・支流系譜の冊数と全く符合する。

ただ冊数で符合するといっても、これに新編という二字が加えられているのは、従来の正統系譜に増補訂正を加えたという意味があり、内容まですべて旧来のままということではない。だから新編に対し、従来の正統系譜を旧譜と呼ぶのである（「鹿児島県史料旧記雑録前編」解題参照）。

そして世録正統系図七百三冊の中から、重豪までの分五百八十七冊を差引いた百十六冊が、斉宣・斉興分（斉宣八十四冊、斉興三十二冊）ということ、これが平田宗高の編纂したものということになる。平田の編纂作業は、明治二十一年四月から数年にわたったであろう。

そのころ一方では伊地知季通による、旧記雑録の編纂や増補訂正が、行われていたと思われる。季通は歴史編修官として県庁に勤務し、その後磯島津邸の古文書調査方となり、明治三十四年三月死没する二年前にやめたという。季通の同二十三年一月付の記事によると、「余今老年に至り、磯邸島津公の命に由て、昔年編輯する所の旧記雑録増補の事に与れり」（旧記前編解題）とあり、こうして明治三十二年ごろ迄、古文書調方をやっていたということのようである。その間明治十三年十月「薩藩旧記雑録」六十八巻を、修史局に提出している（追録一の解題）。

そして追録の最後は、明治二十八年十二月の島津忠義届書である。したがって季通の追録増補作業も、二十年

代終りごろまでは行われていたであろう。そして、安永二年十二月六日の斉宣誕生の記事は、「斉宣公御譜」からとして追録に収められている。当然追録における斉宣公御譜の初出であり、これは平田宗高の編纂成果を利用したものといえる。

平田がいつまで編纂事業に、たずさわっていたか不明であるが、平田と季通は同じ時期、磯島津邸に勤務していたと考えてよからう。追録編纂が、前述の「新編島津氏世録正統系図」を重要な史料としたろうことは、今日一般に認められた事実であるので（旧記前編解題）、平田の業績もほとんど同時進行の形で採用されたわけである。この段階における平田と季通の関係は、家譜編纂の共同作業者なのか、それぞれ家譜編纂・古文書調査と別任務なのか、両者共にその事について、何ら触れていないので明確でない。

ところが、以上は追録に採用された斉宣譜・斉興譜のことである。本巻収録のメインとなる「斉宣公史料」「斉興公史料」は、これとは全く別系統の史料である。

それは今回底本とした、東大史料編纂所々蔵の島津家史料の「斉宣公史料」「斉興公史料」の表紙に、「市来四郎編」「元国事執掌史料」とあることよって、その来歴を知ることができる。

市来四郎は寺師正容の子として、文政十一年十二月二十四日城下新屋敷に生まれ、十一歳の時同藩士市来四郎政直の養子となった。その後化学・蘭学等を学んで、藩主斉彬の始めた洋式産業集成館の技術部門を担当し、斉彬の信頼を得た。維新後開物社等の殖産事業に従事したが、明治十五年ごろから「一切志を世事に絶ち、専ら筆硯を事とす」るに至り、歴史史料の調査収集に当った。その自叙伝は、「市来四郎君自叙伝」として、「史談会速記録」第二百二十四輯から第四百一十一輯（ただし第三百三十五輯を除く）に、十七回にわたって分載され、現在「鹿児島県史料忠義公史料第七」の末尾に全文収録されている。

市来の自叙伝を読むと、市来が如何に筆まめな人物であったかがよく分かる。市来は西南戦争に罹災して、多くの家財と共に書籍を焼いた。その中に二十歳（弘化四年に当る）の正月から明治九年十二月迄、四十余年間（と市来は記すが、二十歳からというのが事実とすると三十年間となる）毎日怠らず記した「日記」八十冊、二十三歳（嘉永三年）の春から起稿し、武備・経済・刑律・雑編・旧説・海外の六部に分けて記した「石室秘稿」二百余冊があった。ただこの六部の中の一つ旧記（説）は、当時校正中で田上村の別荘に持って行っており、戦火を恐れて土穴中に納めておいたため、戦災を免れたという。現在、国会図書館所蔵の「石室秘稿」がそれに当るものであろう。もちろん現存のものには、明治十年以後二十年代の内容も入っているので、その後の収集史料が加わっている。

日記には天氣の晴雨、寒暖、世の変遷、諸布令、諸説、米価、有名者死亡の年月日、詩歌、文章等が記しており、特に市来が藩主斉彬の命を奉じた種々の事業、あるいは文久末年より元治の初年三・四か年間に、鑄銭事業を総宰していた時代の、日々の製造高、あるいは維新前後「本藩にて尽力の始末、国中の事、天下の形勢」、あるいは前の浜で英国と戦争した実績、そのほか人情の変遷等、漏らすことなく記してあったというが、明治九年迄の日記は、すべて焼失したというのである。

こういう筆まめな性格を見込まれて、市来は明治十五年二月島津家から、順聖公御言行録の編集を依頼され、十八年三月二十八日島津家に提出した。この間の事情は「市来四郎君自叙伝」の冒頭に付けられた、元島津家家令東郷重持の「編集方御取設願末」に詳しい。ただ明治十八年に市来の提出したものを「照国公御伝二十巻」とするが、これが言行録のことであらう。

この言行録は戦時中昭和十九年「島津斉彬言行録」と題して、岩波文庫本で出版され（その後絶版）、また最

近「鹿児島県史料斉彬公史料第一巻」に収められた。その異同等については、「斉彬公史料」第二巻解題に記されている。

市来は明治十八年十月十五日今度は島津家家記編集の委嘱を受け、十九日から豊民館跡に編集所を設け、写字生数名を雇用して編集に当った。そして編集が終ると二・三冊ずつを一括して、島津久光に提出し、みてもらった。

公は一々検覧あらせられ、誤謬を訂正し、冗文贅語を削補し、親ら朱墨を以て記入あり、或は邸に召し、親しく事実を語り玉ひ、或は手許保蔵の書翰、日乗の数を下付せられたり、次で忠義公の検覧に供ふ、公又記憶し給へる事項あれば、紙稔を挿入して、之を記標とし、他日子の参謁を為せし際に、細かに説示を与へ給へり、という。そして久光はこれを「旧邦秘録」と命名した。

明治二十年十二月六日久光は死去して国葬となつたが（東郷重持は十九年と誤記）、市来はその後も、忠義及び久光の後嗣忠濟の命により、家記編集を続行した。翌二十一年国葬の恩を謝するために上京した忠義及び忠濟は、孝明天皇から斉彬や久光が賜わつた、御製や宸翰を天覧に供し、更に市来の記した「久光公親話記」二巻を奉呈した。

ところがこの二十一年五月（市来は七月十日と記す）、宮内大臣から島津家に対し、嘉永六年から明治四年までの旧藩内の事績を記録して、三か年内に上呈せよと達せられ、補助金三千円を下賜された。これは全く久光生前の業績を採用されたからであり、このことは単に島津家だけに限るべきものではないとして、同時に毛利・山内・徳川の三家にも同様のことが達せられた。

島津家では市来を主任として編集を続行することにした。しかしこれまで島津家一個の編集事業だったのが、

帝室の命を受け国家的事業となつたので、東京に編集方出張所を設け、市来の甥寺師宗徳を出張所主任とし、鹿児島と相協力し編集に當つた。しかし両地に分かれるのは不便ということで、明治二十三年編集方を東京にまとめ、市来も上京して寺師と共に編集に當ることになり、書名は「島津家国事鞅掌史料」とすることになった。

宮内省への提出は、期限通りに行われたと思われるが、編集作業はその後も続行され、三十二年七月に至つて一たん中止されることになった。これで見ると「国事鞅掌史料」の編集は、明治十八年以来十四年間、宮内省よりの命令以後でも九十年にわたつて行われたことになる。

その間市来・寺師らは、編集作業の円滑な進行をはかる上から、史料交換・事実検討の機会を作ることを考え、毛利・山内・徳川諸家と結び、なお広く三条・岩倉諸家の伝記取調掛と謀り、同族中の共鳴者を糾合して、史談会を設立した。その後加入者は同族百余家に及び、史料の調査収集に一層の便宜を加えた。

はじめ宮内省の達しは、嘉永六年から明治四年までとあつたが、市来四郎・寺師宗徳・東郷重持は明治二十一年七月十六日、三条実美を訪ね、島津家に関して、弘化元年三月琉球へ異国船渡来、外国人在住以来の事蹟にさかのぼつて上申したいと申し出て、三条の諒解を得たという。

これは宮内省が嘉永六年以来としたのは、ペリーのいわゆる黒船来航以来を幕末維新史の始まりとしたと解すれば、琉球をかかえる薩藩では、弘化元年にさかのぼるべきだと考えたからであろう。弘化元年三月には、琉球運天港にフランス艦アルクメーヌ号が来航して、通信貿易布教を要求し、拒否されると宣教師フォカードを残してアルクメーヌ号は出港してしまつた。こうしてフォカードは強引に琉球居住を始めるわけであるが、これを見習つたイギリスでも、弘化三年宣教師ベツテルハイムを上陸居住させて、船は出港してしまつた。その処理に世子島津斉彬が帰国するのであるが、こういうことをみる時、薩摩の黒船来航は弘化元年だとする認識が生まれて

も当然で、薩藩の国事執筆の発端を、九年間さかのぼらせたいと考えたものようである。

とするとこの弘化元年は斉興の治世下である。自然斉興史料も編集の対象になったわけである。

東郷重持によると、既に明治十八年市来が「照国公御伝」二十巻を久光に提出した時、

御一代の伝記のみにては前後の関連を欠くを以て、尚御二三代に遡りて、調査を為さざるを得ざるの理由を言上したりしに、両公にも御同感にて、尚御手許御保蔵の書類をも御下げになり、「〔編集方御取設願末〕」という。すなわち「旧邦秘録」編集当時から、斉彬より二三代さかのぼることが考えられていたのである。その意味は少なくとも、斉宣時代までさかのぼるべしと考えられていたことになる。

こういう認識のもとに出発した「国事執筆史料」の編集であるので、その一環が斉宣・斉興と藩主別に区分されて、それぞれ「斉宣公史料」「斉興公史料」というようにまとめられたもの、と理解してよさそうである。

それにしてもここに収められた内容からみる時、斉宣関係の史料は余りにも貧弱である。当時一方には前述の如く平田宗高による斉宣譜・斉興譜の編集が進行中であった。しかも「国事執筆史料」の編集は、忠義・久光時代を中心に、斉彬から斉興、更に斉宣へと遡及する形をとって、斉宣には充分手が及ばなかったこと、それに加えて、斉宣治世中の不幸なハイライト、樺山主税・秩父太郎らによる文化度の藩制改革については、

樺山・秩父勤役中取扱ノ儀ハ、何モ御取用ニ不相成候付、諸向帳留等モ都テ焼捨申渡置候処、別冊並別紙之通得差図候向モ有之、夫々ヶ条書ニ附紙ヲ以申渡通ニ候、右ニ付テハ、不得差図向モ此節申渡通心得、諸事同様可取計旨可致承達事、

五月

信濃

(斉宣公史料二巻 文書番号四四)

とある通り、一切の関係文書の焼却を命ぜられているので、関係史料の現存するものが少なかつたということ等から、その収録史料が少ないという結果になったものであろう。

その点から本巻に収められた「文化朋党実録」と「文化朋党一条」は、「斉宣公史料」の欠点を補う役割を果すであらう。

前者は藩校造士館の教授山本伝蔵正誼の著である。山本は文化朋党事件の際秩父らによって造士館教授を罷免された人物で、その件に関してはこの実録に詳しい。

「文化朋党一条」は、表紙に「秩父帳留」とあるように秩父家の記録で、その筆者は太郎の実父伊地知新太夫ではないかとも思われるが、断定はできない。

なお文化朋党事件に対比される嘉永朋党事件については、「斉彬公史料」第一巻・第四巻等に詳しい。

(芳 即正)

例 言

一本書は、東京大学史料編纂所蔵本「齊宣公史料」(二冊)「齊興公史料」(二十九冊)「文化朋党実録」(一冊)「文化朋党一条」(一冊)を底本とし、これを「鹿児島県史料島津齊宣齊興公史料」全一卷として刊行するものである。時代の範囲は、安永五年から嘉永三年までである。

一編集の体裁は、原則として原編者の体裁によった。

一原編者市米四郎の掲げた見出しはそのまま掲げ、補遺の見出しについては、新に校訂者が「 」を付して掲げた。

一見出しには一連番号を付した。一つの見出しが数種の内容を含むときは、小番号を文首に付した。

一固有名詞については、できるだけ正字を用いることにし、それ以外は常用漢字を使用した。また、特殊文字 \times (しめ)・ \surd (して)はそのまま用いた。

一仮名は、底本の体裁のとおりとした。変体仮名は普通の仮名に改めたが、江だけはそのまま用いた。

一平出・台頭・欠字および但書は、原則として底本の体裁によった。

一原編者による傍注および注記()は、原則として底本の体裁によった。新に注を付す場合は「 」を付して原編者注と区別した。

一年代については底本のままとした。

一人名については適宜傍注を付した。

一 本文には適宜読点「、」および並列点「・」を付した。

一 朱書・頭注および張紙は、「」で示し、「〔朱書〕」「〔頭注〕」「〔張紙〕」と注記した。ただし、後筆のものは削除した。

一 欠所部は原則として底本のままとし、解説困難な箇所原編者注本マ、と虫喰のある箇所は、マ、・虫喰と傍注を付した。

一 文意の通じない字または箇所には、「〔ママ〕」または「〔衍カ〕」・「〔○○カ〕」と傍注を付した。

一 重複文書については、注を付した。

(例) ○本文書は第九〇号文書と同文により略す。

島津齊宣公史料 目次

解題
例言

齊宣公史料

卷一 (安永五年三月～享和元年八月)

- 一 江戸諸払金及不時用金ニ関スル件 安永五年三月……………一
- 二 新規趣法変更ノ件 安永五年三月……………一
- 三 江戸諸払金ノ件 安永九年十二月……………一
- 四 幕府諸有司ニ太刀金代贈呈ノ件 天明六年六月……………一
- 五 御隠居差分高ノ件 天明七年正月……………一
- 六 御隠居入費支出ノ件 天明七年正月……………一
- 七 御目見元服等ニツキ進上物不納ノ件 天明七年九月……………一
- 八 上納金欠数治定ノ件 天明八年十月……………一
- 九 雅姫君手当金ノ件 寛政七年五月……………一
- 一〇 所帯方難渋ニ付諸事縮少ノ件 享和元年八月……………一

卷二（文化元年～同六年）

一	齊宣公諭書（風俗矯正ニ関スル件）	文化元年七月	六
二	同上家老諭達	文化元年九月	七
三	具足箱諸荷物等朱紋差留ノ件達書	文化元年九月	八
四	郡奉行久保平内左衛門上申書 諸郷農民ノ状況取調ノ件	文化元年九月十日	九
五	齊宣公改名ノ件達書	文化元年十月	二二
六	齊宣公改名ニツキ祝儀ノ件達書	文化元年十月	二二
七	公子武五郎君越前家引移ノ件	文化二年五月	二三
八	幕府ヨリ金米借用願認可ノ件	文化二年七月	二三
九	佐竹右京太夫息女大亡ノ件	文化二年七月	二三
二〇	吏員ノ不正行為禁止ノ件（齊宣公）	文化二年閏八月	二三
二一	同上家老諭達	文化二年十一月	二四
二二	窮士民ニ救助金下附ノ件	文化二年十一月	二四
二三	節約年限延長ノ件	文化二年十一月	二五
二四	城下給地高出米ノ件	文化二年十二月	二五
二五	所帯向難渋立直シノ件（齊宣公）	文化三年正月	二五
二六	同上家老諭達	文化三年正月	二六

二七	所帯向難渋ニツキ御隠居方ヨリ千兩支出ノ件	文化三年正月	二七	
二八	日高次左衛門勘定奉行へ提出セシ書	諸弘ニ関スル件	文化三年二月十九日	二七
二九	太守公参府ニ関スル件	文化三年七月	二九	
三〇	上屋敷御殿廻落成ニツキ御移転ノ件	文化三年七月	二九	
三一	仙臺通寶鑄錢通融ニ関スル件	文化三年十二月	三〇	
三二	太守公琉人召連御登城ノ件	文化三年十二月	三〇	
三三	太守公琉人召連御登城ノ件	文化四年正月	三〇	
三四	千眼寺及西田寺延命院寺格ニ関スル件	文化四年正月	三〇	
三五	於郁殿離縁ノ件	五月	三一	
三六	郁君生母ノ件	七月	三一	
三七	郁姫君近衛家縁組ノ件	八月	三一	
三八	重豪公論達		三一	
三九	文武ニ関スル件論書	正月	三一	
四〇	露国船取計方ニ関スル幕令ノ件	文化五年正月	三三	
四一	文武ニ関スル件家老論達	三月	三四	
四二	所帯向ニ関スル論達	九月	三四	
四三	砂糖方代官上申書附勝手方達書	余勢銀ニ関スル件	文化五年四月三日	三五

- 四四 樺山・秩父取扱文書破棄ノ件 五月……………三六
- 四五 大御前様逝去ニ付忌服ノ件 七月……………三六
- 四六 財政困難ニツキ諸事縮少励行ノ件 九月……………三六
- 四七 所帯向難渋ニツキ重出米ノ件 文化五年九月……………三七
- 四八 櫻田邸焼失ノ件 正月……………三八
- 四九 拝借米金返納ノ件 正月……………三八
- 五〇 三都借財返済ノ件 正月……………三八
- 五一 郡奉行久保平内左衛門上書 儉約ニ関スル件 文化六年正月……………三九
- 五二 教授黒田才之丞上書 儉約ニ関スル件 文化六年正月カ……………四四
- 五三 弓奉行面高源之丞上書 儉約ニ関スル件 文化六年正月……………四六
- 五四 岸喜右衛門外三名上書 儉約ニ関スル件 文化六年正月廿日……………四七
- 五五 桂太郎兵衛上書 儉約ニ関スル件 文化六年正月廿二日……………四八
- 五六 御勘定奉行上申書 上納米金ニ関スル件 文化六年二月十二日……………四九
- 五七 物奉行上申書 諸向代銀上納ニ関スル件 文化六年三月廿四日……………五〇
- 五八 砂糖方代官上申書附勝手方達書 余勢銀ニ関スル件 文化六年四月四日……………五〇
- 五九 御船奉行上申書 不納銀調ノ件 文化六年四月十八日……………五一
- 六〇 物奉行所所管ノ諸人借付金等ヲ表方ニ変更ノ件 文化六年四月……………五一

六一 御家督ニツキ内輪省略ノ件 四月……………五一

齊興公史料

卷一（文化元年～同七年）

六二 齊興公元服叙位任官ノ件 文化元年十月……………五四

六三 齊興公実名同唱遠慮ノ件 文化元年十月……………五五

六四 齊興公月次登城ノ件 文化元年十月……………五五

六五 齊興公元服ニツキ進上物ノ件 文化元年十一月……………五五

六六 齊興公元服官位口宣拝戴ノ件 文化二年正月……………五五

六七 齊興公御袖留濟ニツキ祝儀ノ件 文化三年九月……………五六

六八 齊興公御家督ニツキ御袖判二通 文化六年六月十七日……………五六

六九 同上家老諭達 文化六年七月……………五六

七〇 齊興公御家督允許ノ件 七月……………五六

七一 齊宣公隱居ニツキ改名ノ件 七月……………五七

七二 御隱居方公辺務向等送物ノ件 文化六年七月……………五七

七三 御隱居方所務代金表方へ提出ノ件 文化六年七月……………五七

七四 御隱居方所務代金提出ノ件 文化七年七月……………五八

七五	重豪公御高ニ関スル件	文化六年七月	五八
七六	高奉行土師 <small>孫兵衛</small> 上書	倭約ニ関スル吟味ノ件附勝手方申渡	五八
七七	<small>貴久・義久 義弘・家久</small> 四公御法事ノ件	文化七年正月	六〇
七八	齊興公少將任官ノ件	文化七年正月十三日	六〇
七九	虎千代君紀州家躰養子ノ件	文化七年正月	六一
八〇	齊興公ヨリ將軍ノ簾中へ献金ノ件	文化七年正月	六一
八一	齊興公任官ニ付進上物省略ノ件	文化七年正月	六一
八二	安姫君改名ニツキ同唱遠慮ノ件	文化七年正月	六一
八三	齊興公任官御礼ノ件	文化七年正月廿六日	六一
八四	規式上リ廃止ノ件	文化七年正月	六一
八五	中急飛脚ノ件	文化七年二月	六一
八六	芳蓮院・覺了院・深達院ノ御忌日ニ関スル件	文化七年二月	六一
八七	寛二郎君帰国願許可ノ件	文化七年二月	六三
八八	齊宣公諸社御参詣御代参ノ件	文化七年三月	六三
八九	齊宣公御歴代靈屋代拝ノ件	文化七年三月	六四
九〇	齊興公任官口宣拝戴ノ件	文化七年三月廿六日	六四
九一	重豪公諭達結党蔽科ノ件	文化七年三月	六五

九二	齊興公任官ノ件	文化七年三月	六五
九三	重豪公論達ノ趣意達書	文化七年四月	六五
九四	齊興公帰国ニツキ重豪公論達	文化七年四月	六五
九五	齊興公帰国ニツキ論達	文化七年四月	六五
九六	容貌言語等ニ関スル論達	文化七年四月	六五
九七	寛二郎君花岡家養子ニツキ諸文書書例ノ件	文化七年四月	六六
九八	寛二郎君花岡家養子ニツキ引越ノ件	文化七年四月	六六
九九	寛二郎君花岡家養子ニツキ祝儀ノ件	文化七年四月廿七日	六六
一〇〇	風俗言語等ニ関スル親論書	文化七年五月	六六
一〇一	若年者ノ言語風俗等ニ関スル親論書	文化七年	六七
一〇二	諸川御普請御用金ノ件	文化七年六月	六七
一〇三	齊興公任官口宣旨等到着ノ件	文化七年六月二日	六八
一〇四	口宣旨等到着ニツキ手当ノ件	文化七年六月三日	六八
一〇五	齊興公任官口宣等到来ニツキ手当ニ関スル件	文化七年六月	六八
一〇六	島津安藝名代出府ノ件	文化七年六月	六九
一〇七	齊宣公御隠居方支出金ノ件	文化七年七月	六九
一〇八	太守公御発駕定日ノ件	文化七年七月	六九

一〇九	太守公御發駕定日變更ノ件	文化七年九月	六九
一一〇	川邊・出水へ應場取立ノ件	文化七年八月	六九
一一一	重陽規式廃止ノ件	文化七年九月	七〇
一一二	御隱居家督改誓詞ノ件	文化七年十月	七〇
一一三	佐竹右京大夫母堂卒去ニツキ忌服ノ件	文化七年十一月	七〇
一一四	御初入部ニツキ御供行列等ノ件	文化七年十一月	七〇
一一五	東海道人馬賃錢割増ニ関スル幕令ノ件	文化七年十一月	七一
一一六	壽姫君誕生ノ件	文化七年十一月	七一
一一七	壽姫君同唱遠慮ノ件	文化七年十一月廿七日	七一
一一八	御供代出府ノ件	文化七年十一月	七一

卷二一（文化八年〜同九年）

一一九	島津登死去ニツキ重豪公忌服ノ件	文化八年正月	七四
一二〇	寛二郎君養子届出ノ件	文化八年正月	七四
一二一	富姫君夭亡ノ件	文化八年正月	七四
一二二	大目付以上登城ニ関スル件	文化八年二月	七四
一二三	〔異国船打払に關する記事〕	七五

一二四	御内證妹君死去ノ件	文化八年三月	七五
一二五	島津安藝御供ノ件	文化八年三月	七五
一二六	集会結党ニ関シ重豪公諭達ノ件	文化八年三月	七五
一二七	〔重豪公諭達ノ趣意達書〕	文化八年四月	七六
一二八	齊興公帰国ニツキ重豪公諭達ノ件	文化八年四月	七六
一二九	〔齊興公帰国ニツキ諭達〕	文化八年四月	七七
一三〇	寛二郎君進上物ノ件	文化八年四月	七七
一三一	麗岱院忌日精進ノ件	文化八年五月	七九
一三二	齊興公將軍家ヨリ拝領物ノ件	文化八年五月十七日	七九
一三三	御内證死去ノ件	文化八年六月晦日	七九
一三四	御内證死去ニツキ太守公忌服ノ件	文化八年六月	八〇
一三五	御内證法名ノ件	文化八年七月九日	八〇
一三六	齊宣公へ八朔進上ノ件	文化八年七月	八〇
一三七	重豪公湯治願許可ノ件	文化八年九月	八一
一三八	江戸上下面々人馬届出ノ件	文化八年七月	八一
一三九	重豪公江戸発駕ノ件	文化八年十月十三日	八一
一四〇	齊興公帰国ニツキ御着拝領ノ件	文化八年十月十七日	八一

- 〔重豪公江戸発駕ノ件〕
- 一四一 重豪公政務御介助ノ始末 文化八年十月十三日……………八二
- 一四二 〔齊興公帰国ニツキ御看拝領ノ件〕 文化八年十月十七日……………八二
- 一四三 重豪公政務御介助ノ始末……………八二
- 一四四 〔將軍家齊一橋穆翁ヲ大御所ト称セントス〕……………八二
- 一四五 〔賢章院侍臣某の追悼文・和歌〕……………八三
- 一四六 省之進君元服ニツキ進上物ノ件 文化八年十月……………八三
- 一四七 省之進君元服ニツキ進上物ノ件 文化八年十月……………八四
- 一四八 加治木長年寺へ参詣ノ件 文化八年十月……………八四
- 一四九 稻荷御参詣ノ件 文化八年十月……………八五
- 一五〇 春光院忌日変更ノ件 文化八年十一月……………八五
- 一五一 諏訪神事ニ関スル件 文化八年十一月……………八五
- 一五二 酒匂次郎左衛門社役勤ノ件 文化八年十一月……………八五
- 一五三 川上臨觴死去ニツキ重豪公忌服ノ件 文化八年十二月……………八六
- 一五四 重豪公帰府ノ件 文化八年十二月……………八六
- 一五五 島津若狭年中進上物ノ件 文化九年正月……………八六
- 一五六 雅姫君法名ノ件 文化九年二月……………八六
- 一五七 雅姫君重豪公七女、島津淡路守忠持夫人死去ニツキ忌服ノ件 文化九年二月……………八八

一五八	武五郎君死去ノ件	文化九年二月廿二日	八八
一五九	武五郎君死去ニツキ忌服ノ件	文化九年二月	八八
一六〇	武五郎君法名ノ件	文化九年二月	八八
一六一	阿久根町旅込ノ件	文化九年三月	八九
一六二	〔徳川十五代記抄〕	四月	八九
一六三	春光院忌日家老代参ノ件	文化九年五月	八九
一六四	朱紋 ^{〔挑カ〕} 焼灯使用心得ノ件	文化九年五月	九〇
一六五	御用日變更ノ件	文化九年五月	九〇
一六六	太守公増上寺火ノ番被命ノ件	文化九年五月廿六日	九〇
一六七	遠慮文字ノ件	文化九年六月	九一
一六八	於八百ノ方名唱ノ件	文化九年六月	九一
一六九	松前様ヨリ此御方様へ被仰進候御知ラセノ写	六月四日	九一
一七〇	道鑑公四百五十年回忌ノ件	文化九年七月四日	九二
一七一	公子方御台所御養ノ件	文化九年七月	九二
一七二	堀田豊前守御両敬被仰談ノ件	文化九年七月	九二
一七三	堀田備前守家族ノ件	文化九年七月	九三
一七四	靈舎院正忌日ノ件	文化九年八月	九三

卷三(文化十年〜十一年)

一七五	日奈久町焼失ニツキ宿賦ノ件	文化九年九月十二日	九三
一七六	重豪公九男桃次郎君 <small>後黒田美濃守長博公</small> 誕生ノ件	文化九年九月	九三
一七七	桃次郎君命名同唱遠慮ノ件	文化九年九月	九三
一七八	於八百ノ方御門通行ノ件	文化九年九月	九四
一七九	帰国御暇願ノ件	十月朔日	九四
一八〇	〔青山五郎右衛門切米被下置ノ件〕	十一月	九五
一八一	徒目付横目等ノ勤向ニ関スル件 (重豪公)	文化九年十二月	九五
一八二	〔井伊兵部少輔・土井大炊頭申渡写〕		九六
一八三	風俗其他ニツキ重豪公論達ノ件		九六
一八四	江戸邸ニ於ケル諸向二年詰ノ件	文化十年正月	九八
一八五	靈舎院殿忌日變更ノ件	文化十年三月	九八
一八六	齊宣公受厄ニツキ願文中止ノ件	文化十年四月	九九
一八七	増上寺火ノ番引継ギノ件	文化十年五月	九九
一八八	上府道中継人馬ノ件	文化十年六月	九九
一八九	光舎院殿法号ノ件	文化十年七月	一〇〇

一九〇	於八百ノ方取扱ノ件	文化十年九月……………	一〇〇
一九一	重豪公ノ諭達ニ対スル請書ノ件	文化十年……………	一〇〇
一九二	勝手方吟味役廃止ノ件	文化十年十月……………	一〇一
一九三	所帯向ニ関スル申出ノ件	文化十年十月……………	一〇一
一九四	御趣法方設置ノ件	文化十年十月……………	一〇一
一九五	閑姫及竹千代君誕生命名ノ件	文化十年十一月……………	一〇一
一九六	大將軍以下順称ノ件	文化十年十一月……………	一〇一
一九七	竹千代君同唱遠慮ノ件	文化十年十一月……………	一〇二
一九八	閑姫君御順及同唱遠慮ノ件	文化十年十一月……………	一〇二
一九九	竹千代呈書等認方ノ件	文化十年十一月……………	一〇二
二〇〇	治五郎君誕生御順及同唱遠慮ノ件	文化十年十二月廿六日……………	一〇二
二〇一	閑姫君縁組ノ件	文化十年十二月廿六日……………	一〇二
二〇二	於長殿縁組ノ件	文化十年十二月……………	一〇三
二〇三	閑姫君縁組引越ノ件	文化十一年正月……………	一〇三
二〇四	島津筑後守叙爵ノ件	文化十一年正月……………	一〇三
二〇五	白金今里邸取入ノ件	文化十一年二月……………	一〇四
二〇六	長姫君出府並ニ改名ノ件	文化十一年二月……………	一〇四

二〇七	竹千代君色直祝儀ニツキ三公拝領ノ件	文化十一年三月	一〇四
二〇八	処罰者役料米ノ件	文化十一年三月	一〇五
二〇九	白金今里邸引移期日ノ件	文化十一年	一〇五
二一〇	生駒大内藏養子並精進日通知ノ件	文化十一年三月	一〇五
二一一	参府道中人馬継立方ノ件	文化十一年四月	一〇六
二一二	啓之助君復縁ノ件	文化十一年四月	一〇七
二一三	啓之助君同唱遠慮並ニ聰姫君ト出府ノ件	文化十一年四月	一〇七
二一四	啓之助君齊宣公七男ト届出ノ件	文化十一年五月	一〇七
二一五	太守公増上寺火ノ番被命ノ報	文化十一年五月	一〇八
二一六	太守公登城ノ報	文化十一年五月	一〇八
二一七	年寄上席曾美死去ノ報	文化十一年六月十七日	一〇八
二一八	年寄曾美法号ノ件	文化十一年六月	一〇八
二一九	齊宣公白金邸引移後諸規定ノ件	文化十一年六月	一〇八
二二〇	聰姫君出府届出ノ件	文化十一年七月	一〇九
二二一	大風時諸役出府励行ノ件	文化十一年七月	一〇九
二二二	齊宣公白金邸引移ノ件	文化十一年七月	一〇九
二二三	聖堂积ノ件	文化十一年七月	一〇九

卷四（文化十年～同十四年）

二三四	聰姫・啓之助両君出発ノ件	文化十一年八月	一一〇
二二五	地廻供ノ中減少ノ件	文化十一年九月	一一〇
二二六	西方宿場ノ件	文化十一年八月廿三日	一一〇
二二七	竹千代逝去ノ報	文化十一年十月二日	一一〇
二二八	慈照院等忌日変更ノ件	文化十一年	一一〇
二二九	竹千代様御院号被仰渡ノ報	文化十一年十月	一一一
二三〇	達姫君誕生命名及同唱遠慮ノ件	文化十一年十一月	一一一
二三一	聰姫・啓之助両君着府ノ報	文化十一年十二月	一一一
二三二	公子姫ノ字ノ件	文化十一年十二月	一一一
二三三	太守公以下御名順ノ件	文化十一年	一一二
卷四（文化十年～同十四年）			
二三四	徳川十五代史	一一四
二三五	御用金ニ関スル達書	七月	一一五
二二六	〔徳川十五代記抄〕	七月	一一七
二二七	重豪公帰国ニ関スル諭書	十月朔日	一一七
二二八	同上家老諭達	十月	一一七

二三九	御趣法方創設達書	十月	一一七
二四〇	御趣法方役所名達書	十月	一一八
二四一	江戸落書	文化十年	一一八
二四二	御船手御作事方上申書	地金用古鍋・半釜ニ関スル件	文化十年閏十一月二十五日	一一九
二四三	〔物奉行方調〕	一一九
二四四	齊宣公御隠棲達書	一二五
二四五	士分ニツキ齊宣公諭達ノ件	文化十一年三月	一二五
二四六	白金邸称タル達書	一二五
二四七	齊宣公白金邸引移達書	一二六
二四八	齊宣公上使御給等引請届出ノ件	七月	一二六
二四九	〔江戸大火記事〕	一二六
二五〇	諸士ノ容貌・言語・風俗等ニツキ重豪公諭達ノ件	文化十二年三月	一二六
二五一	六部体ノ者取締ニ関スル達書	十一月	一二八
二五二	風俗・容貌・言語等ノ取締ニ関スル件	文化十二年十二月	一二九
二五三	同上ニツキ家老諭達	文化十三年正月	一二九
二五四	参考 種子島時昉日記抄	一三〇
二五五	重豪公財政改革ノ布令	十二月	一三〇

二五六	御用金上納ニ関スル達書	六月	一三一
二五七	郁姫君御名認方ニ関スル達書	正月	一三二
二五八	〔一橋治濟記事〕	三月廿八日	一三三
二五九	重豪公政事向ニ関スル諭書	六月	一三二
二六〇	齊興公御添書	七月	一三三
二六一	禄高課出米事件	八月	一三三
二六二	〔水野忠邦外二名転封ノ記事〕		一三四
二六三	風俗・言語・容貌等ニ関スル諭書	五月	一三四
二六四	〔堀田正敦蝦夷地派遣ノ聞書〕		一三五
二六五	六部並大社参詣廻国者取締ニ関スル達書	文化十四年七月	一三五
二六六	〔家慶公同唱遠慮ノ件〕	正月	一三六
二六七	安田助左衛門日記		一三六
卷五（文化元年〜同七年）				
二六八	齊宣公御隱名御届		一三八
二六九	改元通達	文化元年五月	一三八
二七〇	郁姫様近衛家御入興被為濟通達	四月	一三八

二七一	一橋民部卿御逝去通達	八月	一三八
二七二	齊興公御参府御登城通達	八月	一三八
二七三	郁姫様近衛家御縁組被為濟通達		一三九
二七四	御趣法方ノ名初テ設ケラル		一三九
二七五	久光公種子島藏人養子ニ付通達		一三九
二七六	重豪公被仰出書	二月	一四〇
二七七	前書ニ対シ齊興公仰出書	三月	一四〇
二七八	齊興公官位御昇進ニ付口宣等頂戴通達	三月	一四〇
二七九	久光公種子島藏人養子被仰出達書	三月	一四〇
二八〇	齊興公官位御昇進女房奉書到来通達	閏四月	一四一
二八一	齊興公被仰出書		一四一
二八二	土井大炊頭様ヨリ被成御渡候御書付	五月	一四一
二八三	齊宣公大崎へ御引移通達	閏四月	一四二
二八四	重豪公被仰出書	閏四月	一四三
二八五	御統料御減少通達	六月	一四三
二八六	同上ニツキ家老諭達	十月	一四三
二八七	重豪公病氣御快復御登城ノ通達	七月	一四四

二八八	重豪公御介助御辞退ニ付通達	十一月	一四五
二八九	齊興公月次御登城ノ通達	十一月	一四五
二九〇	御下国ニ付通達	一四五
二九一	花火取締達書	八月	一四六
二九二	諸士ノ風俗及財政縮少ニツキ重豪公諭達ノ件	一四六
二九三	町人等ノ長脇差取締達書	五月	一四八
二九四	御滞府ニツキ達書	一四八
二九五	文政七甲申七月寶島ニ於テ英人ヲ銃殺セシ始末	一四九
二九六	齊興公御夫人賢章院殿略伝 (因州池田家寄送)	一五八
卷六 (天保二年〜同六年)			
二九七	松前志摩守届書	三月	一六〇
二九八	鼠小僧捕縛書付	天保三年	一六四
二九九	遊芸身売ニ関スル取締令	天保二年十二月	一六六
三〇〇	〔高田屋金兵衛一件〕	天保三年七月廿五日	一六七
三〇一	式朱判金吹上令	天保三年十月	一七七
三〇二	灰吹銀令	一七八

三〇三	〔一橋御簾中・英姫詠草〕	一八一
三〇四	朝鮮人參ニ関スル令	一八二
三〇五	新曆頒行令 十月	一八二
三〇六	年貢米穀代納ニ関スル令 十月	一八三
三〇七	諸国産物売買ニ関スル令 十月	一八三
三〇八	諸国廻米船帆印ニ関スル令	一八四
三〇九	水戸烈公詠草	一八四
三一〇	琉球王謝恩使豐見城王子病死届書	一八五
三一 一	琉球讚儀官ニ関スル届書 十月	一八五
三一 二	御徒方萬年記 天保四年	一八六
卷七 (天保七年〜同八年)			
三二 三	鍋島様ヨリ御用番水野越前守殿へ御届書之写 三月十七日	一九八
三二 四	諸国人別改方ノ令達 三月	一九八
三二 五	水野越前守以下褒賞	二〇一
三二 六	辻切盜賊ニ関スル記事 天保七年四月十日	二一六
三二 七	上納金ニ関スル達書 (齊興公) 天保七年四月十六日	二一七

三二八	食物見世家数ノ儀ニ付触ノ件	天保七年五月八日	二二七
三二九	大判貯ノ儀ニ付御触ノ件	天保七年五月十六日	二一八
三三〇	瀬川采女妻文		二一九
三三一	竹島へ渡海一件		二二一
三三二	松平周防守家領没収ノ件		二三八
三三三	米穀直下ニ関スル令書	八月廿一日	二三九
三三四	同上	九月廿一日	二四〇
三三五	仙石家変事ニ関スル廻状		二四〇
三三六	蒲生郡郷右衛門書翰		二四五
三三七	齋藤彌九郎書翰		二五〇
三三八	齊昭ヨリ郡奉行並町奉行へ与フル親書		二五四
三三九	七月十七日五両金新吹布令	七月十七日	二五四
三三〇	古金銀引替布令		二五四
三三一	町奉行以下褒賞ノ件		二五五
三三二	丁酉豊作記事	天保八年	二五六
三三三	天保八年山川港ニ英艦渡来ノ事実	天保八年七月十日	二五六
三三四	藩士鳥居平八兄弟ニ西洋新式ノ砲術ヲ高島四郎太夫ニ伝習セシム		二五八

三三五 封内沿海之守備……………二六一

卷八（天保九年〜同十年）

三三六 江戸西城焼亡 天保九年三月……………二六二

三三七 種子島時助家記抄 天保九年四月十五日……………二六六

三三八 町触ノ件令達 戊五月廿四日……………二六七

三三九 江戸火災記事……………二六八

三四〇 於新番所前溜水野越前守殿御普請掛へ口達……………二七〇

三四一 節儉令 水野忠邦カ改革ノ令……………二七一

三四二 小判引替令 九月……………二七一

三四三 大阪堂島蜂之巢之巻抄〔坂カ〕……………二七二

三四四 齊興公宰相御叙任 十二月五日……………二七五

三四五 隠売女ノ儀布令 十二月……………二七五

三四六 大御所家齊公西丸御移徒 正月十日……………二七六

三四七 風刺記事 天保十年二月廿五日……………二七六

三四八 甘蔗作停止令 三月五日……………二八三

三四九 唐物商法ニ就テ幕府手当金ヲ下与ス 三月十一日……………二八三

三五〇	大野丹助報告書	二八三
三五一	参考 尾州家土上書 亥四月	二八七
三五二	〔西丸落成の件〕	二八九
三五三	竹姫君記事	二九一
三五四	中納言様相統ニ関スル件	二九二
三五五	家齊公仙洞御所ニ数寄屋ヲ献ス	二九四
三五六	〔澄姫君記事〕 七月一日	二九四
三五七	〔封回状〕 天保十年八月十六日	二九四
三五八	錢相場御触書写 十二月八日	二九六
卷九 (天保十一年〜同十二年)		
三五九	安田助左衛門日記 天保十一年	二九九
三六〇	御徒方萬年記百十抄 天保十一年十二月二十五日	三〇〇
三六一	高島流秘卷 戊申正月廿八日	三〇〇
三六二	高島四郎太夫其他連類所刑ノ報	三一四
三六三	〔家齊公薨去記事〕 閏正月晦日	三二九
三六四	水野越前守 <small>忠邦</small> 改革布令 五月十七日	三二九

三六五	小十人本 田左京組 大野權之丞御仕置	六月十日	三三三〇
三六六	越前守殿御書取	六月	三三三〇
三六七	越前守殿御渡	七月十三日	三三三〇
三六八	高家衆へ達書	九月十七日	三三三〇
三六九	幕府非常節儉ヲ令ス	九月十八日	三三三一
三七〇	田米ノ令	十月十日	三三三一
三七一	幕府節儉令	十月二十五日	三三三一
三七二	水野越前守殿ヨリ町奉行へ御渡御書付		三三三三
三七三	京都町触	十二月十八日	三三三五
三七四	女髪結ニ関スル令	十二月	三三三五
三七五	琉球人参府ニ就キ拜借金	七月二日	三三三六
三七六	分銅改達書	六月廿八日	三三三六

卷十(天保十三年)

三七七	年頭祝儀(島津久明家記抄)	正月十五日	三三三八
三七八	廣大院様従一位御叙任	二月朔日	三三三九
三七九	水野越前守(忠邦)大改革	三月	三三四〇

三八〇	〔松崎懺堂記事〕	三月十一日	三三一
三八一	島津久明家記鈔	三月十八日	三四二
三八二	洋式砲術拡張ノ由来（石室秘稿鈔、以下同）		三四二
三八三	高島四郎太夫ノ砲術採用（石室秘稿鈔）		三四二
三八四	高島四郎太夫、新納主税ニ海備ノ必要ナルヲ説ク（海老原清熙記録）		三四二
三八五	加州金澤商人外国密商所刑		三四二
三八六	改曆布告	三月十九日	三四二
三八七	参考 島津久明家記鈔		三四三
三八八	御意之覚	寅三月	三四三
三八九	洋式大小砲術上覽	三月十八日	三四三
三九〇	近衛家精姫君及ヒ岡山公御逝去ノ報	四月廿六日	三四四
三九一	松平伊豫守卒去（岡山城主、齊彬公御二弟）	四月晦日	三四五
三九二	大熊善太郎等賞与	寅五月二日	三四五
三九三	大慈公御遺物	五月二十日	三四六
三九四	島津和泉旅行	六月中旬	三四六
三九五	高島砲術伝授制限ヲ解ク	六月十一日	三四六
三九六	島津和泉相談掛リ	六月中旬	三四六

三九七	島津和泉御名代	六月中旬	三三七
三九八	御代参	六月廿八日	三三七
三九九	拝借金ノ件	七月	三四七
四〇〇	松平大隅守拝借金	七月二日	三四七
四〇一	琉球謝恩使登營	十一月十九日	三四八
四〇二	参考 江田平藏家記抄	天保十三年八月	三四八
四〇三	琉球人登營行列		三四八
四〇四	種子島六郎御用掛拜命	七月廿五日	三六〇
四〇五	異国船処分変更令	七月二十六日	三六〇
四〇六	種子島六郎御供拜命	寅八月七日	三六一
四〇七	〔銭相場に關する達書〕	八月十五日	三六一
四〇八	首途	八月廿一日	三六二
四〇九	齊興公琉球王子ヲ率ヒテ出府ス	天保十三年	三六二
四一〇	参考 鎌田正純日記抄	天保十三年〜天保十五年	三六二
四一一	百姓之掟	九月十八日	三六三
四一二	異国船渡来備防令	九月十八日	三六四
四一三	種子島六郎代参	九月廿三日	三六四

四二四	種子島六郎ノ從者増加	九月晦日	三六五
四二五	異国船渡来ノ節防禦方達書	三六五
四二六	二ノ宮尊徳被召出	十月六日	三六五
四二七	発途宿割	十月十五日	三六五
四二八	戯作書停止達書	十月十六日	三六六
四二九	異国船擬造ノ帆ヲ止ム	三六六
四三〇	〔町名変更に関する達〕	十一月十八日	三六六
四三一	御前様御登城	十一月	三六七
四三二	海防ノ為拝借金	十一月廿九日	三六八
四三三	墮胎ノ惡習禁令	十一月晦日	三六八
四三四	報七郎殿御下着祝詞	十二月八日	三六八
四三五	種子島六郎ニ出府	寅十二月九日	三六九
四三六	寶鏡院へ月次登城報知	十二月十九日	三六九
四三七	御機嫌伺	三六九
四三八	井伊家參勤供列ノ美麗ヲ誠ム	十二月廿六日	三七〇
四三九	天文方山路彌左衛門等所刑	十二月廿七日	三七〇

卷十一 (天保十四年)

四三〇	総覽 天保十四年	三七一
四三一	高島四郎太夫及連類者江戸へ護送	卯正月十八日	三七八
四三二	管絃御式御聴聞之次第 (近衛家蔵鈔)	正月十九日	三八三
四三三	白氣西方ニ出頭 (道島正亮紀事鈔)	天保十四年二月	三八三
四三四	参考 鎌田正純日記鈔	天保十四年三月	三八六
四三五	所帯向ニ関スル論達	三月	三八六
四三六	参考 將軍日光社參記鈔	三八九
四三七	太守様御着城	天保十四年五月十一日	三九〇
四三八	水戸中納言殿政務勉勵ヲ賞セラル	五月	三九〇
四三九	〔鎌田正純日記〕	六月十五日	三九一
四四〇	川越藩へノ達書	卯六月	三九一
四四一	大坂商賈へ御用金調達諭令	卯七月	三九二
四四二	参考 安田助左衛門日記鈔	天保十四年	三九三
四四三	〔某日記〕	天保十四年九月九日	三九三
四四四	〔鎌田正純日記〕	閏九月十一日	三九四
四四五	〔水野忠邦失脚に關する風聞上申〕	閏九月十六日	三九四

卷十二（弘化元年）

四四六	島津久明家記鈔	天保十四年	三九五
四四七	〔鎌田正純日記〕	十二月廿一日	三九五
四四八	江戸当時流行俚謡	三九六
四四九	当時柳營諸役人数	中奥御番除之	三九七
四五〇	和蘭国王書翰	三九八
四五一	総覽	弘化元年	四〇六
四五二	藩士鳥居平八郎兄弟ニ西洋新式ノ銃砲術ヲ高島四郎太夫ニ伝習セシム	四〇八
四五三	参考〔高島四郎太夫ノ砲術伝授制限ヲ解ク〕	天保十三年六月十一日	四〇八
四五四	封内沿岸ノ守備ヲ敵ニス	四〇八
四五五	水戸中納言殿蘭学及ヒ邪宗教ノ弊媒意見	五月九日	四〇九
四五六	参考 安田助左衛門紀事抄	弘化元年	四一〇
四五七	齊興公御参府	二月六日	四一一
四五八	島津和泉ニ江戸在勤ヲ命ス	四一一
四五九	齊興公江戸御着ノ報	四月十九日	四一三
四六〇	南部侯御昇進ノ報	四月廿九日	四一四

四六一	島津和泉五節句待遇達	弘化四年五月廿一日	四一四
四六二	齊興公日光御社参	五月	四一四
四六三	水戸中納言殿致仕謹慎ノ幕達	五月六日	四一五
四六四	琉球国へ異国船渡来ヲ御近親へ報知	五月十六日	四一六
四六五	参考 鎌田正純日記抄	弘化元年	四一七
四六六	戸田家息女逝去ノ報	十一月七日	四二〇
四六七	桑原正辰異国船渡来ニ付易断		四二〇
四六八	永楽銭通用停止布達		四二〇
四六九	参考 金銀製造所概況		四二一
四七〇	京都高瀬舟ノ由来		四二二
四七一	法元元凱 <small>通称六左衛門</small> 琉球秘策	弘化元年	四二三
卷十三 (弘化元年)			
四七二	和蘭船長崎へ入湊	七月二日	四三八
四七三	和蘭船入湊ニ付出張ノ届	七月三日	四三八
四七四	長崎奉行ヨリ支配向へ触達	七月	四三八
四七五	伊澤美作守和蘭船処分ニ係リ指揮ヲ請フ	辰七月	四三八

四七六	長崎奉行伊澤美作守ノ届	七月三日	四四一
四七七	長崎聞役和蘭国使節船渡来ノ形況報告	辰七月三日	四四一
四七八	封内儉約衣服制度	七月八日	四四二
四七九	鹿兒島海岸警衛方ノ通知並回答	辰七月	四四八
四八〇	小笠原佐渡守ヨリ阿部伊勢守へ届	七月	四四九
四八一	奥四郎ノ長崎事情報告書	辰七月十二日	四五〇
四八二	和蘭国王書翰ノ和解	四五二
四八三	大村藩ノ長崎報告	七月十七日	四五六
四八四	齊彬公在琉佛人ノ情況探問	七月	四五七
四八五	齊彬公密ニ銃砲兵書ノ購求ヲ試ム	四五七
四八六	武器調査ノ令	七月廿一日	四五八
四八七	和蘭国使節船渡航ニ係ル書類通知	四五八
四八八	大和守伊澤美作守へ達	十月	四五九
四八九	大和守大目付・目付へ達	十月九日	四六〇
四九〇	和蘭国使節船実況見聞ニ係ル照会	四六〇
四九一	和蘭国使節船渡来ニ係ル堀大和守達送付	四六〇
四九二	水戸藩士武田彦九郎老候ノ冤ヲ訴フ	十月廿日	四六一

四九三	文政鑄造ノ草字二分金等停止	十月廿九日	四六三
四九四	本丸造営費減額上納方	十一月三日	四六三
四九五	琉球渡海ノ役人心得方照会	四六三
四九六	廣大院殿薨去	十一月十日	四六四
四九七	水戸中納言ノ謹慎宥免	十一月十六日	四六五
四九八	改元勘文	十一月廿一日	四六五
四九九	和蘭船渡来ニ係ル書類送付	辰十二月	四六五
五〇〇	改元令	弘化元年十二月	四六六
五〇一	江戸本丸城造営費献納ニ関カル藩情	四六七

卷十四 (弘化二年)

五〇二	総覧	弘化二年	四六九
五〇三	將軍家令条鈔	弘化二年	四七三
五〇四	齊彬公史藩内事項総覧	弘化二年	四七九

卷十五 (弘化三年)

五〇五	総覧	弘化三年	四九二
-----	----	------	-----

五〇六	仁孝天皇崩御ノ報	四九七
五〇七	和宮御生誕 閏五月十日	四九七
五〇八	米国軍艦浦賀ニ渡来通信貿易ヲ請フ 弘化三年閏五月廿七日	四九八
五〇九	各藩狼狽武備ヲ修ム	四九八
五一〇	洋変ノ小寇ヲ不侮云云ノ勅命 八月十九日	四九九
五一一	外国処分ノ令	四九九
五一二	異国渡来届振	五〇〇
五一三	漂流人列レ渡リ云云、和蘭人申立長崎聞役届書 天保九年十月	五〇二
五一四	和蘭人風説書和解	五〇三
五一一	外国船処分長崎奉行意見	五〇三
五一六	米国軍艦浦賀ニ来リ貿易ヲ乞フ 閏五月廿七日	五〇七
五二七	松平下總守伺書 六月廿一日	五〇七
五二八	参考 当時ノ形勢	五一一
五二九	幕府松平大和守・同下總守浦賀警衛ヲ勞フ 八月三日	五一一
五二〇	異国入相当時ノ概況 弘化三年	五二二

五二一	国老島津石見ニ至急帰国ヲ命ス	午七月	五二四
五二二	公卿中へ達書	五二四
五二三	無名氏当時水戸ヲ評論ス	五二四
五二四	当時封内金匱	五二五
五二五	長州侯賞誉	四月廿三日	五二五
五二六	細川侯賞誉	五月十八日	五二五
五二七	齊興公生母寶鏡院殿卒去	五二六
五二八	二月田御茶屋焼亡	同年十一月	五二六
五二九	齊彬公歳末ノ賀ヲ受玉フ	十二月廿八日	五二六
五三〇	齊興・齊彬二公帰国ニ就謝恩御登營	六月朔日	五二六
五三一	琉球へ英船渡来ノ報	閏四月十七日	五二七
五三二	長崎へ和蘭国使節船渡来ノ報	五二八
五三三	軍役高改正御小姓組頭ニ係ヲ命ス	十二月八日	五二〇
五三四	朝鮮国ニ異国船来ル宗對馬守届書	<small>長崎関 役報告</small>	五二〇
五三五	参考 鎌田正純日記抄	十二月二拾八日	五二一
五三六	百目以上ノ砲新製届出令	十一月九日	五二二
五三七	長崎出張御役者挑灯標章	五二二

五三八 禄高改正之始末 五二二

五三九 御一門家及門葉家所有石高 五三一

五四〇 門閥其他御目見以上総数 五三二

五四一 薩隅日三州諸郷士家部及ヒ石高 五三六

卷十七 (弘化四年)

五四二 総覧 弘化四年 五四一

五四三 参考 弘化四年丁未四月九日 (黒田家書類抄) 五四六

五四四 島津忠教国務参与 四月十二日 五五〇

五四五 〔成規調査宗旨改及ヒ鉄砲証文ニ関スル記事〕 五五一

卷十八 (弘化四年)

五四六 参考 種子島時昉日記抄 五五二

五四七 参考 安田助左衛門日記抄 弘化四年 五五四

卷十九 (弘化四年)

五四八 軍制改革ノ諸令 十月 五七一

五四九 軍賦改正標御章図 十二月 五七八

五五〇	軍役高改正御小性組頭ニ係ヲ命ス	十二月八日	五八七
五五一	朝鮮国へ異国船来ル宗對馬守届書 <small>長崎關 役報告</small>	五八七
五五二	参考 鎌田正純日記抄	十二月廿八日	五八七
五五三	百目以上ノ砲新製届出令	十一月九日	五八七
五五四	友野市助ニ御軍役掛ヲ命ス	十一月廿五日	五八七

卷二十 (弘化四年)

五五五	禄高改正布告	五八八
五五六	参考 鎌田正純日記抄	弘化四年	五八八

卷二十一 (弘化四年)

五五七	清国貿易品請願	六〇三
五五八	琉球ニ於テ外国人処分嫌疑弁解ノ概略	弘化四年八月	六〇四
五五九	江戸往来ニ就テ贈答品訓令	十二月	六〇九
五六〇	乘輿製造制限	十二月	六〇九
五六一	洋式砲術奨励達書	正月	六一〇
五六二	琉球国ニ於テ外国人処分示達ニ対スル照会	六一一

五六三	在琉外国人退去処分上	六二二
五六四	新製大砲試験（和蘭新式）	六一四
五六五	米国人被害風説 申七月	六一五
五六六	種痘ノ初 七月	六一五
五六七	松平大隅守届書 弘化四年八月十五日	六一八
五六八	松平大隅守届書 弘化四年八月十五日	六一八
五六九	軍制改革ノ諸令 十月	六一九
五七〇	御軍賦改正旗章図	六一九
卷二十二（嘉永元年）		
五七一	総覧 嘉永元年	六二二
五七二	諏訪甚六履歴 参考	六二六
五七三	齊興公日隅州海岸ヲ御巡見 嘉永元年二月	六二七
五七四	喜界島ニ米国捕鯨船来ル 三月廿四日	六二七
五七五	德島 <small>〔之脱カ〕</small> ニ異国船来リ海陸ヲ測量ス 四月六日	六二七
五七六	德島 <small>〔之脱カ〕</small> ニ英国軍艦来リテ測量ス 同月八日	六二七
五七七	外異ヲ掃ハント伊勢大廟ニ禱ラセ玉フ 四月五日	六二七

五七八	所司代ヲシテ辺防ヲ幕府ニ令シ玉フ	五月八日	六二八
五七九	般若院新築異賊降伏ヲ祈ラシム	六二八
五八〇	第二公子寛之助君御天亡布告	五月四日	六二八
五八一	二階堂志津馬在府中乘輿願	六月六日	六二八
五八二	市田右近ヲ譴責ス	六月十五日	六二九
五八三	参考 江田平藏日記抄	嘉永元年六月十九日	六三〇
五八四	参考 種子島時助記事抄	申正月晦日	六三〇
五八五	松前侯ヨリ通知書 <small>留守居夜所日記抄</small>	三月	六三二
五八六	参考 鎌田正純家記抄	嘉永元年	六三四
五八七	参考 全上日記抄	六三四
五八八	参考 江田平藏日記抄	嘉永元年二月	六三六
五八九	参考 黒田家々記抄	六三七
五九〇	参考 上杉家々記抄	嘉永元年四月	六三九
五九一	和蘭人風説書	申六月廿九日	六三九
五九二	大森村ニ大筒場創設布告	五月	六四〇
五九三	柳營大小吏員及大小名総計	六四一
五九四	参考 平田宗高家記抄	六四二

五九五	参考 鎌田正純日記	嘉永二年	六四五
五九六	参考 安田助左衛門日記抄	六五〇
五九七	示現流伝書差上	嘉永元年七月九日	六五三
五九八	嘉永元申年江戸蕃殺在高(吹塵録)	六五四
五九九	近衛家御用部屋日記抄	嘉永元年	六五四
六〇〇	〔幕令数件〕	六六〇
六〇一	樺山資之日記鈔	六六二
卷二十三(嘉永元年)			
六〇二	齊彬公御事蹟総覧	嘉永元年	六六四
六〇三	齊興公日隅州海岸御巡視	嘉永元年二月三日	六六四
六〇四	喜界島ニ米国捕鯨船来ル	三月廿四日	六六四
六〇五	德島ニ異国船来リ海陸ヲ測量ス	四月六日	六六四
六〇六	德島ニ英国軍艦来リテ測量ス	四月八日	六六四
六〇七	外異ヲ掃ハント伊勢大廟ニ禱ラセ玉フ	四月五日	六六四
六〇八	松平玄蕃頭藩士ノ野外演習ヲ幕府ニ請フ	五月八日	六六四
六〇九	般若院新築異賊降伏ヲ祈ラシム	六六四

六二〇	第二公子寛之助君御大亡布告	五月四日	六六四
六一一	二階堂志津馬在府中乘輿願	六月六日	六六四
六二二	市田右近ヲ譴責ス	六月十五日	六六五
六二三	参考 江田平藏日記抄	嘉永元年六月十九日	六六五
六二四	参考 種子島時昉記事抄	正月晦日	六六五
六一五	松前侯ヨリ通知書 <small>留守居役所日記抄</small>	三月	六六五
六一六	参考 鎌田正純家記抄	嘉永元年	六六五
六一七	参考 鎌田正純日記抄	嘉永元年	六六五
六一八	参考 江田平藏日記抄	嘉永元年二月	六六五
六一九	参考 黒田家々記抄	六六五
六二〇	参考 上杉家記抄	嘉永元年四月	六六五
六二一	和蘭人風説書	申六月廿九日	六六五
六二二	大森村ニ大筒場創設布告	五月	六六五
六二三	柳營大小吏員及大小名総計	六六五
六二四	参考 平田宗高家記抄	六六六

目次	
卷二十六（嘉永二年）	
六三七 総覧 嘉永二年	七〇五

六二五	海防ニ付地頭職ノ転命	嘉永元年正月十一日	六六七
六二六	齊興公大隅地方巡視	二月三日	六六八
六二七	参考 鎌田正純日記抄	嘉永元年二月	六六八
六二八	島津周防ニ海防掛ヲ命ス		六七三
六二九	御軍賦改正令	八月十八日	六七五

卷二十五（嘉永元年）

六三〇	齊興公封内海岸巡視之照会		六九〇
六三一	御巡見御宿割		六九二
六三二	齊興公封内海岸御巡視操練其他幕府へ具申ノ体裁照会	申三月	六九七
六三三	齊興公海岸警備及ヒ砲台築造等具申		六九八
六三四	齊興公封内海岸巡視ノ照会	申七月七日	六九九
六三五	海岸守備命令及ヒ人名	申九月廿三日	六九九
六三六	山川港及ヒ長崎表出張命令	申九月廿三日	七〇一

六三八	琉球王使將軍ニ謁ス	七〇八
六三九	洋法医禁令	七一〇
六四〇	洋式大操練 四月廿八日	七一〇
六四一	齊彬公春嶽公へ御書翰 卯月十九日	七二〇
六四二	淡路守三ヶ国条約書写奏聞云々閣老へ教書 九月廿二日	七二〇
六四三	禁裏附都筑駿河守ヲシテ外国事情奏上云云ノ書 十月廿八日	七二一
六四四	参考 当時ノ概況 嘉永二年	七二一
六四五	参考 黒田家々記抄 (月日ニ関セス本書ノ儘)	七二二

卷二十七 (嘉永二年)

六四六	江戸邸在勤ノ輩出入制限令 正月九日	七二二
六四七	知行高分限令 正月九日	七二三
六四八	諸士禄高内山林地調査令 正月廿七日	七二三
六四九	御一門家及ヒ大身分禄高分限令 正月	七二四
六五〇	給地高性質及売買法令 二月晦日	七二六
六五一	分家ノ者禄高所分ノ令 三月廿七日	七二六
六五二	給地高改正期限延期達書 三月	七二七

六五三	給地高払下布達	四月廿五日	七二七
六五四	小普請銀滞納者禄高返下等ノ達書	四月	七二八
六五五	寺社局在金拝借返上達書	五月	七二九
六五六	諸士禄高ニ課スル出米納収布達	五月	七二九
六五七	寄合以上ノ輩風俗匡正及ヒ軍務調否ノ達書	六月	七三〇
六五八	禄高所有分限令	八月	七三一
六五九	全上追加布令	八月十四日	七三一
六六〇	軍役出米参考		七三三
六六一	参考 安田助左衛門日記抄 (御軍賦役職ヲ以テ給地高改正兼勤ナル故日記全文ヲ鈔シテ参考ニ供ス)		七三七
	嘉永二年		七三七
六六二	参考 鎌田正純日記鈔	嘉永二年	七三九
卷二十八 (嘉永二年)			
六六三	伊達宗紀公水戸老公江親書 (別紙送ス)	六月八日	七五三
六六四	安田助右衛門日記鈔 ^{〔左〕}	嘉永二年	七五四
六六五	海岸防禦其外砲術専用ノ御手当	五月	七五五
六六六	唐船漂着取扱令	五月	七五五

六六七	白帆ノ異国船渡来且隣領異変之節取計之次第諸郷へ布達	五月	七五六
六六八	全上	五月	七五七
六六九	末川近江へ軍役掛ヲ命ス	五月	七五九
六七〇	軍制改革布告	五月	七五九
六七一	軍役方設立布告	五月	七六〇
六七二	軍師引取	五月	七六〇
六七三	武器取扱	五月	七六〇
六七四	新規役名	五月	七六〇
六七五	宗門唐船取扱	五月	七六一
六七六	異国船掛引取	五月	七六一
六七七	御軍役方召直	五月	七六一
六七八	国境警備布達	申十月	七六二
六七九	齊興公御参府御猶予中山王へ報告	十二月	七六三
六八〇	参考 樺山資之日記鈔	嘉永二年	七六三
六八一	旧貨幣交換令	嘉永二年	七六六
六八二	近衛家御用部屋日記鈔	嘉永二年	七六七
六八三	二年酉三月十八日將軍小金原ニライテ御狩ノ六歌仙		七七二

卷二十九（嘉永三年）

六八四	総覧 嘉永三年	七七七
六八五	江戸市街大火 二月五日	七七九
六八六	朝廷七社七大大寺撰夷御祈禱 嘉永三年四月	七八〇
六八七	江戸尚齡会	七八一
六八八	当時ノ物価 江戸市中	七八一
六八九	齊興公御退隱ニ際シ琉使 ^{〔玉〕} 王川王子へ訓令 嘉永三年十二月	七八一
六九〇	国老島津將曹齊興公御隱居 齊彬公御知政御予定ノ趣ヲ中山王ニ報告ス 十二月十二日	七八二
六九一	江戸府内各藩邸ニ於テ大小砲操練ヲ許ス 九月	七八三
六九二	十二月廿九日阿部伊勢守様御渡大目付堀伊豆守達	七八三
六九三	調練之連歌（当時ノ情況ヲ穿ツ）	七八四
六九四	齊彬公水戸中納言へ御往復書第一 ^{三月朔日} 嘉永三年三月朔日	七八四
六九五	全上第二 四月廿四日	七八五
六九六	全上第三 五月廿一日	七八五
六九七	全上第三 ^{〔四〕} 五月廿一日	七八七
六九八	全上第五 五月	七八七
六九九	全上第六 八月廿七日	七八八

七〇〇	全上第七	七七八
七〇一	異国処分變更布令	七八九
七〇二	水野越前守外国船攘斥ヲ止ム	七八九
七〇三	齊彬公伊達公ニ贈ル書 九月	七八九
七〇四	島津又六郎家記鈔 十二月	七九一
七〇五	齊興公御城下土踊ノ再興 五月廿三日	七九一
七〇六	参考 安田助左衛門日記抄 嘉永三年	七九二
七〇七	参考 鎌田正純所藏	七九四
七〇八	参考 黒田家 <small>福</small> 家記抄	七九四
七〇九	参考 碓山將曹種子島六郎へ手翰 四月廿六日	七九六
七一〇	参考 島津久明家記抄	七九八
七一	嘉永三庚戌六月二十八日琉球国在留佛人退去事件届書	七九九
七二	嘉永三年七月八日琉球国在留佛人引払云々届書	八〇〇
七三	嘉永三年七月八日島津豊後・末川近江ヨリ島津石見江内分申遣小子江差出候書面左之通	八〇一
七四	齊彬公伊達宗城公へ御書 八月廿三日	八〇一
七五	参考 島津將曹家記抄	八〇五
七六	琉球国在留佛人退去届書 六月廿八日	八〇六

七二七	嘉永三年七月八日琉球国滞留佛人引払届書	八〇六
七二八	嘉永三年七月八日島津豊後・末川近江ヨリ島津石見へ内分申遣小子へ差出シ候書面左之通	八〇六
七二九	齊彬公伊達宗城公へ与ル書 八月廿三日	八〇六
七三〇	旧貨幣引換 嘉永三年十月廿三日	八〇六
七三一	考証 碓山將曹種子島六郎へ与ル手翰 四月廿六日	八〇六
七三二	在琉外国人退去布告 正月晦日	八〇七
七三三	〔浦添王子外三名連署書狀断簡〕 四月十六日	八〇七
	文化朋党実録	八〇八
	文化朋党一条	八八五

〔表紙〕

齊宣公史料

市來四郎編
自安永五年三月
至享和元年八月

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事缺掌史料（紙数一六枚）」の記載あり〕

- 一 江戸諸払金及不時用金ニ関スル件 安永五年三月
- 一 新規趣法変更ノ件 安永五年三月
- 一 江戸諸払金ノ件 安永九年十二月
- 一 幕府諸有司ニ太刀金代贈呈ノ件 天明六年六月
- 一 御隠居差分高ノ件 天明七年正月
- 一 御隠居入費支出ノ件 天明七年正月
- 一 御目見元服等ニツキ進上物不納ノ件 天明七年九月
- 一 上納金欠敷治定ノ件 天明八年十月

- 一 雅姫君手当金ノ件 寛政七年五月
- 一 所帯方難渋ニツキ諸事縮少ノ件 享和元年八月

- 一 江戸諸払金及不時用金ニ関スル件 安永五年三月

一 当御在府十三ヶ月ニシテ、江戸万端ノ諸御払金二万三千三百兩余並不時御用金六千六百六十六兩余、両月分ノ割前月中大坂ヨリ江戸へ一所ニ差上、其後ハ一ヶ月分ノ配当金無怠月々差上候様被仰付候旨、右ニ付金子支配方等ノ儀トモ段々被仰渡、

三月

- 二 新規趣法変更ノ件 安永五年三月

一 当御在府十三ヶ月江戸万端諸御払金二万三千三百四兩余並不叶御用金六千六百六十六兩余、両月分ノ割前月中大坂ヨリ江戸へ一所ニ差上、其後ハ一ヶ月分ノ配当金無怠月々差上候様被仰付候、左候へハ始終一ヶ月分ハ浮ニ相成筋ニ候、勿論可成程為替金ヲ以御側御用人

宛ニテ差登由於江戸右兩株ノ御金ハ御側御用人支配ニ

十二月

テ、摸合方並帖佐与方御賦銀ノ儀ハ、是迄ノ通物奉行

受込ニ被仰付候、且又江戸ニテ 成御払金ハ其訳時々

向々ヨリ委細御側御用人方へ申出、御金申請不 成御

払ハ月末右同断申出、一ヶ月ツ、御払方屹ト無滞相仕

廻、其首尾細々申出置候ハ、翌月頭ニハ可被 聞召

上候、何レトモ一ヶ月分御配当ノ欠数ニテ是非可被相

濟候、先右通当御在府中被仰付御振合、夫ヨリ段々御

省略可被仰付候、尤前条金子向々へ配当ノ欠数ハ、後

達テ可申渡候、右通此節ヨリ新規御趣法被相替候条、

御勝手方へ相達、可承向へ可申渡候、
三月 (山岡久澄) 市正

三 江戸諸払金ノ件 安永九年十二月

一 江戸表方万端御払 御在府中二千三百貫目、御在国中

二千貫目ニテ相濟候様、去亥春被 仰出置候処、右御

賦銀ニテハ及御不足ノ由候ヘトモ、是非定置候銀高二

テタリ合候様、右外段々被仰渡、

四 幕府諸有司ニ太刀金代贈呈ノ件 天明六年六

月

一 御参府(連心)濕御老中並 溜 ノ間御役人方不殘西ノ丸御目

附衆迄御太刀金高代被遣候間、右利金二千兩余右御役

方御後替ニテ、同断年分右利金二・三百兩ニ上リ候由

但右利金一枚ニテ小判二十兩ノ段被仰渡、

六月

五 御隠居差分高ノ件 天明七年正月

一 御隠居御高五万石被差分候条、右ヲ以万端相濟候様、

掛御役々遂吟味御費筋ノ儀トモ無之様可仕旨被 仰出

候段申来候条、此旨可承御役々へ申渡、御勝手方へモ

可相達候、

正月

(喜入久福)
安房
(宮之原通直)
膳

六 御隠居入費支出ノ件 天明七年正月

一 是迄 御部屋御入用向 御表ヨリ被成進來候分へ、以
來御隠居御入用モ 御表ヨリ被成進候様可有之旨被
仰出候段 仰渡、

正月

七 御目見元服等ニツキ進上物不納ノ件 天明七

年九月

一 御目見元服並御役々御礼其外何ソニ付、進上物料相滞
候付、去ル午年申渡置候通候処、頃日又々不納ノ人モ
有之由不可然儀候、目録銀ノ儀ハ年々十二月限相円御
納戸奉行ヨリ江戸へ申上筈候間、先年申渡候通、進上
ノ目録ニ夫々料物相添、奏者方ヨリ一列目録並品料一
紙ニ相認御納戸蔵役人へ引渡、以來右仕向無間違可取
計旨向々へ申渡、尤是迄不納銀此渥急ト上納相濟候筋
取計候様奏者番へ申渡、可承向へモ可申渡候、

九月

主計
(二階堂行且)

八 上納金欠數治定ノ件 天明八年十月

一 今度被為蒙 仰候御上納金欠數二十万兩ニ御治定被為
在、当年ヨリ五万兩ツ、四ヶ年御割合ヲ以御上納ノ筈
候、此旨御役人御承知可仕旨被仰渡、

九 雅姫君手当金ノ件 寛政七年五月

一 雅姫様御統料千三百五十兩被定置候段被仰渡、

五月

(重要儀)
(川上久致カ)
久高
(馬カ)

一〇 所帶方難渋ニ付諸事縮少ノ件 享和元年八月

一 大概ノ算數

一 銀七万二千六百貫目 右江戸・京・大坂御借入高

一 銀六千七百貫目余 右江戸御在府御在国ナラシニ

シテ一ヶ年分

一同八百五十貫目余 右御參勤御下国ナラシニシテ

一度分

一同六千六百貫余 右大坂・京・江戸御借銀七万二千

六百貫目余相掛候利七朱ナラシニシテ凡一ヶ年分

一 銀千貫目 右京・大坂御常式其外万弘見合

合銀一万四千六百五十貫目余

一同七千貫目余 右御産物御米・砂糖・生蠟代銀

差引不足銀七千六百五十貫目余

右ハ御所帶方極々御差廻ニ付テ、格外ノ御省略被仰付夫々御役々モ被掛置、折角毎物御取縮被仰付儀候得トモ、累年ノ^{〔マ〕}ニ付、別紙通ノ御所帶握ニ候ヘハ、今通ニテハ近年中御立直リノ期不相見得候、右ニ付テハ外ニ御出方迎モ容易無之、イツレ極々御取細被仰付、少々ニテモ諸御弘方相減、御産物本重候筋ニテ無之候ヘハ、御当難々被凌御振合候間、猶又掛御役々ハ専右ノ御時節ニ基キ^{〔マ〕}及逐吟味、タトヘ古来ヨリノ御規定ニテモ及御出方候儀ハ依事可被相省候間、追々委曲ハ取調ヘ可被申出候、此旨掛御役人限可申渡候、

八月

^{〔川上久致カ〕}久高^{〔馬カ〕}

^{〔川田國通〕}伊織

^{〔高橋種次〕}縫殿

^{〔山田有徳〕}伯耆

^{〔山田有徳〕}伯耆

〔表紙〕

齊宣公史料

市來四郎編
自文化元年
至同文化六年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙数一一〇枚）」の記載あり〕

目録

- 齊宣公論書 風俗矯正ニ関スル件
- 同上家老論達
- 具足箱諸荷物等朱紋差留ノ件達書
- 郡奉行久保平内左衛門上申書 諸郷農民ノ状況取調ノ件
- 齊宣公改名ノ件達書
- 齊宣公改名ニツキ祝儀ノ件達書
- 公子武五郎君越前家引移ノ件

幕府ヨリ金米借用願認可ノ件

佐竹右京太夫息女夭亡ノ件

吏員不正行為禁止ノ件

窮士民ニ救助金下附ノ件

同上家老論達

節約年限延長ノ件

城下給地高出米ノ件

所帯向難渋立直シノ件

同上家老論達

所帯向難渋ニツキ御隠居方ヨリ千両支出ノ件

日高次左衛門勘定奉行へ提出セシ書 諸弘ニ関スル件

太守公参府ニ関スル件

上屋敷御殿廻落成ニツキ御移転ノ件

仙臺通寶鑄錢通融ニ関スル件

太守公琉人召連御登城ノ件

千眼寺及西田寺延命院寺格ニ関スル件

〔本文中なし〕
郁姫君入興ノ件

於郁殿離縁ノ件

郁君生母ノ件

郁姫君近衛家縁組ノ件

重豪公論達

文武ニ関スル件論書

露国船取計方ニ関スル幕令ノ件

文武ニ関スル件家老論達

所帯向ニ関スル論達

砂糖方代官上申書附勝手方達書 余勢銀ニ関スル件

樺山・秩父取扱文書破棄ノ件

大御前様逝去ニ付忌服ノ件

財政困難ニツキ諸事縮少勵行ノ件

所帯向難渋ニツキ重出米ノ件

櫻田邸焼失ノ件

拝借米金返納ノ件

三都借財返済ノ件

郡奉行久保平内左衛門上書 儉約ニ関スル件

教授黒田才之丞上書 儉約ニ関スル件

弓奉行面高源之丞上書 儉約ニ関スル件

岸喜右衛門外三名上書 儉約ニ関スル件

桂太郎兵衛上書 儉約ニ関スル件

御勘定奉行上申書 上納米金ニ関スル件

物奉行上申書 諸向代銀上納ニ関スル件

砂糖方代官上申書附勝手方達書 余勢銀ニ関スル件

御船奉行上申書 不納銀調ノ件

物奉行所管ノ諸人借付金等ヲ表方ニ変更ノ件

御家督ニツキ内輪省略ノ件

一一 齊宣公論書（風俗矯正ニ関スル件） 文化元

年七月

一領國中風俗正敷喧嘩口論等致間敷トノ儀前々ヨリ申渡

モ有之、去々年國元発足前書付ヲ以申聞、去年覺兵衛

事出立ノ節モ申付遣候ヘトモ、兎角辺鄙ノ風土故風俗

不正若者共行跡不宜無礼法外ノ働ヨリ喧嘩ニ及、無益

ニ死傷致シ候者数多有之候付 御隠居様甚不便ニ被

思召、右体無益ニ一命ヲ捨候者無之様ニトノ御賢慮ヲ

以、致喧嘩張本為相^マ者、其身ハ凡下ニ申付死体可為

七月

取捨候、親兄弟ノ儀モ吟味ノ上、右形ノ依輕重咎目可被仰付旨先年稠數被仰出趣モ有之、其以後及喧嘩候儀ハ勿論、夜行辻立等ノ儀モ相止段々風俗立直リ候方ニ相見得候処、近来又々本ノ風俗ニ立戻リ候様相聞へ、剩致喧嘩候者モ有之不可然事ニ候、右通御隠居様御仁心ノ一節ヲ以一旦風俗相改喧嘩等モ相止候上ハ、人々難有奉存忘却不致兼々心頭掛相慎候ハ、頃日尚又風俗モ一等宜可相成ノ所、却テ旧俗ニ立歸リ候儀誠殘念ノ至、當時ノ中ニテ御隠居様へ奉対候テモ恐入可申上様モ無之候、畢竟自分不徳故ニテ候ヘトモ、國中ノ者共申渡ノ趣ヲ疎略ニ相考、国法ヲ守候儀薄所ヨリ、程過候へハ右躰緩セ相成、且家老ヲ始役々如何ノ心得候哉不行届ノ事ニ候、依之以来屹ト御隠居様被仰出置候通、風俗立直リ喧嘩口論等相止候節、諸士末々迄モ一統ニ其趣意致感服心掛候様得ト申聞、其上ニテ万一不相用者モ有之候ハ、無用捨咎目ヲ申付、屹ト風俗立直リ候廉相見得候様精々遂吟味取扱可致事、

家老中へ

此節於江戸御前へ(市田教巳)勘解由被召出、御領國中風俗等

ノ儀ニ付段々御意有之、別紙写ノ通御筆ヲ以被

仰出候御趣意、御役々ヲ始奉承知通ニ候、依之左ニ申

渡候、

一二 同上家老論達 文化元年九月

一 御領国風俗ノ儀ニ付テハ前々ヨリ毎度被仰渡 御当代

猶又追々御沙汰被為及候得共、兎角風俗不正且若者

共無礼法外ノ働ヨリ喧嘩ニ及、無益ニ致死傷候者有之

候付 御隠居様甚不便ニ被 思召上、御賢慮ヲ以先年

被 仰出候趣有之、其後風俗立直リ候方ニ相見得候処、

頃日又々本ノ風俗ニ立戻リ剩致喧嘩候者モ有之、右通

御仁心ノ一筋ヲ以風俗相改候上ハ人々難有奉存兼々心

頭ニ掛相慎候ハ、猶又風俗一統宜可相成ノ処、却テ

旧俗ニ立歸リ候儀誠 御殘念被 思召上、御隠居様

へ被為对仰分モ不被為在、畢竟仰渡ノ旨ヲ疎略ニ相考、

御国法ヲ守候儀薄所ヨリ程過候へハ緩セ相成、御家老

ヲ始御役々不行届事ニ 思召候、依之以来 御隠居様
 被 仰出置候通、風俗屹ト相改候様此節被 仰出候趣、
 一々御尤至極ノ御事甚以奉恐入候仕合候、此上ハ屹ト
 風俗立直リ候廉相見得 御心慮ヲ奉安候様無之候テ不
 叶儀候間、 仰出ノ御趣意人々得ト奉汲受、無益ノ参
 会等ハ勿論、年若ノ者共夜行辻立又ハ異体ノ風儀等一
 切無之様可相嗜候、来年 御下国ノ上ハ御覽モ有之事
 候条、若其節 御目ニ留リ候程ノ異様成風儀ノ者モ有
 之候ハ、無用捨 御沙汰可被遊トノ御事候間、万一
 右体ノ者モ候テハ厚 思召ノ御趣意通兼候筋相成、拙
 者共初支配頭ニ至リ申分モ無之、左右通ノ者ハ一旦取
 違ノ筋ニテハ無之、御国法等閑ニ相心得候者故、以来
 御政道ノ障ニ相成、且ハ往々御奉公等相動候生質ニテ
 モ無之積ニ候故、御不便ヲ被加ニ不及相当ノ御取扱被
 仰付、親兄弟等迄モ可及迷惑候条、兼々其旨ヲ致得心
 候趣、親兄弟又ハ親類共ヨリ無油断可令教示候、
 一家柄ノ面々ハ勿論諸士一統、文武ヲ初其外稽古事等折
 角致出精、平日無益ノ寄集無之様可心掛候、畢竟右体

ノ所ヨリ不謁所行等モ有之、終ニハ喧嘩口論等ニモヲ
 ヲヒ、甚以 御氣之毒被 思召上候御事候間、万端相
 慎文武其外諸稽古事等精々可相励候、

一御役柄並奥向出入一件ノ儀モ被定置候通可相守候、緩
 セ成立候テハ不可然候条、人々無取違様可相心得候、

右分テ被 仰出候御深慮ノ趣一統難有奉感服、朝暮

心頭掛聊無緩疎賢可相守候、乍此上万一不守ノ者モ

候ハ、無御用捨相当ノ御咎目可被仰付候、是迄毎

度 御沙汰被為及候 御趣意行届兼、尊慮ノ程到テ

奉恐入儀候条、於諸向モ其旨奉恐察末々迄モ屹ト行

届候様、支配下下役等へモ時々可申含候、

九月

〔顯廷久翁〕
 信濃

〔姜刈実祐〕
 下總

〔川田國通〕
 伊織

〔高橋種次〕
 縫殿

一三 具足箱諸荷物等朱紋差留ノ件達書 文化元年

九月

一御上下御供並間上下ノ面々、道中為持候具足箱其外諸
荷物兩覆紋所、是迄朱紋相用候向モ有之候ヘトモ、以
来朱紋被差留外色勝手次第相用候様被仰付候条、此旨
向々へ可申渡候、

但江戸地廻並御領内旅行等ノ節ハ是迄ノ通、

九月

下總

一四 郡奉行久保平内左衛門上申書 諸鄉農民ノ

狀況取調ノ件 文化元年九月十日

近年諸鄉百姓困窮イタシ候ニ付、一統迫勤^{想カ}之上万端御
旧規不致異変候様專人情ニ基キ吟味イタシ、於鄉々取
扱之始末歸府之上得ト可申上旨被仰渡委曲承知仕、今
般於鄉々諸在栄勞之来由并高之増減、或ハ地面優劣農
人多少又ハ産業之異変等取シラへ、具ニ右郷々之条ニ
申上候、乍然諸鄉同様之趣旁取束尚吟味仕左ニ申上候、
一享保大御支配以後郷士家部増減相糺候処、右郷数ニ凡
三千六百余人余別立家部有之、人体家部ニ応シ相重之、
且安永五年以来百姓之現夫増減相糺候処、六千人程致

減少家部人体ニ準シ過分ニ相禿候、御国之儀他国ト相
変惣士士数不被相窮御仕向ニ候ハ、自己前上勝之御
国ニ候処、近年尚以郷士家部相増、百姓家部相減、適
殘居候者共ハ遊民体ニ罷成、土地ヲ相離方々へ行散貫
取致稼等徒食ノ者過分ニ候へハ猶以上勝ニ候、乍然郷
々へ郷士不罷居候ハ、既ニ御高之内過半可作荒之処、
郷士入作又ハ割作等ニテ何方モ免哉角作職イタシ、過
分之荒地ハ不相立筋ニ候、併依郷ハ郷士モ難及手、百姓
同前身壳賃取体之者トモ穉群^{抜カ}相重之為申筋ニ相聞得、
畢竟地面親疎故ニテ及困窮事ニ候ハ、諸口禿ニ禿候
儀尤ニ御座候、且抱地或ハ永作地等之儀大御支配之時
分迄ハ誠^{編カ}ニ讒計ニ候処、近年過分ニ相重、山野之広狹
迄モ見賦候テ高居有之御規ニ候処、抱地別テ相重之、
依郷ハ馬草・カシキノ場所モ塞リ候、山野手広有之候
テコソ一流之余沢ニ為罷成賦ニ候処、最寄之地面毎ニ
抱地ニ相成候テハ、御物御年貢ハ相重候ヘトモ、百姓
共ニハ別テ致迷惑候、乍然郷士家部過分相重候ニ付テ
ハ、家部ニ応シ抱地相重候儀自然之勢等モ可申哉、乍

去往古高被召居候砌之御趣意トハ致異変候、且全体人少ノ日州眞幸表ヘ農人過分之減少ニ候ヘハ、右諸在エ縦令御救門割等被仰付候共、基ヨリ憲法之取扱ハ難致、間ニ合ニ取扱置候外ハ無之賦ニ候ヘハ、適々御檢地詮立申間敷、尤自往古三三ヶ年前後ニハ是非一流之御引并為被仰付来事ニ候処、萬治御支配ヨリ享保七年迄ニテ六十余年ニ罷成、地面親疎農人多少不相并、漸々御國中致困窮賦トノ趣ヲ以享保年間大御支配被仰付置候処ニ、既ニ享保御支配ヨリ八十余年ニ罷成候ヘハ、地面親疎農人多少等ハ勿論、旁往古ノ趣トハ穉群ノ異変ニ候得ハ、何レ御國中一流御引并之上田賦之作法被相改、夫々憲法之御配当被仰付、上下無申分土地ヘ致安堵候様御支配不被仰付候テハ、御国家之基本相立候期迎ハ有之間敷、乍然今体農人致減少候上ハ、過分人配移不被仰付候テハ御高ハ居申間敷、乍去三十年以来ニサヘ過分之減少ニ候ヘハ、大御支配ヨリハ猶以之賦ニ候ヘハ、右諸在ヘ悉ク相達候程人配移難被仰付賦ニ候ヘハ、右様之郷ヘハオノツカラ百姓請取高之内被召

移、別立郷士渡難義也者トモヘ御配当不被仰付候テハ御支配相調申間敷、且郷士過分相重地面致不足今日之生計難洩之者共ヘハ、郷士ニモ農人不足之郷ヘ被召移作職高可被相渡也、無左候テハ下瀉表之別立郷士如何往々取続可申也、尤百姓致減少候ヘハ迎、地面迄郷士方ヘ被相渡候ハ、尚以已後百姓共方家部立兼可申賦ニハ候ヘ共、何レニモ別立郷士往々難被召捨置、且郷士方ヘ不被相渡候テハ、荒地ニ被召置候外之儀ハ無之、益上勝ニハ可罷成候得共、時変ニ候ヘハ無是非、尤無高郷士トモニモ今成被召捨置候テハ却テ風儀モ不相立、且別テ難洩之生計不便ニ御座候間、何分ニモ一流之御引并被仰付候砌、士農工商共ニ致平等候様御吟味有御座度儀ト奉存候、
一 柙楮梅等御國産之品々候ヘハ、百姓共ニモ格別深付不申候テハ、不相叶儀ニ御座候、尤御仕健方ニ付テハ、百姓ノ榮營、地面広狭、農人多少等之勘弁無之候テハ却テ御損失ニ可罷成也、近年相勞農人致減少候処、右御仕健方却テ相重ミ、殊ニ手入拵取調之向穉群繁多之

向ニ被召替筋ニ候へハ、作人共迷惑カリ染付薄方ニ相聞〔えカ〕元候、且柙之義自往古老儀ニ付、代米七升二合ツ、被下置候処、大御支配被仰付候砌、郡方ヨリ柙代米若シ以後被相減事ニ候ハ、其合ヲ以不下多畠ハ表盛輕キ方ニ可仕、以来右代米被仰付儀ニ候ハ、柙無構地方相応之檢地可仕旨相伺候処、有来通致檢地、表盛相替ニ不及旨被仰付置、代米不被相減筈候処、近年無故代米ノミ被相減、畠方表盛以前之通被下置、且守取納〔実カ〕等之向是又近年御趣法之召替別テ手伝相込方ニ罷成候由、尤柙守取之砌ハ刈取納最中或ハ麦植付唐芋取揚之時節ニテ人少之、勞百姓トモ別テ致迷惑候ニ付、柙老木薄成之木柄被召除植次等被仰付、且代米以前御規之通被成下度旨於何方モ申出候、尤柙成実一応盛り有之由ニテ盛過キ老木ニ相成候へハ、成実無之少々薄成候トモ生蠟別テ不宜ヨシ、左候テ右老木木蔭取納手隙等、勞百姓トモ方へ莫大之及迷惑由ニ候へハ、左様之老木柙等御伐除之上植次被仰付候へ、追々成実モ有之、且百姓共至テ御取救筋ニ候、老木柙等永々被召置夫ノ

ミナラス百姓迄モ勞入候テハ、往年イカ計ノ可及御損失候半ヤ、且楮ノ儀免本迄上納被仰付、過楮之分ハ以前之通百姓勝手次第被仰付置度旨申出候、高掛リ免本サへ不滯致上納候ハ、願通過楮之義ハ作人勝手次第ニ被仰付置候テハ如何可有御座哉、左候テ作人トモ自分見立ヲ以現地不差隙場所、又ハ相応之地面へ植付候ハ、自然ト生育モ相重ミ可申、当分ニテハ旁制法六ヶ敷、適作人共ニモ不相応之地面ト存付居候テモ、植付カタ／＼ニ付テハ夫々見分等有之、哉ハ牛馬之差隙子共聊爾等イタン候テモ糺方有之、旁事六ヶ敷成立事ニ候へハ、愚味ノ者共ニテ自然ト染付不申、難渋ニ相考居候由ニ相聞エ候、尤右式取扱繁多候へハ迎、以前ニ相替格別楮生育為相重筋トモ不相聞得候、依テ免本迄上納被仰付、取始末旁御物無御構作人并郷役等へ被任置候ハ、一流染付勝手次第相仕健、当分ヨリハ布テ相重ミ候半、委ク御物へ御取入無之候トモ、御國中へ相聽候へハ則御国産ニテ、当分御支配之砌トハ百姓積群減少ニ候へハ、諸事可被相省之処、却テ右外近年段々

新規之御仕建物被仰付候付、益殿役相重ミ別テ致迷惑候付、新規ノ御仕建方都テ被相省度、左候ハ、往古易簡之向ニ立帰自然ト百姓潤立可申、尤諸御仕建方等之御所務御出方之筋ニ相見得候共、右式殿役等相重候処ヨリ百姓相勞、過分之御取扱等被成下候様成候ニテハ、却テ御損失多方ニテ無詮事候ニ付、諸御仕^{〔建カ〕}健方之儀得ト御吟味有御座度儀ト奉存候、

一當時專新田開・塩浜開等被仰付、殊塩浜之儀御当地海辺ヲ抱エ候場所ニテ、塩他国ヨリ取入候儀不束之様相聞ヘ候得共、風土ニ候得ハ基ヨリ不苦事ニ候、依テ夫々土地ニ相応イタシ候産物ヲ相聽シ、致品替候儀天下商路之作法ニテ、御当地ハ穀物唐芋類生育之場所ニ候得ハ、其郷々ノ土地ニ応シ候産業ヲ励シ、夫々不足ノ品ヘ致交易候儀、往古ヨリノ御仕向ニ候、乍然農民余力有之候ヘハ、依御吟味ハ右体開方モ可被仰付儀ニ候処、近年諸郷百姓別テ相勞孤独之体ニテ遊民多ク益^{〔職カ〕}織不相届、既ニ依郷ハ荒地モ余多相立居事ニ候、古田不荒様ニトノ儀ハ訳テ御規ヲ以被仰渡置趣モ有之候ニ

付、余事ノ儀ハ先被差置、右ノ御取扱專要之被仰付度事候処、其方ノ補ハ等閑ニ被召置、新田塩浜開方被仰付候儀、於當時ハ誠ニ御費成儀ニ御座候、百姓潤立人勢相増候ハ、肝付表・庄内表ヘハ地面ハイカ程モ有之候、既ニ串良・高山ヘハ御支配以後之古荒田畠二百町余有之、惡地ニハ候得共畢竟人少故引捨リ^{〔ニシ〕}テモ相成、剩現田畠ヲモ不及手所ヨリ、無是非作荒シ召置候郷々余多有之候、依テ於當時ハ人勢相増候儀題目之事ニ御座候、是迄乍恐田地ヲ大切ニ御取扱有之百姓撫育筋薄方ニテハ有御座マシクヤ、依テ御高ハ相増候ヘトモ百姓ハ益致減少候上、古ニモ大御宝ト申ハ百姓ノ事ト有之候ヘハ、百姓相禿候テハ御所^{〔帶〕}滞被為立置候期迄ハ無之賦候付、余計之新地開方等一往被召止、以来百姓トモ人勢相増潤立候様御取扱有御座度存候、

一諸所下代藏并出物藏升目ニ付、別テ百姓トモ致迷惑候旨申出候付、三十年以前ト当分トノ外目相糺候^{〔升カ〕}処、当分三斗九升余四斗内外持越候テ三斗二升之受取ニ相成候、左候ヘハ三十年以前トハ大概二升余三升ノ重ニテ

所中へ相并シ、一ヶ年分郷々依広狭過分ノ石高臨時ニ相重ミ勞百姓連々禿入候旨申出候、大御支配之砌御規之升目ヲ以付扱有之、至当分モ上見之節郡方ニテハ憲法ノ升目ニテ致例方事ニ候処、上納ノ節ハ是以同前ノ重米ニ候得ハ、全体之勞者トモ前後難取償、終ニ身壳体ニ罷成候由、畢竟喰禿モ可有之候へハ、右重米不見賦候テ之上見例方ニ候へハ可禿入賦ニ候、且亦今成ニテハ縦令八部ノ部下被仰付候テモ、以前ノ五部下リ同前ニテ候、譬へハ一万石へ七部ノ御扱門割被仰付候へハ、七百石ノ部下高ニテ現米二百七十八石余ニテ過分ノ事ニ相聞エ候処、当分禿百石之上上納米ニ付、三升重ニシテ現米三百七十石余臨時之重米ニ相見得候、左候へハ相屯百姓共為致困窮賦ニ御座候、尤禿俵ニ付テハ絶々三升位ニ候へ共、勞百姓共人少故高迫リ多ク相計事ニ候へハ、禿人前ニテモ過分之及重米候、乍然御物へ都テ相納事ニ候ハ是程苦勞ニハ存間敷候へ共、中途ニテ空相捨事ト存候へハ、尽味之者ノ長ク氣受モ相勤不申事ト相敷、禿入候モ不便次第御座候、右式大切

之升目迄為異変事ニ候へハ、余年右ニ準シ往古之御仕向トハ致異変義相知候、乍然藏方勤之儀數年致骨折候為御心附被事ニテモ有之、且都テ下代欠米欵之由ニ候へハ、拵方旁ニ付以後欠相立賦候付、少々ハ欠米ノ考モ可有之候へ共、近年之重米別テ過分之次第ニ候、畢竟近年附屬藏致流行候処ヨリ、自然ト入実相重致取納候向ニ為成立ニテハ有之間敷哉ト取沙汰イタシ候、乍去見聞役附通ニ候へハ、強テニハ難申上候へトモ、於郷々符ヲ合候様申出候付テハ、何様下々ニテ之取違ニテモ候半哉、兎角今成ニテハ勞百姓トモ難延立事候付、何分ニモ御吟味有御座度、尤給地へモ不相当之入実ニテ致取納候向有之、別テ致迷惑候旨申出候、御藏々憲法ニ升目ニ改正有之候へハ、給地自然ト相改リ可申賦ト奉存候、

一二十年前後出斗其外諸竹木上納物ト旁請負人被仰付置勞百姓共過分之及出錢、殊ニ受負人ヨリ急ニ催促イタス事ニテ、農具・牛馬等モ悉ク売払、後ニハ無是非身売等迄イタン為差出ヨシニ候へハ、遠郷不便利之場所

ハ右請負ノ砌ヨリ勞モ一涯相増為申出候、然処近年御仕向被召替、高卷石ニ付三合米上納被仰付候付、請負出錢不差出、其分ハ仕合ニ存候趣御座候、乍然東目眞幸・菱刈表ニテハ、老人前二三十斛以上モ高請取居致作職事ニ候ヘハ、夫長ケ出米多ク却テ致迷惑、又下瀉ニテハ纒卷式石位請取致作職事ニ候ヘハ、別テ仕合ニ存候筋ニ候、高掛ニ候ヘハ上納前ニ付右式不并有之、御領國中不致平等御仕向候付、三四十年前請出銀等之儀於郷々細々相糺候処、勿論三合米モ差出諸出銀モ物体軽目ニ為有之由申出候、尤候ヘハ近年旁繁多ノ向為罷成所ヨリ、自然ト請負或ハ三合米等之御仕向ニ為罷成ニテモ可有之哉、且定納外ニ三合ツ、被相重候義誠ニ纒計ノ事ニテ候処、尽成者共故三斗九升八合ノ上納、当分四斗壹合ニ相成候様ニ相心得致迷惑候趣ニ相聞ヘ候、尤候ヘハ纒々成儀ニ定約被相重候筋ニ相成、乍恐御仁政トハ難申上候、依テ三合米上納之儀御免被仰付、勿論請負出錢等不差出トテ往古御規通易簡之ノ向ニ被召返度、乍然御用材木取下シ旁ニ付、御物御取計迄ニ

テハ難相濟、イツレ殿役ニ相掛候ハ、現立ニテハ致迷惑、且不弁ニモ候間、用夫面掛輕出米被仰付方ニモ可有御座哉、何分御吟味次第奉存候、

一大御支配之砌ハ取納窮モ所窮ニテ、勿論上見之節檢使ニテ被相濟、都テ事易簡ノ向ニ候ヘハ、御殿役連モ少ク随分百姓潤立居タル由ニ候処、近年諸殿役等其砌トハ致十倍、前文ニモ申上候通人数相増候ヘハ、殿役相重候テモ相当之事ニ得^(候力)ヘ共、以前トハ用夫過分致減少、殿役ノミ繁多ニ候テハ延立可申道理無之候、仍テ都テ以前之通易簡之方ニ被召替度義ト奉存候、以前ハ百姓トモ難村立申出候ヘハ、直ニ致見分弥申出通ニ候ヘハ、部下又ハ門割等之御取扱為被仰付由、夫故奉行致見分候跡ニテハ老若致群集万歳ヲ唱為申由、当分ハ數年来訴詔申出置候テモ見分ノミニテ候ヘハ、ソノ間ニ人氣モ尽果、夫故極々相勞候者共ニハ願出候力モ無之、禿入罷在候村々過半有之候、且亦門割・部下等之御取扱仰付候ヘハ、年限内他借銀モ無返濟ニ被仰付、見分後ハ他備之道モ塞リ尚以行迫筋ニ相聞ヘ候、右ニ準シ諸

篇事煩勞之向ニテ連々ト勞之其〔マカ〕ニモ為罷成哉、以前候

使ニ相濟候上見奉行上見ニ相成、其上又々見聞役附通

ト相爰ヒ惣体士風相ヲト口ヘ為申故ニテ候哉、諸事取

扱繁多ニ候ヘハ、果テハ百姓迷惑ニ相成、依テ老農ト

モ当分ノ様ニ諸御奉公人入込相増候テハ、延立可申訳

無之逆眉鬢罷在候、適郷々ニモ郷役被召置候ニ付テハ

郷役トモ居成ニ被召仕度、田舎ト申候テモ人柄次第ニ

候、人物被相撰夫々へ被任置候ハ、今程御奉公人等

被遣ニハ及申間敷、左候テ御当地向々ヨリ定約ノ内人

柄被相撰、為上締數郷相掛被遣候ハ、郷役共ニモ相

勵〔役脱之〕ノ殿モ自分可致減省ニ候、享保年間御儉約被仰出候

砌、其時分同役ヨリ近年殿役格別相重候付、殿役減省

之儀為申上帳面有之、其節ニ早以前ヨリ公役相重ミ百

姓共為致迷惑筋ニ候ヘハ、当分之体尚以之事ニ候、安

永五年以来之公役諸出銭等相シラヘ候処、前件郷々ノ

条ニ申上候通又格別相重ミ候、百姓之儀春仕付秋取納

ノ砌ニハ一日ノ取後ニテ、依時ハ一ヶ年ノ渡世ニモ相

掛由ニ候ヘハ、隙ヲ具候儀農政方一ノ儀ト承候、依テ

百姓得手透候様何分ニモ御吟味有御座度奉存候、

一 勞百姓御取扱ノ儀、以前ハ其痛根ヲ被相糺未然之御取

扱ニ候間、則其詮モ為有之由ニ候、譬ハ病固疾罷成候

ヘハ急ニ難致本服ト同事ニ御座候、然処当分ハ必至ト

禿入元氣モ尽果候上ニテ、漸御扱被仰付事候ニ付、御

取扱ノ詮立兼、往来ニハイカ計之御損失ニ可及候半ヤ、

且又御取扱被仰付候様、村々勞ノ様子ニヨリ夫々差別

可有御座哉ト奉存候、譬地面相并居候モ一往之災殃〔災カ〕ニ

テ相勞候向ヘハ部下ニテ補置、將又地面致親疎候ヨリ

及勞候村々ハ、地面引并シ親疎無之様御取扱被仰付候ヘ

ハ、無程人氣延立申筋ニ候、然処近年右ノ無差別勞入

候ヘハ部下之御取扱多ニ有之候、以前部下之御取扱稀

々ノ事ニテ、大形門割為被仰付筋ニ候、尤此節部下村

々モ悉差入致見分候処、一向御取扱之詮不相見得村ノ

ミ有之、却テ部下後他借錢相屯又ハ賃取等為相重筋ニ

候、基ニ地面致親疎候ヨリ為及勞諸在ニ候得ハ、兎角

門割ニテ地不法并候テハ其詮無之、殊ニ御取扱後立候

テハ猶以難延立賦ニ候、且近年適部下被仰付候テモ、

御取扱ノ向以前之御仕向ト致相違候、右御米都テ百姓
ヘ不相渡致代料田方置、其内之窮民ヘ扱方ハ有之筋ニ
候得共、夫迄モ容易ニ蔵田方モ無之益通弁相滞、尽味
之百姓トモ別テ事六ヶ敷相考、殊ニ番人等夜白召付置
事ニ候ヘハ、臨時ニ公役相重ミ却テ人望ヲ失シ候体ニ
相聞得候、兎角生民之取扱人氣延立候儀第一ニ候、尽味
ノ者トモニ得ヘハ貧ニ全人ナシニテ窮難ニ相逼、終ニ
ハスマシキ心ヲモ起リ御政事之差^{〔障カ〕}隙ニモ罷成賦候付、
御取扱方之儀ニ付テハ未然之御取扱肝要成儀ト奉存候
適被成下候部下、依郷ハ于今田置候モ有之、別テ御費
成事候付、此涯都テ蔵開方之上石殘配当被仰付、村中
一統競立候様御取扱有御座度、右式連々禿入候諸在ヘ、
適々御^{〔取脱カ〕}扱田置候儀誠ニ無詮御取扱ニ候間、此涯屹ト御
配当被仰付、乍其上詮立不申儀ニ候ハ、地面親疎故
之劳候半間、地面致平等甲乙無之様御取扱有御座度、
兎角尽味之者トモニ候ヘハ、第一下情ニ基キ人氣延立
候様取扱候儀、御扱方題目之儀ト奉存候、
一百姓致減少作職不及手場所ヘ人配移者被召移候ヘハ、

潤立筋ニ相聞得候得共、基ニ地面親疎有之欵、又ハ地
面位劣ニ為相成欵ニテ致困窮、追々農人共禿入為致減
少跡ニ候ヘハ、兎角地面被引并甲乙無之様御取扱被仰
付、其上ニテ人配移者モ不被召移候テハ、移者染付可
申様無之候、然処尚御仕向右式地面為相劣田地ヲ其儘
配当被仰付事ニ候ヘハ、縦令作職仕馴候者迎モ不相成、
風土殊ニ位劣之場所ヘ染付申マシク之処、一向作職不
案内之徒者共ノミ移入事ニ候ヘハ、基ヨリ染付可申様
ハ無之、進退相逼リ追々可致欠落ヲモ体ニ相見得候、併
地面致平等居候場所欵、又ハ移者等ニテ少々其余勢ニ
テ在付候体之者モ間々罷居候、且近年季入作迎被召移
候、此者共基ヒ年季ニテ移越事ニ候ヘハ、尚以作職不
案者ニテ^{〔内脱カ〕}当日別テ難渋之向ニ相見得候、且年季移シ永
代居付ヲ願出候得ハ、在付之様ニ相見ヘ候得共、極々
相勞前後取償難成所ヨリ当難ヲ相凌度、仕付飯料ヲ相
願候テ之故ト相聞得候、不願出者ハ一度ハ少々貯モ
有之候ヘハ、故郷ヘ帰度存候体ニ相聞得候、田地ノ儀
ハ別テ太切成御取扱ニ候処、右式一往之年季者ヘ作職

地被相渡置候義、一端荒地ニテ不被召置迄之御越意〔趣カ〕ニテモ可有之哉、誠ニ間ニ合之御取扱向ト相見得候へハ、基ヒ造成者可移越様ハ無之候、是迄地百姓土地不相離候様ニトノ御取扱ハ無之、右式徒者共追々被召移田地等モ疎略ニ為致作職候テハ、大切成地面年々位劣ニ相成、当御時節別テ之御損失ニ御座候、尤人配移者ノ儀御袖判ヲ以被仰出置益御政務之題目成事ニ候処、畢竟本在所ヨリモ作職不仕馴徒者トモ相撰〔素 空〕、スカラ立候テ差遣筋ニ相聞得候へハ、基ヒ大切成御趣意不汲受候テ之取扱向ト相聞得、不可然事ニ御座候、依テ此涯御引并被仰付諸郷一統競立、誠ニ御政事ニ付無宛御趣意ヲ以農人不足之場所ニ被召移ト申事、人々安堵イタシ候上ニテ、相応渡世之者トモ鬪取之上、御旧規通御手厚御取扱ニテ被召移度、無左候テハ人配之詮有御座間敷、尤仕馴居候郷ヲ被召放、不相馴遠所へ被召移候儀、畢竟大切成地面往々荒地ニテ難被召置トノ趣ヲ以、乍不便難黙止誠ニ不容易御取扱ニ候処、今成徒者トモ追々被召移終致欠落等候テハ、大切成御趣意モ等閑ニ可罷

成ヤ、依テ此涯一統御引并之上、御手厚御取扱ニテ被召移、ソノ上若存違致欠落等候ハ、重ク御取扱被仰付候テハ如何可有御座哉、先年過分ニ致欠落候御憐愍ヲ以例之御取扱被仰付、其後却テ御国法ヲ蔑ニ存候哉、進退相逼リ候へハ、致欠落等候儀為来事之様相考居候体ニ相見得候、乍然今成ニ致困窮候上ニテ御取扱被仰付候へハ、則民ヲアミスルト〔虫 喰〕者ニテ候半間、此涯憲法之御配当被仰付、夫々土地へ致安堵候上ニテ、存違候者トモ義徒ト御取扱被仰付候へハ、御規定相居リ徒者共ニモ自然ト作職方一篇ニ可心掛賦ト乍恐奉存候、尤徒者ノミ移込事ニ付、オノツカラ風義惡敷殊ニ科者ト相混、地百姓トモ却テ移シ進疎略ニ会釈イタシ、就中大口表ニテハ移者諸方ヨリ過分相集居、人心互ニ不和ノ体ニテ、郷役々トモニモ持アクミタル筋ニ相聞得候、尤東目諸所へ過分之農人減少ニ候へハ、イツレ人配移不被仰付候テハ、以来御高ハ居リ申間敷、今般於諸所人配移者トモヘモ直対イタシ実情細々承合、且本在所ヨリ人配差出候砌之次第等、下潤諸所ニテ相糺

候処、人配移之儀住馴居候土地ヲ相離候事ヲ至極難義ニ存、余土ハ島流ニテモ被仰付候ハ、一度ハ被召帰事モ可有之処、移者ニ候ヘハ二度帰ル事モ無之ト相歎程之事ニテ、別テ不容易事ニ候得ハ、移者トモ往々染付詮立候方ニ今一往々得ト御吟味有御座度義ト奉存候、一勞郷ノ儀農人年々致減少、作職地面不応手様相請取、人数ニ準牛馬迄モ格別相減候、畢竟馬直段高直ニ罷成候付、旁百姓難得求、適致所持候モ悪馬・老馬勝ニテ存分之稼穡不相調、地位迄モ相劣ク漸々相勞事候ニ付、何卒馬直段相下候様ニト勞郷毎ニテ相欲候、依テ馬高直ニ相成候基ヒ相糺候処、先年ヨリ他国出馬御免被仰付置、二三十年以前ニテモ候半、年々過分ニ馬他国ヘ売出候屯ニテ、近年格別高直ニ為被成歎ト申出候、尤野方相抱居候於諸郷、牛馬生立方増減承合候処、近年困窮ニ逼リ母駄迄過分ニ売払為申仕合ニ候ヘハ、オノツカラ生方モ夫長ケ為致減少由、作人トモ儀馬不致所持候得ハ、田地拵方等ハ勿論年貢上納方不相調、耕作モ自然ト取上イタシ、賃取体ニテ方々エ行散リ居、残

候者トモ尚以作職高相重ミ漸々トハ諸禿ニ禿候体ニ候得ハ、兎角作人ハ牛馬不致所持候テハ不相叶、且牛馬致所持手入拵等存分相届居候ヘハ、大風・虫入等之災殃ニモ根強ク、手入不相届候ヘハ惣体足弱ニテ、少々災殃ニテモ痛ミ強候由、尤不拵ニ召置候ヘハ年々地面位劣ニ相成、一統出来扱致減少、夫長ケハ米穀直段高料ニ相成、不足米買入代等モ相重ミ、オノツカラ百姓迷惑ニ相成事ニテ旁猶以相増、今成ニテハ往々延立候期迎ハ有之間敷ト相歎候、乍然近年驕奢之風致增長自然ト世上困窮之屯ニテ、米穀不限牛馬諸品連々ト高料ニ為罷成賦ニハ候ヘ共、馬之儀ハ前文之通農業第一之物ニ候得ハ、無造化家ノ得求候様無之候テハ不相叶候、然処当分ニ至テモ馬数百疋他国ヘ売出候由、御領国エ潤沢之品ハ勿論、他国エ可被相省候ヘ共、御領国ヘ致不足百姓トモ別テ迷惑ニ存居候馬、他国出御免被仰付置候儀、農人困窮ノ基ニ罷成事候付、一往被差止、御國中ニテ致商売候様御吟味有御座度候ハ、旁百姓トモ手入拵方ト相届、連々潤立可申賦ト奉存候、

一 御鷹場之儀候付、百姓トモ致迷惑候旨細々申出候付、

其郷々ノ条ニ委曲申上候、尤往古ノ御鷹場等ハ御仕向

相替近年之御留場別テ手広罷成、殊ニ鉄砲切封迄被仰

付置候へハ、鳥勢以前ノ向トハ〔抜之〕稜群相重ミ、飯料第一

之麦作過ニ喰禿事ニ候へハ、全体之勞者トモ別テ致迷

惑由候、尤御高被召居候砌、第一麦地ノ有無見賦付粗

イタシ御規ニテモ有之、且以前ヨリ取納方々御条書ニ

モ、麦作之儀第一之飯料ニ相成候条、仕付不取後候様

ニト、訳テ被仰渡事ニ候処、当分ハ被仰渡迄之事ニテ

実意無之、折角ト存仕付候テモ委喰禿事ニ候へハ、依

郷ハ手隙ヲ費シ仕付候モ無益ノ事ト、無是非不致仕付

方召置候モ有之、別テ不便之次第ニ御座候、左様成所

ヨリ連々ト困窮イタシ、既ニ飢寒相苦ミ親族及離散孤

〔独力〕 獨之者トモ余多罷居候、左候得ハ御手厚御取扱社可被

仰付之処、却テ近年益諸鳥致群集混モノ喰禿事ニ候へ

ハ、適々御鷹場之事ニ候へハ内心難忍、諸郷トモニ迷

惑ト相欺候義、不成合トハ被申カタン候半欵、畢竟右

式窮民トモ夫程ニ迷惑イタシ候下情、委敷不被相違候

故ニテ、是迄為召建置ニテ候半、然処御鷹場故ニテ窮

民トモ尚禿入候様ニトモ候テハ、往古之御趣意ニ不相

叶ノミナラス、乍恐御仁政之一筋ニモ不相叶賦候付、

何卒窮民トモ為取扱諸所御鷹場以前之向ニ被召縮、方

限外勝手次第鉄砲致稽古等候様被仰付置度、左候ハ、

筒音等ニ相驚キ自然ト諸鳥致退散喰禿モ無之、窮民ト

モ夫長ケハ延立旁可致安堵賦ト奉存候、

一 先年勸農方被仰付候御趣意ハ、專百姓トモ潤立御国家

之基本相立居候様ニトノ義ニテ為有之賦ニ候処、取扱

之役々取違ヒ、稼穡之次第風土ニ応シ致相違義ヲ不存

付、打起仕付等老農トモヨリ仕馴候儀ト申出候事ヲモ

不取揚、混物敲數催促サヘイタシ候へハ、五穀実成物

之様相考へ、依郷者ノ押々ノ取扱有之、于今上田之場

所其砌ヨリ優劣ニ為相成モ有之、夫故勞ノ基ヒハ勸農

方相初候ヨリ漸々相勞候儀ト取寛候、老農トモ、有之、

尤勸農方被仰付候ヨリ其詮モ有之事ニ候ハ、左様ニ

モ存間敷候得トモ、少モ其詮無之、却テ連々ト為及勞

事ニ候得ハ、尽味之者共ニテ左様ニモ可存事ニ候、兎

角輕キ者共易簡之向相願居事ニ候処、勸農方已後于今
其余風相殘諸事煩勞之向、殊ニ近年諸仕立方等拔群為
相重事ニ候得ハ、往古易簡之向ヲ相願候事尤ニ御座候、
就中勞郷ニテハ一入地方之取締迫切之体ニテ窮屈ニ養（罷
之）
成候哉、一向人氣不延立奉陽（奉カ）之氣薄キ所ヨリ、自然ト
生子迄モ致減少候由ニ相聞得候、剩百姓ハ不生不殺之
界ニテ召仕ナト、申触シ、何比ヨリケ様ニ往古之御趣
意存違忍少キ風像（鏡カ）ニ罷成候哉、歎ケ數次第ニ御座候、
春陽ノ元氣ヨリ秋殺ノ氣モ被行候様無御座候テハ難逐
生育賦ニ候、百姓ト申候テモ人間ニ候得ハ、蓄生（蓄）同前
之取扱ニテハ可致心服道理無之候、尤依風土民俗相替
物ニ候ヘハ、何レニモ生民ノ取扱不容易、依以來押々
之御取扱無之、守人情（尊カ）ニ基キ末々致安堵候様有御座度
儀ト奉存候、
右通往古之趣トハ、旁拔群致異変居候、尤前件老農ト
モ訴詔申出候趣自由之向ニ似候得共、皆以往古之御趣
意成ニテ新規私之訴詔ニテハ無之ト、好悪ヲ同シクイ
タシ候ヲ民之父母ト申由ニ候ヘハ、撫育ト申モ百姓願

ニ存候儀ヲ相達シ迷惑ニ存候儀ヲ相除迄之事ニテ可有
之、殊ニ往古之御規ヲ相願候ト申事ニ候得ハ、尚以其
成ニモ難被召置候半欵、尤近年百姓ヲシヘタケ候テ成
トモ御物御藏ヘ召入候聚斂（斂カ）之取扱ヲ御為ト存違候向モ
有之、益為困窮ニ候半欵、第一右聚斂ノ病根ヲ不被召
除候テハ往々撫育之功相立申マシク、撫育之功不相立
候テハ、勿論御國家之基本相立期迫ハ有御座間敷、將
亦田賦高被召居候御作法之義ハ地面優劣勿論農人多少
ヲ相考ヘ、十ヶ年一ヶ年之豊年ヲ中年ニ并シ、貢路之
遠近、麦地之有無、山野之広狭、村之上下、工商之助
ケ有之場所迄モ致吟味、以來斯之通ニテ百姓トモ飢寒
苦ミ無之、親族可致安堵賦ヲ以致付糶、一統無甲乙平
等イタシ儀ヲ題目ニ相考得、憲法之御配当被仰付置、
併秋毛不熟ト申出候得ハ、上見之上代成被相究、乍其
村中一統之災殃ニテ連々難村立節ハ、定代被相下部下
ヲ以御取扱被仰付、或ハ地面致親疎不相并ヨリ及困窮
候村々ハ、門割ヲ以被法并置御規ニ候ヘハ、一統及困
窮候義ハ無之賦ニ候、然所近年極々相勞、既ニ難村立

諸在余多有之、当日之生計別テ難渋ニ相見得候付、勞之来由細々相糺候処、畢竟大御支配程久敷地面之惣引并無之、就中勸農方御趣法以後押々之御取扱ニテ被召置、却テ諸御仕向ノミ益繁多ニ罷成候屯ニテ、一統為及困窮筋ト相見得候、殊ニ東目表之諸郷年来之勞ニテ農人過分ニ致減少既ニ禿入罷在、又下瀉表之諸郷農人過分相増作職地面不足イタシ、無是非賃取トシテ方々へ流浪イタシ、殊相勞居候諸郷他借相調候処、何方シモ過分相屯居年々右利分増長イタシ、今成ニテハ追々禿入候外無之体ニ相聞得候、右式地面ハ勿論農人多少不相并且他借銀致増長一統及困窮候付テハ、人少キ諸郷へハ人多在所ヨリ人配移被仰付、憲法ニ高御配当不被仰付候テハ往々難村立、併人配移且他借錢等之儀、別テ難渋之御取扱向ニ候得ハ、仮令間ニ合又ハ枝葉之御取扱等被仰付候トモ決テ詮立申間敷、左候テ人氣追々禿入体ニ候へハ一日ニテモ人氣相立居候内、御領国一統之御引并被仰付度、左候ハ、人配移又ハ他借分等難渋之御取扱逆モ造作有之間敷、今成田賦之作法相紊

居候上ハ、仮令此節御支配不被仰付候共、不遠内不被仰付候テハ不相濟賦ニ候処、今成二十ヶ年モ被召延置候ハ、農人減少イタシノミナラス、人望猶以尽果致欠落等外之凌方逆ハ有之間鋪、只今ニテサハ勞在之者トモ、一ヶ年之^(凶カ)込災モ有之候ハハ如何可相凌哉ト相見ニテ候、尤人望尽果候諸在ノミ候得ハ、心底ハ欠落之存慮可有之候得トモ、御法ヲ恐居候半哉、家財破却イタシ孤独之体見ルニモ難忍次第ニ御座候、且御支配後漸々御竿ニテ增高相立、且抱地高過分相増居旁差引被仰付候ハ、享保御支配高頭ヨリハ格別御高モ引入申間敷、且地面為相優諸在モ相見得候得ハ、左様之向へハ自分盛増等モ可被仰付、今成被召置年々門割ニ付引捨又ハ部下等之御取扱被仰付候儀、基ヒ間ニ合之取扱ニ候得ハ詮立候事ニテ無之、果シテ無之儀ニテ当御時節柄追々別テノ御費筋ニ御座候、尤当分ニテサへ御支配之時節御後居候得ハ、当分ヲ被召過候ハ、農人尚以致減少御高益引入可申、且御高引入候テモ憲法之御配当可相調哉、別テ無覺束候、且古言ニモ民ハ国ノ大本

ト有之候得ハ、何レ今成ニテハ難被召置、尤御支配ト
御支配ト御座候ハ、太粧ニ相聞ヘ、且御高迄引入事ニ

候得ハ、外ニ詮立候御取扱向有之間敷哉ト種々遂吟味
候得共、一統之勞殊ニ是迄押々為被召置御領国ニ候得

ハ、外ニ百姓トモ潤立候御取扱迎ハ決テ有御座間敷、
依テ當時格別之御省略中ニハ御座候得共、往々御国家

之盛衰ニ相掛事候付、難止此涯御支配之儀申上候、尤
一統御引并之上地面無甲乙夫々憲法之御配当被仰付、

上下無申分安堵イタシ、左候テ諸事往古ニ被召返一統
得農暇候ハ、無程潤付御国家之基本永ク可相居奉存

候、今成被召置連々逼迫イタシ候ハ、近年中御難渋之
儀可致至來、既ニ遠郷之勞諸在人望尽果剩飢寒ニ相苦

ミ居候付、一日ニテモ右窮民トモ潤付候様御取扱方被
仰付候儀、当節難被過儀ト乍恐奉存候、以上、

九月十日

郡奉行

久保平内左衛門

右文化元子九月取次高田猛太夫ニテ、御勝手方へ差出

候事、

一五 齊宣公改名ノ件達書 文化元年十月

一 太守様御儀 薩摩守様ト御改名被遊度旨御伺書被

差出候処、先月十三日御窺通被仰渡候段申來候、此旨
可奉承知候、

十月

信濃

一六 齊宣公改名ニツキ祝儀ノ件達書 文化元年十

月

一 太守様御儀 御改名御窺ノ通被為濟候ニ付、御一

門方其外月次御礼罷出候面々、來ル九日四ツ時登城於
席々相謁 御三殿様へ御祝儀可被申上候、

但大奥へ兼テ御祝儀等被申上候面々、当日又ハ御精

進日間御祝儀被申上之、御女中方ヨリモ同断、尤江

戸へモ当月飛脚便ヨリ有來通可被申上候、

十月

信濃

一七 公子武五郎君越前家引移ノ件 文化二年五月

一武五郎殿越前家へ御引越ノ儀、御延引被仰出置候へトモ、来月末頃被為入、則日御本丸へ御上リ一往御逗留ノ管候条、此旨向々へ可申渡候、

五月 市正

一八 幕府ヨリ金米借用願認可ノ件 文化二年七月

一近來御勝手向御不如意ノ上御物入等ノ儀打統致テ御難^{〔至カ〕}波ノ御時節、又ハ来年疏人参府ニ付テハ御手当難被行届御願御申置ノ趣有之、先月四日 太守様為御名代御一類様被為召、若殿様被遊御登 城候处、御金一万兩・御米一万石御拝借被仰付候旨、御月番青山下野守様ヨリ被仰渡候段申来候条、此旨向々へ可申渡候、

七月 下總

一九 佐竹右京太夫息女夭亡ノ件 文化二年七月

一佐竹右京太夫様御息女於滿喜様御事、先月十二日被成御夭亡 若殿様御從弟ノ御統ニテ一日被遊御遠慮候旨

申来候条、此旨向々へ可申渡候、

七月 市正

二〇 吏員ノ不正行為禁止ノ件（齊宣公） 文化二

年閏八月

一 家老中へ

當時至テ難波ノ時節候へハ、先達モ申聞候通不依何事省略相用ヒ候様、國中諸士ノ風俗ノ儀モ猶不乱様時々氣ヲ付可申聞候、間ニハ役人ノ内臬員ノ取計、不正ノ進物等致受用候者モ有之哉ニ候、此後屹ト不正ノ進物臬員ノ取計無之様ニ、重役柄ハ勿論小役人等ニ至迄左様ノ儀一切無之様ニ相心得可致精勤候、若右ノ旨不相用者モ有之候ハ、屹ト咎目可申付候、勝手方ノ儀ハ人々取入候役場故猶更入念、此後右様ノ儀無之様ニト存候、尤勝手方へ相掛リ候役々・小役人等迄猶又及吟味、左様ノ者有之候ハ、夫々咎目申付、跡役ノ者モ能々人柄及吟味可申付候、此旨屹ト申聞候、

閏八月

二一 同上家老諭達 文化二年十一月

今度御家老中

御前様へ被

召出、当御時節故不依何事省略相用、且諸士風俗ヲ不亂勤役ノ者ハ不正ノ進物受用最眞ノ無取計令精勤候様、不相用者ハ屹ト咎目申付、就中御勝手方向相掛候御役場ハ人々取入儀故、下役等猶又及吟味、左様ノ者有之候ハ、夫々咎目可申付旨

御筆ヲ以被

仰出候条、此旨謹テ奉承知、稠數省略相用一統風俗ヲ不亂、奉行頭人ハ勿論下役等迄モ謙直ニ可致精勤候、此已後不正ノ人柄等有之候ハ、屹ト御取扱可被仰付事候間、聊モ不束ノ儀共無之様支配下々役等へモ時々可被申聞候、

閏八月

信濃

下總

伊織

二二 窮士民ニ救助金下附ノ件 文化二年十一月

一御金五千兩

右ハ先年以來窮士民等夫々相応ノ御救方ヲモ可被仰付御舍ノ処、一統奉承知候通御借銀差^ツ御所帶向極々御難渋成立、御家老中無抛奉願趣有之、乍 御氣苦勞思召ノ外出銀等被仰付置、追年猶以可及難渋、旁以不被為安 尊慮候、依之奥向万端ノ儀御事ヲ被差欠格別減少被仰付、御納戸金ノ内本行ノ通表方へ被相下候間、右ノ足物ヲ以困窮ノ者共飢寒ノ苦無之様、年々当難ノ者ヨリ無親疎可取扱旨被仰出候、

十一月

別紙之通御納戸金ノ内ヨリ御救金被相下候付、到後年無違失様可取計旨ヲモ被 仰出候条難有奉承知、御当地諸郷共飢寒ノ苦ニ堪兼候者於有之ハ、当難ノ者ヨリ応其向御救可被成下候儀候間、窮士窮民ハ勿論其外末々ノ者タリ共、向々支配頭主人等ヨリ委敷取調無親疎

可被申出旨、可承向々へ可申渡候、

十一月

信濃

下總

伊織

市正

二三 節約年限延長ノ件 文化二年十一月

一去ル酉年ヨリ格別ノ御省略被 仰出置何篇御取縮有之

候へトモ、御差物高ニ不応御借金故年々御借重相成御

〔檢力〕
檢約年限モ当年迄ニテ箝合候へトモ、今以御立直ノ期

不相見得候付、来寅年ヨリ又々五ヶ年は迄ノ通稱敷御

檢約被仰付候条、少事タリトモ御費無之様御役々精々

尽吟味、屹其詮相立候様可心掛旨被 仰出候、

十一月

信濃

下總

伊織

市正

二四 城下給地高出米ノ件 文化二年十二月

一御城下給地高ニ相掛出米ノ内真・赤米八千五百石出米

不足ノ方ニ証文入付ノ儀、町家ノ者兩人へ令免件置候

処、差支ノ儀有之此節取揚申付候付、当秋ヨリ以来定

式出米迄モ高主勝手次第、一石ニ付三升ツ、高奉行所

へ願出三月限御当地出物蔵へ代銀致上納、蔵受取ヲ以

御法ノ月限総相遂候様申付候、且右家ノ面々依願大坂

切手上納請取ヲ以総相遂来候分ハ可為是迄ノ通候、

十二月

伊織

二五 所帯向難渋立直シノ件（齊宣公）文化三年正

月

一 家老中へ

近年所帯向極々不統ニ付、去ル酉年ヨリ家老中議定ニ

任セ、五ヶ年ノ間領國中へ重出米・出銀申渡、既ニ去

丑年迄年限モ箝合候、然共国用不足元米大分ノ儀故償

方未相叶、当寅年ヨリ先五ヶ年は迄ノ通出米・出銀ノ

重ミ於無之ハ繰合難叶由、家老中又々吟味ノ趣申出暫

其儀ニ從フ所ナリ、家督以來諸事無益之費無之様申渡、殊ニ去ル酉年ヨリ分テ儉約相用ヒ、去夏帰国以來ハ身辺ノ儀猶以セリ詰省略セシムトモ、^(イ)差テ其詮モ相見ヘス、又々重出米・出銀申渡、領国中大身・小身・凡下迄モ難儀ニ及フコト、他所ニ對シテモ國ノ面目ヲ失フ所、畢竟我身不肖ニテ不行届所アル故ナルヘシト己ヲ罪スルヨリ外ハナシ、但シ國家ノ政道ハ君一人ノ事ニアラス臣下ト是ヲ共ニス、就中家老中へハ所帶向ノ事大小トナク預ケ置処ニ、当分通不償ニナリ立出米・出銀ノ外重良策ナキハ家老中モ其責ヲ遁レサレトモ既往ヲ咎メテ益ナシ、将来ノ心得第一ナリ、自今以後ハ家老中屹ト申談、國家ノ事ニ昼夜混ト工夫ヲ加へ、面々己カ所帶ヲ取立ル様ニ心力ヲ尽シ、存寄候儀ハ少モ遠慮ナク時々申出候儀、家老中ハ勿論諸役人中モ此旨ヲ相心得候様ニ屹ト可申渡者也、

正月

二六 同上家老諭達 文化三年正月

一今度我々共 御前へ被 召出、御所帶向御難波付御家督以來諸事無益ノ費無之様被仰付、殊去酉年ヨリ分テ稠敷御儉約被 仰出、御身辺ノ儀迄モセリ詰追々御省略被為在候へトモ其詮モ不相見候付、又々当年ヨリ引続重出米・出銀等被仰付、御領國中一統末々迄モ及難儀候事他所ノ面目モ可有之、自今已後ハ昼夜混ト工夫ヲ加へ、面々己カ所帶ヲ取立候様ニ心力ヲツクシ、存寄候儀御家老中ハ勿論、諸御役人中モ此旨ヲ可相守旨、御別紙ノ通御筆ヲ以承知仕、誠御仁篤ノ 御趣意恐入難有次第奉存候、畢竟先年以来無御抛御入価被差屯御産物高ニ不応御大借故、是迄ノ御儉約詮立兼、大身・小身末々迄モ一統困窮ノ上、又候出米・出銀等被仰付候儀、至テ被遊 御痛心候御事何共奉恐入仕合ニ候、右付テハ此節ハ何レニモ御省略ノ詮相立、近年中是非御立直ノ方相成、年限中ニテモ出米・銀等御用捨奉安尊慮候様無之候テハ難相成事候条、難有 御趣意ノ程奉汲得、御勝手向相掛候御役場ハ勿論其外迪モ、尚又昼夜心力ヲ尽万端極々セリ詰遂吟味可致精勤候、尤得

差図候儀ハ無遠慮可被申出候、

正月

信濃

下總

伊織

市正

二七 所帯向難渋ニツキ御隠居方ヨリ千両支出ノ

件 文化三年正月

一金子千両 右ハ御所帯向御難渋ニ付、

御隠居御方ヨリ年々右ノ通表へ被差出候付、以来御統
金一万四千兩ノ内ヨリ千兩ツ、年々引結候趣被仰出候
旨被仰渡、余又略ス、

正月

伊織

縫殿

二八 日高次左衛門勘定奉行へ提出セシ書 諸払

ニ関スル件 文化三年二月十九日

一去丑正月ヨリ同十二月迄年中金銀・米・錢・菜種子・

大豆・生臘・砂糖納リ本並諸払差引急成御見合ニ相成

候間、於諸向品々取シラへ可被差出候、右ニ付テハ早

出長詰イタシ出精可有之候、仕立様ニ付差支又ハ難心

得儀、其外右御見合ニ付相洩候ト存付ノ儀トモハ、吟

味役へ申承致連続候様可被取立事、

一与々免本米ノ儀ハ定代ヲ本トシテ、上見旁ニ付引入米

ハ払ノ場ニ可被相記候事、

一元本粟麦代其外諸役銀等定式之通相立、是又引入等ハ

払ノ場ニ可被相記事、

一諸何納^{〔向カ〕}リ物御払ニ相成候代錢其外、諸上納ノ金銀米錢

本ニ可被相立事、

但老奴出銀ハ内書ニ可相記候、

一山方運上竹木代等其外何々ヨリ納方申渡、払方ハ物奉

行其外ヨリ申渡候類等ノ儀ハ、払方申渡候御役場へ致

向合、其場ノ本ニ相立、納方申渡候御役場ノ帳内ニハ

外書ニ可被相記事、

一屋久島藏平木諸木代等ハ金藏、差統払方ハ物奉行ヨリ

申渡筈ニ付、屋久島方ハ外書ニ相記、物奉行方本ニ可

相立候、右類ノ儀ハ諸向共ニ可被相準候、

一 諸所蔵々ヨリ御当地蔵々へ差統候米銭等、是又前条全断、

一 出米・賦米ハ惣高ノ頭ニ相掛相記、諸引入ハ弘ノ場ニ

相記、且重出米ハ内書ニ可被相記事、

但給地ノ賦米ハ御代官方本ニハ可被相除候、且過米弘

ハ外書ニ可被相記事、

一 諸弘ノ儀部分ヲ以可被相記事、

但部分ノ大意左之通、

一 御納戸方諸弘、

但御子様方御入用ハ銘々取分、

一 御作事方弘ハ新規又ハ不時等有之分ハ内書ニ可被相記

事、尤御休息所・大奥是又可被取分候、

一 御奉行所弘ノ内御進物御厩並御庭方・御数寄屋・奥上

リ等可被取分候、尤

一 御子様方ハ御銘々内書ニテ可被相記事、

一 御献上並脇方御付届

一 御数寄方弘

一 御役料米諸切米等ハ打込ニ相記、一身者以下ハ可被取分候、

一 御役料銀

一 拜借銀

一 道中持夫賃

一 御法事分

一 諸蔵役人手伝等御心付銀

一 御利弘

一 御兵具方弘

一 御能方弘

一 枀代米弘

一 運賃弘

一 夫飯米弘

一 諸稽古入門其外ニ付御物御計

一 御代官所御合〔一〕〔二〕〔三〕銀

一 御膳所御合〔一〕〔二〕〔三〕銀

一 次駕籠料

一 御膳所御常式並御臨時ハ可被取分事、

一大奥右全断、御子様ハ御銘々可被取分、但女中給分モ可被取分候、

一諸向共ニ右ニ準シ部分可有之候、

一砂糖会所蔵納リノ分手形銀ハ取分内書ニ可被相記事、

一諸向蔵々互ニ取替寄元等申談、一方ハ外書ニ可被相記事、

但江戸・大坂御仕登セ長崎・屋久島統砂糖代米等ノ私ハ本行ニ可被相記候、

一御内証様御方御渡方ニ付、御不足御取越ノ訳可被相記事、

右之通ニ候条於向々取調候節寄元類ノ私於受取、先本ニ相立候儀共ニ重ニ不相成様申詰候上、相調可被差出候、以上、

寅二月十九日

日高次左衛門

御勘定奉行衆

其外諸向略ス、

二九 太守公参府ニ関スル件 文化三年七月

一当秋琉球中山王使者被召列被遊 御参府答候処、右ノ節ハ 御中途御日数相重病御差障ニ付、去ル辰年

ノ通 御兪駕御当日迄被召連琉球人ハ如先規御家老並警固ノ者被相添、御領内ヨリ乗船被仰付、 太守様ニ

ハ直陸地御通行前以被遊御参府度旨、御願被仰上趣有之候処、御願ノ通被仰渡候段御到来候条、此旨向々ハ

可申渡候、

七月

伊織

市正

三〇 上屋敷御殿廻落成ニツキ御移転ノ件 文化三

年七月

一上御屋敷御殿廻御出来先月九日御移徒(徒カ)ニ付、 若殿様

田町御茶屋御出 太守様為 御名代表御門御式台ヨリ

御入、御規式等無御滞被為濟候段御到来候条、此旨向

々ハ可申渡候、

七月

將監

(島津久塞)

三一 仙臺通宝鑄錢通融ニ関スル件 文化三年十二月

一 仙臺通宝ノ鑄錢通融^(トナ) 取交致取替候儀一切不相成趣共

從 公義当四月被仰渡、其段ハ向々申渡置候処、間

々他国ヨリ入来候様ニモ相聞得、勿論旅人へ致取遣候

儀甚以不可然事候条、右仰渡通堅可相守候、尤御蔵々

上納錢ノ儀モ右鑄錢相受取間數、左候テ当分納居候分

御払等ノ節見当候ハ、撰出差分可置候、此旨向々へ申

渡、諸郷私領へモ可申渡候、

十二月

將監

信濃

三二 太守公琉人召連御登城ノ件 文化三年十二月

一 先月廿三日 太守様 若殿様御同^(トナ) 琉球人被召連御登

城、御懇ノ被為蒙 上意御直御請被仰上、若殿様ニ

モ被為蒙上意、畢テ 谷山王子 御目見先格ノ通相濟、

左候テ西丸へモ被召連御登城、大広間へ 大納言様出

御、御兩殿様 御目見被為蒙 上意候儀 御本丸御

同前被為濟、 谷山御目見ノ儀モ 御本丸同前ニテ、

諸事御先格ノ通相濟候段御到来候条、此旨向々へ可申
渡候、

十二月

信濃

三三 太守公琉人召連御登城ノ件 文化四年正月

一 旧冬十一月廿七日琉球人被召連御登城

公方様 大納言様大広間へ 出御、音楽被聞召上、畢

テ 御兩殿様 御目見被為濟、中山王其外へ拝領物被

仰付、御暇被成下、西丸へモ被召連御登城、同断拝領

物被仰付、諸事御先格之通被為濟候段御到来候条、此

旨向々へ可申渡候、

正月

將監

三四 千眼寺及西田寺延命院寺格ニ関スル件 文化

四年正月

一 千眼寺 右本山寺末寺相成 御目見寺被仰付置、御

隠居様御寿像被遊御安置候付、於虎之間寺社奉行申渡

之寺格被仰付、入院ノ御礼中紙三束進上ニテ 御目見

被仰付、年頭 御目見ハ是迄之通、順席ノ儀ハ本誓寺次被仰付候、

彌勤院末寺 西田寺 右千眼寺へ

御隠居様御寿像被遊御安置候付、思召ヲ以寺格当分之通ニテ千眼寺末子ニ改宗被仰付候、

大乗院末寺延命院 右寺格当分之通千眼寺末子ニ改宗

被仰付候、

右之通被仰付候、

正月

將監

三五 於郁殿離縁ノ件

於都殿〔都カ〕 右島津兵庫殿嫁御取返被成候旨被 仰出候付

テハ、御順ノ儀被 仰出迄ノ間先於郁様ト申上、書付

等モ此様文字可相認候、尤郁ノ字並同唱迄モ名付キ居

候人ハ可致遠慮候、

五月

〔新納久命〕
内藏

三六 郁君生母ノ件

郁君様御事青木休右衛門娘琴腹コトニ被遊御誕生候ヲ、林權太夫娘伊尾腹ニ御誕生ノ筋、是迄御取扱被為在候へトモ、以来ハ内実ノ通右琴御実母ニ被仰付候、

七月

〔前田久徳〕
監物

三七 郁姫君近衛家縁組ノ件

郁姫様御儀 近衛左大臣様御息辰辰君様へ御縁与御内談

被為濟候付、先月十八日御願書被差出候、右ニ付来春

御上京 近衛様へ可被為入旨 大御隠居様御沙汰ノ由

申来候、

八月

内藏

三八 重豪公論達

去ル辰年 大御隠居様又々御介助被成進、其砌御儉約

御年限中ナカラ五ケ年ノ間猶又稠敷御取締向鎮細被

仰出、諸人困窮ノ乍時節難被黙止出銀米並給分引方迄

モ被仰付、大坂新御仕送等ノ儀ハ 御下知被為在追々

御仕送物等モ相重ミ旁ニ付、相応ノ御出目有之、夫丈

ケ三都ノ御借財モ先年ヨリハ相減シ、御役々ハ勿論一
統出精ノ廉モ相見得 御満足被思召上候、然共墓莫太^(マツ)
ノ御借財高故、中々以御所帶方御立行ノ方ニハ未到着
候付、御年限モ相滿候得共、無抛又々去ル西年ヨル^(カ)来
ル卯年迄七ヶ年は迄ノ通御儉約被 仰出、三都ノ御借
財御趣法向モ被相替彼是御吟味被仰付御事ニ候、依之
於向々緩セノ儀無之様ニ候得共、兎角ニ其際ノ様無之、
物毎廢弛ノ方ニ成行キ、仰出ノ御趣意不相立方ニ相成
儀モ有之、不可然事候条無緩疎様可心掛候、勿論御役
場勤人数ヲ初諸向減少方ノ儀モ、押テ被仰付候テハ差
支モ有之積ト被 思召上候ヘトモ、尚御時節難被差置
無抛被 仰出置候処、追々取締筋申立連々本之通相成
候振合ニテ、御取縮向被 仰出候詮モ無之、仰出ヲ奉
輕筋ニ相当リ甚以不可然儀ニ候、且又御国役モ難被為
動程ニ成立ヘク御時節故、

上々様御身辺ノ儀迄モ御事ヲ被為欠 御不如意ニテ被
為在御事候処、右様ノ汲受モ無之等閑ノ方ニ相見得、
旁以別テ如何ノ至ニ候、依之於諸向右等ノ所得ト汲受

減シ方被仰付候処ヲ以、御差支不相成様申談可弁別候、
右ニ付テハ、夫丈ケ万端ニ付諸向晝夜可致骨折儀ニテ、
御氣ノ毒被 思召上候ヘトモ、此節ノ儀ハ被為及御老
年、至テ御心慮御世話被遊候御事候間、是非御取縮ノ
詮不相立候テハ不叶儀候処、何レノ筋ニモ仰出ノ御趣
意最通兼候間、急度相守リ晝夜掛心頭精々致御用弁候
様 思召候、就中大奥向御取縮向最通候様分テ可申渡
候、尤是迄段々御儉約被仰付候後ニテ、最早吟味ノ致
様モ無之抔ト諸向等閑ニ打過候テハ、決テ不相成候付、
日ニ新ニ尽心力候様於無之ハ、御所帶方御立直ノ期ハ
有之間敷候条、一統此旨ヲ 最初 仰出ノ御趣意無忘
却猶又鎖細尺吟味可致精勤旨、
大御隱居様被 仰出候、

三九 文武ニ関スル件論書

年若之面々、学文武芸ノ儀ハ第一心掛出精不致候テ不
叶事故、造士館・演武館ヲモ令造立、無油断致修練候
様ニトノ儀、段々申渡置通ニ候、然処此以前ヨリノ風

俗ニテ、兼テ懇意ノ者申合、夜会等相企、向々寄り集リ

内証ニテ会統(統カ)又ハ武術稽古致候儀モ有之由候ヘトモ、

其通ニテハ國中一統不致様成立候基ニ候間、向後右体

夜会ハ勿論向々寄集候儀堅停止申付候条、造士館・演

武館又ハ夫々於師家折角致出精、自分宅へ相集メ候儀

一切致間敷候、尤家柄ノ面々不斷師家へ差越候儀モ不

相成向、宅へ相招指南ヲ受ケ候儀ハ其通可有之候、左

候テ造士館・演武館掛ノ面々右ノ趣得ト相心得、稽古

方ニ付テハ油断無之様取計、夫々師家ノ儀モ右ノ心得

ヲ以門人教導ノ儀致出精候様可申渡候、此上万一致違

背候者於有之ハ、屹ト咎目可申付候、

右之趣不洩様申渡、猶又取締向等ノ儀ハ、家老中申談

大目附・大番頭・小姓与番頭へモ委細申聞届候様可

取計候、

正月

四〇 露国船取計方ニ関スル幕令ノ件 文化五年正

月

一ヲロシヤ船取計方ノ儀ニ付、去寅年相達候旨モ有之候

処、其後蝦夷ノ鳴々へ来リ狼藉ニ及ヒ候上ハ、向後何

レノ浦方ニテモヲロシヤト見請候ハ嚴重ニ打払ヒ、近

付候ニ於テハ召捕又ハ打捨時宜ニ応シ可申ハ勿論ノ事

候間、万一難船漂着ニ紛レ無之、船具等モ損シ候程ノ

儀ニ候ハ、其所ニ留メ手当致シ置可被相伺候、畢竟ヲ

ロシヤ人不埒ノ次第付取計方敷敷致候訳ニ候条、油断

ナク可被申付候、

右之通万石以上以下海辺ニ領分有之面々へ不洩様

可被相触候、

十二月

右之通江戸ヨリ申来候条為心得相達候、

正月

右之通此節従長崎御奉行被仰渡候条、可承向々へ

可申渡候、

正月

將監

(藤田政綱)
典膳

四一 文武ニ関スル件家老論達

年若之面々学文武芸第一出精無油断致修練候様ニトノ儀、追々被 仰出毎度面々承知ノ通候故、此以前ヨリノ風俗ニテ懇意ノ者申合、向々夜会致シ、内証ニテ会読式ト武術致稽古候儀モ有之由、其通ニテハ一統不致様成立候基ニ候間、向後造士館・演武館又ハ於師家可致出精趣共、此節猶又御別紙之通 御隠居様被仰出候付、難有奉承知 仰出之 御趣意人々急度可相守候、且家柄ノ内不断師家へ差越儀難成向ハ、宅へ相招指南ヲ受候儀ハ其通ニテ折角出精稽古方可有之候、右ニ付テハ師家ノ儀ハ多クノ門人引受ノ事ニ候間、猶以心掛丁寧教^(導カ)導可致候、乍此上若モ不守ノ族有之段相聞得候ハ、当人ハ勿論夫々相当ノ御取扱可有之候条、此堅ク相守候様支配下下夕役等へモ時々可申合候、

三月

將監

信濃

(島津久兼)

登

典膳

四二 所帯向ニ関スル論達

御所帯方御難渋ニ付追々被仰出趣有之、殊更去ル酉年御下向ノ砌、於大坂銀主中へ御直ニ御沙汰被為 在候御趣意モ有之候処、去年中大坂表御趣法向相崩候趣モ有之、甚御気毒ニ被 思召上候、依之当春大坂へ被遊御越彼表万端之仕向 御直ニ可被遊 御見聞、且ハ銀主中へ取計向旁ノ儀トモ 御直被 仰聞度旨被思召上御内々御旅行ノ御手当モ被 仰付候、然処右迄ハ初御役々御旅行御内沙汰ノ儀御内々奉承知、畢竟御趣意不相立トノ御事ニテ、御旅行ノ被為及 御沙汰ニモ候御事ト奉恐察候、諸御役々罷在ナカラ取調モ不相調、上様へ御心勞ヲ奉掛上候ニ相当リ、誠ニ恐懼仕候御儀、殊ニ御老年様ノ事ニモ被為入候処、旁以奉恐入候御儀、其上脇々響合ニモ相掛ル事候付、彼是ニ付今度 御越ノ儀ハ何卒御用捨被遊被下度旨、御内々願出趣有之、尤モニ被思召上、右ニ付テハ御趣意相立往々最通り候様、於諸向急度相改メ可致取捌候、左候テ此節御旅行

ノ儀ハ、弥願通被遊御延引、為御名代〔川上久考〕右近可被差越ト
ノ御事ニ候、若又以後 御直ニ不被遊御越候テ不被為
叶御事モ候ハ、其節御上坂可被為在候、此旨右近初
諸御役々へ申聞セ置候様、

大御隠居様被 仰出候段申来候、此旨御役人限奉承知
候様可申渡候、

三月

將監

安房

典膳

四三 砂糖方代官上申書附勝手方達書 余勢銀ニ

関スル件 文化五年四月三日

余勢銀

一三島ヨリ黒砂糖積登候当分ノ御船運賃・砂糖代錢、右
余勢銀ノ儀ハ最初金藏へ入付有之候処、砂糖藏二階へ
差分置候様寛政七卯二月八日、松崎次左衛門取次御証
文ヲ以テ被仰渡、入払ノ儀ハ御船奉行受持ニテ御座候、
一砂糖藏へ相納候砂糖代錢ニ相掛候口錢ノ内ハ部一小牟

田周藏へ被下置候処、寛政五丑八月朔日御物へ差上候
付、是又余勢銀方へ入付置候様、同六年寅四月右同人
取次御証文ヲ以テ被仰渡、首尾合等ノ儀ハ前条全断、
御船奉行受持ニテ御座候、

右ハ先年一往荷方御船二十三反帆余勢銀ノ儀モ砂糖藏
二階へ差分置候処、寛政十二年申閏四月二十三日、御
船二十三反帆御引取被仰渡候付、右二行ノ錢高マテ御
船奉行首尾合ニテ御座候、然処右砂糖入札申渡、落直
ノ者ヨリ上納ノ節ハ当座ヨリ出入上納申渡、都テ代銀
上納相濟藏役人預出見届候上、御船奉行へ致掛合、御
船奉行ヨリ入払申渡儀ニ御座候間、互ニ面働ノ筋合御
座候間、当座掛申渡候テハ差掛有之間敷ノ旨、御船奉
行方へ致相談候処、何ソ差支ノ儀モ無之候ニ付、当座
ヨリ奉得御差函候様返答承申候間、以来当座ヨリ砂糖
藏余勢銀方へ入払申渡候様被仰渡度、定詰見聞役へモ
申談此段申上候、以上、

文化五年辰三月廿一日

砂糖方御代官

田中諸右衛門

倉野善助

此表申出ノ通申付候条如例可申渡候也、

辰四月三日

御勝手方印

伊集院 平

御船奉行

砂糖方御代官

四四 樺山・秩父取扱文書破棄ノ件

樺山・秩父勤役中取扱ノ儀ハ何モ御取用ニ不相成候付、諸向帳留等モ都テ焼捨申渡置候処、別冊並別紙之通得差図候向モ有之、夫々ケ条書ニ附紙ヲ以申渡通ニ候、右ニ付テハ不得差図向モ此節申渡通相心得、諸事同様可取計旨可致承達事、

五月

信濃

四五 大御前様逝去ニ付忌服ノ件

大御前様御逝去ニ付御忌服左ノ通、

御遠慮一日 太守様

右御継母様ニテ御忌十日・御服三十日被遊御受管候ヘ

トモ、日数相過候付、右之通御遠慮、

七月

(島津久備)
安房

四六 財政困難ニツキ諸事縮少励行ノ件

此節無抛振合ニ付政事向何篇致下知事候処、所帯向極難渋ニテ江戸・京・大坂借銀増長致シ、利払其外用金は迄ノ産物料ニテハ余程不引足、大坂統金モ相滞當時勉事モ調兼候程成立候段細々聞通候、右之趣ニテハ今形召置候ハ、年々困窮国家難相立成行、其上万一公私ニ付格段ノ入価ニ及候儀トモ致到来候節ハ、必至ト差支可取計手段モ無之儀案中ニテ、誠ニ大事ノ時節ニ候間、一日モ難差置、則ヨリ掛役々ヲモ申付、諸向取縮鎖細ノ事迄モ自身聞届減少申付、且産物仕送り等ノ儀モ追々取調ヘ、国元ヘモ掛合何篇手ヲ尽事候、右之通乍隠居引受候儀不容易事ニテ、先年介助致シ候節トハ誤合モ相替、老年ノ儀兼テ其詮不相立成就不致候テ

ハ、尤老後ノ恥辱向トモ残念ノ致候故、日夜是ノミ致心勞候、然処江戸・国元共ニ是迄段々致省略候上ノ事候へハ、此節取縮ノ儀ハ致テセリ詰候事ノミ、其上賄料諸給金引方並一匁出銀迄モ申付、已前ニテ引替諸事不便利相成、諸人モ及迷惑甚氣ノ毒ニ候トモ、一通ノ事ニテハ中々可詮立様無之、年々衰微ニ及國中ノ面々飢渴ノ難ヲ難遁相成候必定ニテ、其節ニ致候テハ最早相救趣法モ有之間敷、兎角此渥急ト不取汲候テハ不叶事候条、不得止事前文通稠敷取縮申付、年限中ニハ是非其詮相立、諸人ヘモ安堵為致度念望ニテ、〔マツ〕 事候間、此旨ヲ得ト汲受、一往ノ不如意ハ致堪忍專国家ノ為ヲ相考、向々勤均等モ可成丈差クリ、一統致和熟令情勉、末々迄モ心得違無之様申渡、一通申渡分ニテハ得心致兼候モノモ可有之候間、支配頭等ヨリ右之趣意親切ニ可申聞候、右之趣江戸・国元並京・大坂屋敷迄モ不洩様申渡、猶又家老中ヨリ右ノ趣意ヲ以別委細ニ申渡、諸事行届候様可取計候、

九月

家老中へ

四七 所帶向難渋ニツキ重出米ノ件 文化五年九月御隠居様當時何篇御下知ニ被為在候間、御所帶方極御難渋ノ趣被 聞召上、別テ御世話被遊情々御取縮被仰付、既江戸表御統料ノ内一万兩ハ被相減候、此度猶又大坂表ノ儀ニテ被聞召通候処、御産物料ニテハ、江戸・京・大坂御統料御利払等、右分ノ及御不足、御仕登ノ品相重候様被尽吟味事ニハ候へ共、深ク御吟味無之候テハ、急速詮立候程ノ御取計此涯ノ御取凌方不相見へ候、御領國中一統差廻候折柄ニテ、猶可及難儀事旨御氣ノ毒被 思召上候へトモ、不被得止事当辰年ヨリ先キ五ヶ年一匁出銀被仰付候、牛馬ハ出銀不相掛候、且高一石ニ付五升重出米被仰付置候へトモ、右出銀被仰付候間、御用捨被為在二升ハ御免被仰付、当辰年ヨリ先キ五ヶ年重出米被仰付候、

右之通

御隠居様被 仰出候旨申来候条、御趣意ノ程難有奉扱得、於諸向モ一涯儉約相用少事進モ費筋ノ儀トモ無

之様、兼テ掛心頭可令省略候、左候テ上納方ニ付テハ、
已前ノ振合通可得相心候、此旨表方へ致通達、奥掛・
御勝手方へモ可相達候、

九月

將監

信濃

登

典膳

四八 櫻田邸焼失ノ件

旧臘七日暮六ツ過頃、江戸櫻田御屋敷へ火起リ段々消
方有之候へトモ、難取鎮御長屋等及焼失、右ニ付翌八
日御差扣御伺書被差出候処、同日御用番青山下野守様
ヨリ出火御遠慮被仰渡置、同十五日被成候旨被仰渡候
段御到来候、

正月

登

四九 拝借米金返納ノ件

去ル丑年御米一万石・御金一万兩御拝借被為蒙仰、去

卯年ヨリ十ヶ年賦御返上納ノ筈候へトモ、御願ノ趣有
之当年ヨリ御上納ノ筋被仰渡置、且又去々寅年御金一
万兩御拝借被為在、是又当年ヨリ十ヶ年賦御返上ノ筋
被仰渡置候処、当御時節ノ儀故御役々迄モ致吟味、二
口共ニ御上納ノ儀ハ御繰合出来兼候付、丑年ノ御拝借
金米御返上御皆済ノ上、寅年ノ御拝借金来ル寅年ヨリ
十ヶ年賦御返上ノ筋被仰付被下度趣ノ書付、御勝手御
掛牧野備前守様へ被差出候処、去月廿一日備前守様ヨ
リ其通被仰渡候、

正月

信濃

五〇 三都借財返済ノ件

御産物料十四万兩ヲ以三都割合、江戸御統料七万兩余
ニ三都御借財利払、京・大坂御常式御入用等ハ可成丈
差操(操カ)ヲ以相払、余銀相残候様可取計旨被 仰出候趣ハ、
別紙申渡通ニ候、尤別紙ノ御趣意ハ、御臨時ノ儀マテ
モ御産物料ヲ以取補候様ニトノ儀ニテハ無之、御子
様方モ追々御成長被為在御事候へハ、御身ノ廻其外ニ

付御入り増シモ有之、且御慶事等ニ付御臨時ノ儀ハ自
 ラ御産物料ニテ不引足様候ヘトモ、御常式ノ儀ハ是非
 此節ノ御趣法向ヲ以取補儀様被 思召上候、依之於諸
 向一涯御取締向鎖細可吟味候、右ニ付テハ是マテ諸御
 役場勤人数等減シ方被仰付置候向モ、御用差支候趣申
 立、連々本ノ通ニ相帰リ候振合ニテ、御規定相破候端
 ニ相成甚以不可然、 御役場ニテハ纔計ノ御出方ノ様
 ニ候ヘトモ、諸向ニ行キ渡リ候テハ過分ノ及御入増事
 候付、其所能々致勤弁故障筋不申立、向々互ノ由諸差
 操相勤候様被仰付候、且又御扶持米拝借等ノ儀此涯一
 切被仰付間敷候、夫共及飢渴候程ノ者ヘハ自ラ御吟味
 モ可有之事候ヘトモ、色々弁ヲ付ケ拝借等申出候ヘハ、
 難被黙止被仰付儀モ有之事候付、於諸向右ノ心得ニテ
 鎖細取調行届候ヘハ、此節ノ御趣法向ヲ以御差操可相
 調旨被 思召候旨、訳テ御沙汰被為在候条、別紙 仰
 出承知ノ御役々ヘ不洩様可申渡候、

正月

典膳

五一 郡奉行久保平内左衛門上書 儉約ニ関スル

件 文化六年正月

格別成御省略無之候テハ、御規ニ相掛事迄モ御減少被
 仰付、入りヲ量リテ出スト候得ハ、何レニモ御産物料
 フ本ヲ被立、右之御料ニテ往々御取締出来候様、御所
 帯之大根ヲ不被召置候テハ、御立直之期決テ有御座間
 敷候、此儀当御儉約ニ付御吟味之題目成儀ト奉存候、
 一 下 感筋不相掛候様可遂吟味旨被仰出、御趣意承知仕
 難有奉存候、然処万一御所帯之大根ヲ不被召居、枝葉
 間ニ合ニ專御仕送ヲ可被相重トノ及吟味、国産御買円
 ト等被仰付度、自然ト下之利ヲ奪ヒ候向ニ成立、下々
 益致困窮、仮令当座之難ヲ被相凌候共、却テ往年之差
 障ニ可罷成候間、枝葉間ニ合之御吟味ハ被相止、往年
 御治定之御吟味有御座度奉存候、
 一 御所帯連々御手広罷成候処ヨリ、御高不相応之御費用
 并御扶持人等格別為相重筋目只今之斟酌ハ可有御座候
 得共、已前御産物料ヲ以被為続候砌ハ、御扶持人并諸
 人価ヲ約ニシテ旁御省略不被仰付候テハ、御蔵方并御

仕上米決テ相重申間敷、然処諸御入価之儀ハ何分可被相省候得共、御扶持人御減少ニ付テハ深く御勘弁有御座度、子細ハ持高ニテモ相応ニ致所持候者ハ、御扶持米ニ被相離候共兎哉角可相凌候ヘ共、無縁困窮之士御扶持米ノミヲ以漸ク妻子ヲ育、御扶持米ヲ離候得ハ則ヨリ及飢体ニ士幾百人可罷成哉、何レ難被捨置事ニ候ヘハ、又無抛本々之通ニモ被仰付可被難最通、仍テ御扶持米ニ相離候共、兎哉角致渡世候様、不容易事ニハ候ヘ共、近在之内ヘ拔地自作高ニテモ被成下欵、何レニモ御吟味有之、先様御扶持米ニ相離候共渡世出来候様、御取扱之上ニテ御減少被仰置付、無左候テハ一統之人氣迄モ相禿可申候得ハ、御手厚御吟味有御座度奉存候、

一 先年来高売山御手山等諸所ヘ被召入、山々伐雜〔商カ〕口処〔候カ〕ヨリ、田地用水別テ相減、年々干損地等相重百姓勞入候諸在多有之候故ヲ以、伐雜方等之儀山奉行ヘ毎々申談事ニ候、山々伐雜候得ハ、地氣薄ク大雨之砌雨水一所ニ円リ流之勢ニ伐緒古根洗拔、田地ハ勿論川下ヘ砂入

川底高相成、洪水毎ニ井手溝洗崩田地砂入、人少之在内存分持除方モ不相調、地位連々相劣候処ヨリ、田畠見掛并休地等年々相重、又門割ニ如何計可及御損失哉、然処ニ材木屋調文等ニテ、過分御手山等被召入候ハ、干損地并公役等相重勞百姓共益禿入可申、殊ニ近年浦大船過分致減少候上、船材木等迄モ為被相減由候処、最寄山床并華木等カ迄モ伐雜候ハ、田地用水支ニ罷成ノミナラス、已来御国中用弁無、船材木等却テ他国ヨリ買入候様共相成立候テハ御費成事ニ候付、旁御吟味有御座度奉存候、

一 御国之儀ハ琉球・三島被召拘、専大坂江御仕送有之事ニ候得ハ、浦大船致減少候付テハ御仕送相滞別テ御不勝手ニ可罷成、然処近年大船夥數相減候由、畢竟先年砂糖惣御買入又ハ其已後御買重ニ被仰付候故、船頭・水主共自分交易薄ク、且先年荷方船御造立彼是ニ付テモ浦々至テ差禿、船造立等之勢モ無之、適所帯方相応成者共モ、船造立イタン候テモ余沢無之処ヨリ新造存立候者モ無之人氣ニ相聞得、其成解船ノミ相重テハ往

々信州表海不所持山国同前不自由ニ成立、御国中可禿入候、御国中余沢有之浦々迄モ延立居不申候テハ、大船等決テ可相増儀ハ無之、当分ヨリモ尚連々御差支ト可相成候間、旁御吟味有御座度、且此節屋久島・七島諸浦鯉節御買円ニ付、御仕送等相重候様等之御吟味ニ候へ共、仮令迷惑不相懸様御買入候共、御物ト候へハ、目附等掛被仰付、直付等旁事煩勞之向可成立候へハ、浦人共決テ染付不申、却テ漁方取止候氣向ニ罷成、国産往々可相減、殊ニ有少纒綿・塩・大豆・諸反物等之儀ハ、イツレ他国ヨリ不入来候テ不叶品ニ候処、右鯉節・國分タハコ等ノ品々ヲ以交易之差繰イタシ候テモ、前文品物料ニテ引足リ申間敷哉、左候得ハ当分之通、右品々ハ商人之手ニ不被渡置候テハ商路相絶、御国中ハ勿論琉球島々迄モ差支ニ可罷成候へ共、鯉節并國分タハコ等御買円之儀、今一往御吟味有御座度奉存候、百姓潤立居候へハ出来程相増御仕登米モ可相重之処ニ、近年諸郷百姓相勞レ御救部下リ・門割等過分之及村数、其上見等年々相重ミ候、尤去秋之儀万災殃等

モ無之豊年之年柄ニ候へ共、畢竟人少之村田地勢ノミニシテ人事不相届故ヲ以、定代不引足上見願出、上見高八万三千石余引入、現米大概壹万三千石余ニ及候、且去ル子年ヨリ去限年迄五ヶ年之上見高相シラへ候処、四拾四万石引入現高七万二千石余ニ及、其外田畠見掛并休地等相込候ハ、尚及太分可申、且右五ヶ年之間門割ニ付下リ高取シラへ候処、二千六百石余ニ及候、又当分部下リ被仰付置候村数五十ヶケ村有之、去辰年、去ヶ年之現下リ米相シラへ候処、二千二百石余ニ及候、皆トモ極々差勞候上御救ニ候へハ、大形八部八ヶ年御救ニ候、旁取合候へハ夥敷次第、其上当分部下・門割申出頭御免被仰付、未御免不被仰付相伺置候村数拾ヶケ村余ニ及候、今体之勞ニ候へハ部下リ・門割并上見等追々相重可申候へハ、果モ無之次第、仍テ去ル子年諸郷百姓共潤立候様可遂吟味旨被仰付趣有之、廻勤之上潤立候儀并勞之由來委敷相シラへ再条得御差凶置候通ニ候、百姓ハ国之大根ニ候処、今体連々勞入候テハ御国家衰頹之基ヒニ候条、朝暮及心痛罷在候、

一百姓差当難渋カリ候ハ、御藏上納榭目ニハ先年不法ニ

相重ミ候故ヲ以、何卒往古御規定之榭目ニ被相改度、

於何方モ愁訴イタシ候、榭目之儀惣御引并之砌密法之

御規ヲ以被相定置、干今門割并上見等之砌於郡方其定

ニ候ヘハ、聊モ御規之榭目相乱間敷候処、高居口ハ已前

之通被召置候、上納榭目ノミ被相重候、仍テ先ツ寶延年

間被仰出置候榭目ヲ本トシテ重榭目相シラヘ候テモ、

大概田高六十万石ニシテ壹ヶ年分之現重米二万六千石

余、自分作得米之内ヨリ差足致上納候、尤右重米高居

口ヨリ余計之重候ヘハ、勞百姓共專他借ヲ以差償致上

納、果ハ牛馬農具ヲ相払身売賃取ト罷成、妻子及離散

候儀不便成次第ニ候、上納榭目不被相改候ヘハ、仮令

門割・部下リ等之御救被仰付候共、当難ヲ暫ク相解ト

申迄ニテ難詮立、往々ニ相掛候テハ如何計之損失ニ相

成候哉、乍然窮士御救ヒ筋ヲ以蔵役等被仰付事候ヘハ、

往古御規之榭目ニハ俄ニ難被相改候半欵、何レニモ御

根本相痛候テハ御所務モ夫長ケ相減、畢竟御國家之為

ニ被相成專存御損失事ニ付、重榭目等屹ト被相改候様

御吟味有御座度奉存候、

一 肥後熊本領御国ヨリ御小高ニテ、年々拾万石余之御仕

登米有之由ニ候ヘハ、御国ヨリハ表向之余モ御仕登相

調筋ニモ相見得可申候ヘ共、肥後ハ全体田賦之向致相

違候、御国ハ往古訳有之、粃九斗六舛ヲ高壹石之引結

有之、他国ハ何方モ納米壹石ヲ高壹石ニ引結有之、左

候ヘハ御国之御朱印高七拾五万石ハ、肥後同様納米壹石

之高ニ引結候ヘハ、纔三拾六万石之御高頭ニテ、肥後

ヨリハ却テ内実御小高ニ付、左様ナル訳ヲ以往古ヨリ

諸事御手細之御吟味有之哉、左候ヘハイツレニモ御

高御不相応之御取縮、又ハ前文ニモ申上候、第一御所

務不捨様之御取扱無之候テハ、御仕登等之余米決テ相

見得申間敷、然処御国之儀專三島砂糖御仕登ヲ以御国

用被相仕廻、第一御産物ニ候ヘハ、若不相応之御買

重等被仰付島人致迷惑候テハ、作職不染付様成立、却

テ御益之基（イ）ニ候間、往々人氣相競末永ク上納相調候様、

御手厚御吟味有之度奉存候、

一 御所帶御難渋ニ付、無御抛重出銀・出米迄モ多年被召

掛、或ハ御仕送物等セリ被詰御國中一統及勞候処、此上御仕送御買円メ諸事極々セリ被詰候トモ、成程少々当座之御出方ハ相見得、御年限中其印シ可有御座欵、乍去数年ヲ経候ハ、又当分ヨリ勞重リ、其時ニ至リ候テハ前後之御差償モ出来兼、何様之御難題御出来モ難計、左候ヘハ当分之御出方却テ後年差障之基ト可罷成、依テ此節御所帯之基本ヲ被召居、是非御産物料ヲ以往々被為統候様御治定之御吟味有御座度、然処太分之御利払ニ^{〔虫損〕}御統残ヲ以江戸・上方表御利払迄モ被為濟候様ニハ、御取縮俄ニ出来兼候半欵、左候得ハ御本意トハ不奉存候、誠ニ不容易事ニ候ヘハ為御国家不被為得止事無余義次第ニ候ヘハ、無抛一往御年限ヲ以江戸・大坂表御利払御断被仰入候テハ如何可有御座哉、万一御手伝等不時御金用之砌御差支可罷成之御心遣モ可有御座候ヘハ、屹ト御所帯御治定之上ハ壹ケ年ニ御利払御断金之内大半御余計相見得候様、何卒御省略有之、右ヲ年々被化置^{〔屯カ〕}五七年モ過候ハ、仮令御^{〔虫損〕}等被仰付候条、御難題之儀共有御座間敷哉、尤此涯御卒

御手伝御遁候様之御取計モ可有之哉、万一其内御金用之儀有之候ヘハ御所帯之地盤相居候上ニ候得ハ、諸人モ致安堵快ク切羽齎成共相ハツシ、御用弁相勉度氣請ニ可罷成、尤銀主共ニモ今成ニ候ヘハ終ニ御本之期不相見得、依テ太儀ニハ可存候ヘ共、年限ヲ待候ヘハ屹ト本濟相調ト之趣、御内意之儀ヲ本トシテ実ニ申含候ハ、当府ヘ乍迷惑後年ヲ相考、随分納得可致事ニ候、乍去銀主之内当日難渋之者ヘハ又御救助之御吟味モ可有御座、左候テ重出銀米多年被相掛一統之人氣充入砌ニ候ヘハ、寛厚之御吟味人氣相競候様之御取扱、御国家永久之基ニテ可有御座、御國中ヲ御物御蔵ト被思召被貯置候ハ、不時御用之節ハ何時ニテモ^{〔虫損〕}上事ニ候、然処当座之難ノミヲ被相凌候迎、枝葉或ハ当座間ニ合之御吟味ヲ以、国中之油ヲシポリ、限アル御産物ヲ以、イツ限リナキ御引払等有之候テモ御國中益枯果、已来変事御到来候半モ難計大切成砌ニ候間、何卒御国家永久之儀ト当御儉約之機会ヲ不被失、御吟味肝要ナル儀ト乍恐奉存候、

文化六年己巳正月

久保平内左衛門

五二 教授黒田才之丞上書

儉約ニ関スル件 文化六

年正月カ

右ハ請持御役場之儀ノミナラス御^{〔イ、ア〕}格并他役場ニ相掛事モ有之候ヘハ、旁御吟味之端ニモ可罷成哉ト、存付候大意申上候、尤江戸・上方表御利私御断之儀誠ニ不容易御取扱、且御断之上ハ御規定ハ勿論、不時御用込モ容易ニハ致出銀間敷候得共、公辺御勉向等ニ付万一可被及御差支哉モ難計、依テ卒爾ニハ勿論御手モ可被難相付、乍去今形極々御難題ニ被為及候并由来ハ、御所帶御手広被成立候処ヨリ連々御費用相重、臨時御物入事ニ付テモ江戸・上方表御借銀致増長、右之御利私ヨリ被為追候故ニ候ヘハ、御費用屹ト被相省御所帶御立直之趣モ有御座間敷哉、勿論御所帶之地盤不相居候ヘハ、右之御余勢モ終ニ難詮立、左候ヘハ容易ニハ難申上奉存候得共、誠ニ無余儀御時節柄ニ付、御吟味有御座度、且前文申上候通御所帶御難涉之病根、御費用并御利私相重候両条ニ候ヘハ、先余事ヲ被差置、幾度モ右之病根ヨリ御吟味有之候儀、当御儉約之御急務ト奉存候、以上、

御儉約掛郡奉行

一 御所帶向極々御難涉ニ付、御用分御不足ニ付用ヲ足財ヲ生スルノ道吟味被仰付、先達テ御ケ条書御通達之趣有之候間、私存付之儀右ニ申上候、當時差当之御急務二事ト奉存候、第一ハ入ヲ量リ出ス事ヲ為ニテ候、是ハ財物ヲサマリノ程ニ応シ便ヲ致事ニテ候、然ハ古今財ヲ生スルノ道色々申置得共、大極時ニ因処ニ随候計策ニテ、大学所載生財有大道、生之者衆、食之者寡為之者疾、用之者舒ト申事、必天下豊饒ニ罷成候定格、和漢古今不易之道ニテ、古人モ財ヲ生スルノ仕様此外ニハ無之段申置候儀ニ御座候、生之者衆トハ人民各職業有之、徒ナル者ナケレハ財物ヲ出来スル者多ト申事ニテ候、食之者寡トハ銀ヲ受ルモノ少ト申事ニテ候、為之者疾トハ百姓ヲ公役ニ使フ事稀ナレハ、耕作等十分力ヲ用ト申事ニテ候、用之者舒トハ錢穀之使方余計

有之ト申事ニテ、即チ入ヲ量リ出ス事ハ為之事ニテ御座候、右四ヶ条之内入ヲ量リテ出ス事ヲ一ヶ条、當時之御急務ト申候訳ハ、タトヘハ百万石之所帶ニ貳百万石之費用有之候テハ、一年モサザヘ不申、百万石之所帶ナレハ七八拾万石程之費用ニ定メ余計有之候様イタシ、水旱・窃盜不時之變ニ備置申答候、當時 上様格別之御取縮ニ付万端費用以前トハ相替為申答ニ候得共、御国許并江戸御統料京都・大坂等之御費用御物高ニ相応可仕儀ニ御座候ヘハ、入ヲ量リテ出ス事ヲ為之道ニ相叶不申、乍恐御所帶御取直之程如何可有御座哉ト奉存候、此儀御所帶之根本ト奉存候間、何卒入ヲ量リテ出ス事ヲ為之御仕向御議定有之度儀ト奉存候、而国中之游民百姓在所ヲ出テ市中三居住スル者ニテ候、游民多ク罷居候故百姓ハ減申由、且旅人モ游民之内ニテ候被弘、録重之数ヲ被計百姓之夫役ヲ被減候儀迄夫々其御所置有之候ハ、財ヲ生スルノ道ニ於テ大綱已ニ備ルト申者ニテ、大学ノ事ニ符合可仕候、其外利ヲヲコシ害ヲノカレ候瑣細之儀共ハ、事之緩急ニ随テ御取行可有之奉存候、諸産物之儀ハ御国用ヲ被足候者ニ御座候ヘハ、

御仕送之儀ニ付テハ、御国中イタミニ罷成事ハ可宜奉存候、其内是迄売人共取扱他所ニモ売捌且品物交易イタシ御国中潤ニモ相成候儀共、御物御取捌相成候ハ、商売ノ道フサカリ御国中不通用之方ニ相成可申哉モ難計奉存候、尤唐土ニテモ唐宋已來捲茶捲塩ト申事有之、茶塩ヲ御物ヨリ一年ニ御取捌有之、右ニ付人民致迷惑候儀相見得申候、第二ニハ奢侈ヲ禁シ風俗ヲ被改度奉存候、其訳ハ今大平二百年ニ及、四海一統驕奢之最上ニ罷成、衣服・飲食・家屋三ツノ物ハ当用之物ニ御座候間、先是ヲ拳申候、其余ハ押テ相知可申候、善美ヲ尽シ候一事ニテ申ハ、此已前ハ夜話等之節濁酒・枯魚ニテ候処、当分ハ美酒盛饌ニ罷成候、ケ様之習連々相統上下一同ニ困窮仕候、先年已來質素之筋度々被仰渡候ヘ共、最早一統之風俗ニ成立今以驕奢相止不申候、依之何卒衣服之別ヲ被相立飲食家屋等ニ至皆制限有之、風俗一新有御座度儀ト奉存候、差知為申儀御座候ヘ共、古來驕奢ニシテ富タルハ無之候、国天下ニテ申候ヘハ、足利家之代驕リ甚數ク日本窮閭明之天下

ハ錢ヲ被乞候事有之、漢之文帝儉ニシテ天下豊饒、武帝之時ニ至テ大倉之米陳々相困クテ不可食由相見得申候、此等之事ニテ奢ト儉トノ即シ明白成儀ニ御座候、此段申上候、已上、

御儉役掛教授

黒田歳之丞

五三 弓奉行面高源之丞上書 儉約ニ関スル件 文

化六年正月

當時御所帶向極御難渋ニ付、此節格外之御省略被仰出我儀モ掛リ被仰付、厚 御趣意謹テ奉承知、且御規定ニ相掛候事ヲ存寄候儀ハ可申上、分テ被仰渡趣モ承知仕、旁得ト相考申候処、老年已来段々御所帶方被差廻〔追カ〕、夫故御儉約ヲモ毎度被仰出候へ共、右御詮立之程相見得不申、已ニ当分ニ罷成極々御難渋被成立候付テハ、何レ格別成御省略ヲモ被仰出、屹ト御立直之御吟味無之候テハ不被叶砌ニ御座候へハ、此節之御省略的然之御事ニ候、乍恐難有奉存候、然処先年ヨリ之儉約之次

第物ニ奉恐察候処、專御出方ノミ之被及御吟味ニ、下々出銀重ヲモ被相懸、彼是御所帶御立直之御取扱ニモ為被及事候へ共、竟ニ詮立不申、御國中相勞迄ニ罷成候、御儉約之儀上之御費用ヲ被捨御余沢下々ニ及候本意ヲモ被失、且風俗モ自ラ貪利之方ニ罷成、御吟味之外成御損失モ可有御座、御国中之儀ハ御家内同前ニ御座候へハ、下々昌饒ニ罷成候得ハ、御所帶之根本髓ニ可罷成之所、畢竟御省略之御本意ヲ被失候故ヲ以、右之詮モ相見得不申、却テ御難渋相増候罷成何共奉恐入次第御座候、右ニ付テハ此節御儉約之儀、是迄之向ヲ被相替、御所帶大本ヨリ被及御吟味之筋モ先年御儉約同前之向ニテ、益御出方ヲ下ニ被相求候御取計罷成何共心痛仕候、右通候ハ、又々御立直之詮相立申間敷哉、此節御儉約先年已来トハ時勢モ相変、屹ト御立直無之候テ難叶、誠ニ大切成折柄御座候へハ、何卒御儉約之本意ヲ被相立不要之御費用ヲ相省ラレ、御產物料ヲ本ニシテ御所帶之御地盤ヲ被召、諸向之儀モ御難渋ニ被及候根源ヨリ御吟味仕候様被仰付度奉存候、左様無之

候テハ、本ヲ忘レ末ヲ馳候及吟味事ハ多端ニ罷成、竟

ニ御省略之本則相立申間敷奉存候、近比憚多申分御座

候へ共、御〔トキ〕帶ハ極被及御難渋人心モ一統〔トキ〕惑之砌ニ

候処、万一此節御取扱之向ヲ被失候テハ、御國中一統

望ヲ奉失、御国家之安危ニ相掛リ誠ニ御大切成御時節

柄ト奉存候、私式イカ計恐多奉存候得共、於此節存分

ヲ差扣申候テハ御奉〔トキ〕之筋ニ不相叶折柄ト相考、身分

ヲ忘却仕難點止御見合之端ニモ罷成哉ト此段申上候

何卒人情世体之儀ヲ得ト被察、幾度モ御深切ニ被懸御

吟味度奉存候、已上、

御弓奉行御檢役掛

已正月

面高源之丞

五四 岸喜右衛門外三名上書 儉約ニ関スル件 文

化六年正月廿日

一御所帯向極御難渋ニ付、御借入銀致増長御利私其外無

御抛御用金、是迄之御產物料ニテハ余程被為及御不足

候付、掛リ役々ハ勿論、於諸向之瑣細之儀迎モ細密ニ

尽吟味、何レノ筋モ近年中御所帯方立直候様、先達テ

ヨリ段々被仰出御趣意之程承知仕、誠ニ奉恐入次第候、

依之私共見聞之趣左ニ申上候、

米穀・砂糖・生臘類ハ勿論、其外御國產諸色此已前之

御仕送高トハ相重方ニ当分於諸向精々吟味事候間、

格別相重候儀モ可有之、且又諸向段々御取縮ヲモ被仰

付候テハ、是又屹ト其詮相立可申ト奉存候得共、太分

之御借入金之儀御座候へハ、御產物料并諸御取縮之出

目重米尅勿出銀等取加候テモ、御年限中御本濟迄可相

調ハ、乍憚無覺束奉存候間、御領内大身分以下諸郷末

々迄モ内福之者多罷在候ニ付、応分限出銀被仰付度儀

ト奉存候、当御時節柄之御事ニ御座候間、人々家内極

々取縮〔此間老枚程虫食切ニテ不相分〕之者共モ等閑ニ存

居候哉ニ相見得申候、此節ハ大身大録〔録カ〕之向ヨリ屹ト涯

立候程之儀有之候ハ、御領内一統氣請罷成、分限

相応ニハ差上可申筈御座候、御領内ニ罷居候者不依貴

賤以 御国恩渡世仕、其外余財ヲモ貯居候者モ有之候

間、御用ニ付テハ頭押ニ出銀被仰付テモ随分奉畏可差

上事ニ候ヘ共、人々其身才覚ヲ以所持仕財宝ニ候ヘハ、其通ニテハ人氣ニモ相掛、万一御政事之御妨ニモ罷成哉モ難計儀ト乍憚奉恐察候間、前件申上候通、御年限中大身之向并重御役之向ヨリ詮立候程之儀有之候様有御座度、左候ハ、下々奉感服一通リ御触流シ有之候テモ追々取上可申哉ト奉存、此段申上候、以上、

岸喜右衛門

巳正月廿日

和田仲太夫

相良満右衛門

有馬藤七郎

五五 桂太郎兵衛上書 儉約ニ関スル件 文化六年正月

廿二日

一 此節分テ御儉約筋被仰出候ニ付係リ被仰付、御規定ニ相掛候儀迄モ致吟味申出候様被仰渡承知仕候、御所帶方之儀御産物料ヲ以御統方無之候テハ不被為叶事ニ候処、連々御手広ニ罷成、別テ及御難渋候故何レ之筋此已前相重居候御費用被相省候儀、御出方可相成ト奉存

候間、先差当存慮之趣左衆申上候、

一 第一世上之奢御停止之事、

但千石已上之永部へ被為入候ハ、百石位、千石以下ハ

二百石位ニテ女中両三人之間輕キ御賦ヲ以被召付度候

一 大奥女中御減少之事、

但御吟味有御座度候、

一 御城下御茶屋御減少之事、

但磯・尾畔迄被残置其外御取除、

一 聖堂内御取縮之事、

但厚キ思召ヲ以御造立為有之賦ニハ候ヘ共、此節之儀

ニテ、聖堂迄被建置奉行老人被掛置、右詰席沓ケ所之

外御取除、演武館之儀ハ弓場・犬追物場被残置其外御

取除、

一 神農堂内御取縮之事、

但座廻迄被残置寺社方支配被仰付、座主之儀ハ受持吟

味次第、

一 御城下足輕番所御減少之事、

但西田橋迄被残置其外御取除、

右ヶ条之外瓊細成儀迎モ詮立候向存付候ハ、追々取シラヘ可申上候、已上、

己正月廿二日 桂 太郎兵衛

五六 御勘定奉行上申書上納米金ニ関スル件 文化

六年二月十二日

一諸人拜借取込御取替滞納米錢等皆納不相調、依願御取
取ヲ以年府上納被仰付候人ノ内、御役人・書役・小役
人相勘定扶持被下置又ハ与力・足輕等御切米被下置者
ノ内、被究置候年府上納方銀ニテ及延引候儀段々有之、
中略、

以来ノ儀ハ右様定扶持被下置候人数被究置候、年府上
納其年中上納無之為差誤合モ不相知及延引、幾度モ面
働ニ相成候人ハ手形御座候間、問合ノ上其身被下方ヨ
リ差引上納被仰付候テハ、如何合有御座哉、年府上納
ノ儀ハ頭御取取ヲ以、夫々被下方等ノ定例ヲ以テ輕目
ノ上納被仰付儀ニ御座候処、定扶持申受右通延引ニ相
成候儀ハ不都合ニ御座候、已来右通問合ノ上差引有之

候様被仰付置候ハ、第一上納方締ニモ相成格別納リ
方相増可申候、中略、

弥申出通被仰付儀ニ御座候、物奉行其外支配下有之候
御役場ヘモ被仰渡置度、末略、

辰二月十二日 御勘定奉行

此表申出ノ通申付候条、如何可被申渡也、

辰二月廿三日 御勝手方印

- 島津右平太
- 御勘定奉行
- 御納戸奉行
- 物頭
- 御船奉行
- 御広敷御用人
- 高奉行
- 御馬頭
- 御代官
- 御数寄屋頭

五七 物奉行上申書 諸向代銀上納ニ関スル件 文

化六年三月廿四日

一 不依何色於諸向代銀上納申受被仰付候節ハ、代銀相調候上諸品相渡申管候処、間ニハ代銀上納無之内諸品相渡及滞納居候人有之事候ニ付、以来ハ代銀上納相濟候上諸品相渡候筋、向々へ屹ト被仰渡置度、且御薬園方薬種ノ儀代銀上納ニテ医師中ニテ申受被仰付候儀有之由候処、及滞納纒ノ内上納ニテ年府又ハ月延等申出候人多々有之、当座へ調被仰渡候儀多々御座候、当御時柄御不益筋殊ニ逾追被召立候御薬園ノ儀、其詮薄方ニモ可有御座哉、依之已来薬種ノ儀モ代銀上納ノ上申受被仰付候御吟味筋ハ有御座間敷哉、当分通ニテハ往々滞納ノ人相屯御取扱難被成向成立可申哉ト吟味仕候、末略、

文化六年巳三月二十四日 物奉行

可為吟味通候、

五月

信濃

五八 砂糖方代官上申書附勝手方達書 余勢銀ニ

関スル件 文化六年四月四日

一 先年御造立ノ御船二十三反帆運賃・砂糖代錢、砂糖蔵へ余勢銀方小座被召建置候処、其已後二十三反帆御引取ニ相成候得共、当分御船運賃・砂糖代錢右ノ余勢銀方へ本立ニテ都テ御物方へ御入付相成候間、余勢銀方小座被相除御物方へ入払被仰付度奉存候、右通運賃・砂糖代銀見合ニ付テモ、御物方引付元ニ相同居、右小座ノ儀ハ名目マテニテ二重ニ取扱ニ候故、御船奉行へモ右之趣ヲ以テ懸合仕候処差支無之旨承、定詰見聞役へモ申談此段申上候、以上、

文化六年巳四月四日

砂糖方御代官

森岡萬左衛門

伊集院甚右衛門

此表申出ノ通申付候条如例可申渡候也、

巳四月五日

御勝手方印

相良此右衛門

五九 御船奉行上申書 不納銀調ノ件 文化六年四月

十八日

一 当座先年以來ハ不納銀シラヘ方被仰渡、去ル子年ヨリ
 藏方目付ヲモ被相掛、是マテ折角催促申渡段々相片付
 候処、諸郷ノ内不相片付株々有之、是マテ及数度片付
 方申渡候得共、延引相成当座不納銀手広事ニテ右マテ
 ヲ取扱不仕候ニ付、外々催促取掛候テ不致沙汰候得ハ、
 其成ニテ届又ハ片付等不申出モ有之、今通ニテハ遠方
 書付ノ往返マテニテイツ相果候儀モ相見得不申、筆・
 紙・墨ノ費ニモ罷成候、所役トモニモ等閑ノ取扱ハ不
 仕筈候得共、前文ノ通書付マテニテハ何ケ度申渡候テ
 モ埒明不申候間、右様ノ株ニハ時々受持ノ所役人・浦
 役人ノ間招呼、屹ト相片付候様為仕可申候間、此段被
 聞召置可被下候、以上、

文化六年辰四月十八日

御船奉行

六〇 物奉行所所管ノ諸人借付金等ヲ表方ニ交

更ノ件 文化六年四月

一 物奉行所受持ニテ、諸人御借付銀年々ノ他利銀夫々ノ
 御統料又ハ御修補等ノ御手当外御銀計ハ、以來表方ヘ
 被差出候様被仰付候、左様テ年分夫々御宛行総立候以
 後若余時御入料致到来候節ハ、差当ノ儀故御物方御取
 替ニテ相弁置翌年差引可有之候、右通相成候ニ付テハ、
 是迄致拜借居候向年々利銀無滞致上納候ヘハ、当分ノ
 通召置且依訳名面替等申出候儀モ是迄ノ通ニ候、

一 右通御余計銀表方ヘ被差出候筋相成候テハ、是迄拜借
 返上方ニ付持高所務差引願申出候向モ段々有之由ニ付
 帖佐与御代官ヨリ年々所務代銀入付候株ノ混雜無之様
 仕向ノ儀ハ猶又致吟味、右所務代並利銀ノ儀モ壹円ニ
 イタシ取扱候儀トモ、猶又無間違様可致候、此旨物奉
 行ヘ申渡可承向ヘモ可申渡候、

四月

信 濃

六一 御家督ニツキ内輪省略ノ件

太守様御隠居 若殿様御家督ノ御願書当六月中被差出

御内定ノ段申来候間、御手当相掛候儀ハ勿論、御省略
中ニ付 公辺御勤向ノ外御内輪ノ儀ハ可成丈省略被仰
付候旨ヲモ申来候間、右之趣ヲ以取調申出候様、内々
御役人限可申聞置候、

四月

登

〔表紙〕

齊興公史料

市來四郎編
自文化元年
至同文化七年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙数七五枚）」の記載あり〕

目録

- 齊興公元服叙位任官ノ件
- 齊興公実名同唱遠慮ノ件
- 齊興公月次登城ノ件
- 齊興公元服ニツキ進上物ノ件
- 齊興公元服官位口宣拝戴ノ件
- 齊興公御袖留濟ニツキ祝儀ノ件
- 齊興公御家督ニツキ御袖判二通

同家老論達

齊興公御家督允許ノ件

齊宣公隱居ニツキ改名ノ件

御隱居方公辺務向等送物ノ件

御隱居方所務代金表方へ提出ノ件

御隱居方所務代金提出ノ件

重豪公御高二関スル件

高奉行土師孫兵衛上書 儉約ニ関スル吟味ノ件 附勝手方申渡

貴久・義久 義弘・家久 四公御法事ノ件

齊興公少將任官ノ件

虎千代君紀州家躰養子ノ件

齊興公將軍ノ簾中へ献金ノ件

齊興公任官ニツキ進上物省略ノ件

安姫君改名ニツキ同唱遠慮ノ件

齊興公任官御礼ノ件

規式上リ廃止ノ件

中急飛脚ノ件

芳蓮院・覺了院・深達院ノ御忌日ニ関スル件

寛二郎君帰国願許可ノ件

齊宣公諸社御参詣御代参ノ件

齊宣公御歴代靈屋代拜ノ件

齊興公任官口宣拝戴ノ件

重豪公論達結党蔽科ノ件

齊興公任官ノ件

重豪公論達ノ趣意達書

齊興公帰国ニツキ重豪公論達

齊興公帰国ニツキ論達

容貌言語等ニ関スル論達

寛二郎君花岡家養子ニツキ諸文書書例ノ件

寛二郎君花岡家養子ニツキ引越ノ件

寛二郎君花岡家養子ニツキ祝儀ノ件

風俗言語等ニ関スル親論書

若年者ノ言語風俗等ニ関スル親論書

諸川御普請御用金ノ件

〔齊興公任官口宣宣旨等到着ノ件〕

齊興公任官口宣等到来ニツキ手当ニ関スル件

島津安藝名代出府ノ件

齊宣公御隠居方支出金ノ件

太守公御発駕定日ノ件

〔太守公御発駕定日変更ノ件〕

川邊・出水〔屬〕へ応場取立ノ件

重陽規式廃止ノ件

御隠居家督改誓詞ノ件

佐竹右京大夫母堂卒去ニツキ忌服ノ件

御初入部ニツキ御供行列等ノ件

東海道人馬賃銭割増ニ関スル幕令ノ件

壽姫君誕生ノ件

壽姫君同唱遠慮ノ件

御供代出府ノ件

六二 齊興公元服叙位任官ノ件 文化元年十月

一若殿様御元服被仰付候間今月四日御登

城可被遊、太守様ニモ御礼可被仰上旨御奉書御到来、

御登 城、太守様大廊下御休息所へ御通、若殿様

ニハ大広間四ノ間へ被御扣、無程 公方様御黒書院へ
出御、於 御前御一字御拜領、從四位下侍從被 仰出、

御盃御看御頂戴、御道具御拜領御懇ノ被為蒙 上意、

御名豊後守様御実名齊興公ト御改被成 太守様ニモ御

礼被 仰上、諸事御先格ノ通り被為濟 西丸へモ御上

リ 御両殿様共御礼無御滞被為濟候段、御到来候条、

此旨向々へ可申渡候、

十月

〔須達久希〕
信濃
〔赤松則決〕

六三 齊興公実名同唱遠慮ノ件 文化元年十月

一若殿様御実名齊興公ト奉称候間、興ノ字ハ勿論、唱同
様ノ実名相用候者ハ可致遠慮候、

十月

市正

六四 齊興公月次登城ノ件 文化元年十月

一若殿様御事、五節旬月次御登 城御伺ノ通被仰渡、先
月十五日月次初ニ御登 城万端無御滞被為濟候段御到

来候条、此旨向々へ可申渡候、

十月

市正

六五 齊興公元服ニツキ進上物ノ件 文化元年十一月

一此節 若殿様御元服被為濟候付、御女中方并島津左衛
門其外、同格同妻、大目附以上大番頭以下、奥向御役

人、無役大身分、寄合並以上嫡子無役ニテ、月次御礼

罷出候面々ヨリ惣代一人、諸士ヨリ惣代一人被差越先

例候ヘトモ、当時ノ儀故不及其儀、於江戸御取替調ヲ

以進上物相濟候段申来候、此旨向々へ可申渡候、

十一月

市正

六六 齊興公元服官位口宣拜戴ノ件 文化二年正月

一若殿様御元服御官位付口 宣宣首御頂戴ノ御使、京都

へ被差越 御献上物御先格之通被為濟、口 宣宣首相

渡、旧臘九日被遊御頂戴候段申来候条、此旨向々へ可

申渡候、

正月

市正

文化六年六月十五日

六七 齊興公御袖留濟ニツキ祝儀ノ件 文化三年九

月

一若殿様先月廿八日御袖留被為濟候段御到来候、依之御

一門方并諸大身分月次御礼罷出候面々御祝儀可被申上

候、

九月

〔島津久泰〕
將監

六八 齊興公御家督ニツキ御袖判二通 文化六年六

月十七日

今度 齊宣公依御願御隠居、我等へ家督無相違被 仰

出候、領国ノ輩専重公義ノ御政道万端可相慎之国家ノ

仕置先規ノ通申付候条、不致忘却堅固ニ可相守之者也、

文化六年六月十七日

家老中へ

今度我等隠居豊後守家督付テハ、猶又万事相励精勤可

申候、

右之趣國中末々マテモ可申付候、

六九 同上家老諭達 文化六年七月

今度御願之通 御隠居御家督被 仰出候付、御袖判

仰出並

御隠居様 仰出之趣御領國中ノ輩謹テ奉承知、第一重

公義ノ御政道

御家ノ御作法御先規之通被 仰付事候条、可奉得其意、

御代替ノ時節ニ候へハ、他所ノ見聞モ可有之候間、万

端風俗ヲ不亂相慎可令精勉者也、

七月

〔島津久泰〕
將監

〔頭姓久菴〕
信濃

〔島津久兼〕
登

七〇 齊興公御家督允許ノ件

太守様御隠居 若殿様御家督ノ御願書、先月十三日御

用番松平伊豆守様へ被差出置候処、同十六日御老中様

御連名ノ御奉書御到来、翌十七日

太守様御名代有馬肥前守様 若殿様御登城、於御白書院御縁類御老中様御列席ノ上、御用番右御同人様ヨリ太守様御隠居 若殿様御家督御願ノ通被 仰出候段御到来候、此段奉承知 御三殿様へ御祝儀可申上候、

七月

將 監

七一 齊宣公隠居ニツキ改名ノ件

此節 御隠居 御家督御願之通被 仰出候付、 御隠居様御儀 修理太夫様ト御改名被遊度段、從 太守様御伺書御用番様へ被差出置候処、御伺之通被仰渡候段御到来候、

七月

將 監

七二 御隠居方公辺務向等送物ノ件 文化六年七月

一公辺御勉向並脇方表立候御送物等

高輪御同様、且又御藏物其外御返金物ノ儀ハヲノツカラ御返金可有之候、

一御元御納戸ノ儀ハ不被召立候、御買入物等ノ節ハ、

御家督様御方御納戸奉行へ申越調達ノ上於江戸御返金可有之候、 右之通 御隠居様御方被相究候段申来候条、此旨可承向へ可申渡候、

七月

登

七三 御隠居方所務代金表方へ提出ノ件 文化六年

七月

一当時御省略中ニ付 御隠居様御方御高二万石所務代金ノ内二千兩ツ、 思召ヲ以御年限中表方へ被差出候、 一 大御前様御方ノ儀モ 御隠居様御方ヨリ御引ニテ右同断、御年限中

思召ヲ以御渡方二千五百兩ツ、都テ表方へ被差出候、

右之通 御隠居様被 仰出

太守様ヨリモ 思召ニ被応候段申来候、此旨向々へ可申渡候、

七月

將 監

勝手方申渡 文化六年七月廿六日

七四 御隠居方所務代金提出ノ件 文化七年七月

一金八千六百六十八兩

右ハ 御隠居様御方御高二万石ノ所務ニ応シ候金高、

高輪御同様可差上旨先達テ被 仰出置候ヘトモ、右御

高御支分ニ不及本行ノ通 大御隠居様御方同様ノ仕向

ヲ以年々差上候様被 仰出候段申来候条、可承向々へ
可申渡候、

七月

將 監

七五 重豪公御高二関スル件 文化六年七月

一 御隠居様御方 御高二万石

右御高ノ所務ニ応シ候金高、高輪御同様可被差出旨被

仰出候段申来候条、可承向々へ申渡、御勝手方へモ可
相達候、

七月

登

七六 高奉行土師孫兵衛上書 儉約ニ関スル吟味ノ件附

一持高応米持合候者ハ当座へ相知居候付、限月被相立御
借入御仕登ノ後吟味仕候処、高頭ハ帳面ニ相知居候へ
トモ、所帯柄ノ善悪（マ）ハ 高ノ高下ニモ不相拘相応ノ
高致所持者モ、内々ハ他借利分ノ方杯ニ差向候趣ノ訴
訟書等何ソニ付追々相見得、タトへハ過米ハ右高ニ及
ヒ候テモ右体ノ筋合ニモ有之候へハ、抑モ難取計、尤過
米ノ多少ハ高拘所ノ依遠近蔵人直取納ノ致支繰候故、
貧当ノ差別モ容易ニ難相知、且又直取納多相受取候向
モ可有之候ヘトモ、給地米ハ大形二斗入ノ事候へハ、
御仕登相成候儀モ如何可有御座哉、イツレ内々ノ儀迄
ハ番座ヨリ難得届御座候、且春秋両度御蔵米・給地米
直成被相究、高料ニ売捌候者ハ科料被仰付筋ノ儀候ニ
付テハ、第一番家へ相掛儀ニテ米直段ノ依振合、利潤
不相見得節ハ売買差扣候儀モ可有之哉、少高ノ諸士其
高所務迄ヲ見当ニテ家内介抱後先キト繰合候者モ可有
之候間、右体ノ者ハ少々ノ儀迎モ差クリニモ相掛可申
事ニ御座候、当時諸士一統困窮ノ利柄ニテ、年々ノ出

米総サへ大家小家共総日限前以追々稠敷及催促乍漸相
 濟候仕合ニテ、御借入又ハ直定等ノ儀何様可有御座哉、
 当座ヨリ取究難申上御座候

一琉球御注文反物被相減、代米卸カへ御統米御仕登ニ被
 相向候御吟味相シラへ申候処、御用反モノ類代米千石
 程、諸人申受三百石程ニ相及、右ノ分ハ御仕登被差向
 候ハ、御クリ合ハ可相成候へトモ、御前御用反物ヲ
 初御付届其外年々無抛向々御注文ト相見得、勿論売上
 ノ直成モ下料ニ相付、諸人申受ノ儀モ夫々割増相掛事
 候故、去夏モ二十貫目程ハ御益ニ相成、且先達テ直重
 ヲモ申上置候付テハ、猶又相増可申、左候ハ御用反物
 類モ御費ニハ不相成賦ニ御座候、右反物ノ儀ハ専先嶋
 ヨリ織出被^{〔マ〕}、地米無他事場所ノ由御座候付、右ヲ以年
 貢同様相心得候向々有御座間敷哉、是迄年々仕来ノ事
 候処、及石高候程ノ御用布被相減、米ヲ以相調候様被仰
 渡候ハ、琉球ノクリ合如何可有御座哉、去夏モ冠船
 ニ付二千石程モ代銀上納願出、当年ヨリハ重出米ヲモ
 半方大坂上納被仰付、兎角小地ノ事故現米クリ登ハ余

計ニ難相調向ニモ相見得候間、前件申上候通御用布類
 ノ儀ハ御不益ニモ相見得不申、旁是迄ノ通被召置度、
 尤御用反物ノ儀ハ御注文ヲ以被仰渡事候付、当座ヨリ
 難取究御座候へ共、其内被差欠候テモ可宜品々ハ御吟
 味次第奉存候、

一田舎旅御扶持米真・赤米半分ツ、被成下儀ニ付吟味仕
 候処、先年真・赤半分ニテ赤米ノ儀ハ一部半重被成下
 候処、去春又々右之通真米迄被成下段被仰渡、当分其
 通ニ御座候へ共、御当地勉ノ面々役料米ハ真・赤米ヲ
 以被成下儀ニテ、御國中ノ事故差テ差別モ有之間敷、諸
 士一統困窮ノ儀ナカラ分テ御難渋ノ折柄ニ御座候間、
 御年限中都テ真・赤半分ツ、被成下方ニモ可有御座哉、
 右之御払三ヶ年並三千九百石程ニテ、赤米千九百五十
 石ニ相及、モヘ方ノ儀ハ、夫長ケノ赤米差支ハ無御座
 候へトモ、御物年々赤米及不足、モヘ方ヨリモ情々致^{〔精カ〕}
 入付事ニ御座候、然トモ夏ニ相成候テハ、人足賃飯米
 迄モ真米ニ被成下儀ニ付、何レ不足合方ニ相見へ、右
 ノ御払重候へハ、猶又クリ合津下等モ可被仰付儀ニ御

座候間、代官へモ吟味被仰渡度、尤御当地御藏々赤米
払切ノ上ハ、直成替ヲ以真米被成下相当可仕候、末略、
一琉球へ賀政通宝ト申通錢有之由ニテ、往々錢 被仰付
儀ニ付、当時ニテハ出米諸反物類又ハ返上物方首尾合
致扱事ニテ、右体ノ儀ハ取シラへ難相届御座候間、御
勝手方ヨリ御吟味有御座儀ト奉存候、 末略、外ヶ条
略ス、

已正月二十八日高奉行土師孫右衛門外ニ諸向吟味略ス
此節吟味ノ通真・赤米半分ツ、被成下、尤赤米及払底
ノ節ハ真成替ヲ以真米相渡、其外モ吟味ノ通被仰付候
条、如例可被仰渡旨御差図ニテ候、以上、西恰之助

已七月二十六日

御勝手方 右表書之通如例可申渡候也、

已七月二十八日

御勝手方印

七七 貴久、義久四公御法事ノ件 文化七年正月

〔貴久〕 義弘、家久
〔義久〕 義弘、家久
〔家久〕 松齡様 慈眼院様

右御四靈様御年回御法事ノ儀、御物又ハ寺役御法事御

執行日数御不同ニ有之候得共、以来右

御四靈様御年回被為当候節、日数三日寺役御法事被仰
付、御香奠銀五枚、御家老

御代参ヲ以御寺納被遊管候、尤右

御四靈様外ニモ此已後格別ノ御功又ハ御徳被為在候
御方様ハ

御六代以上ニ御世代被為遷候節、寺役御法事ノ内ニテ
右

御四靈様御同様御執行有之管候、且

五廟様御法事ノ儀ハ是迄ノ通御物御執行被仰付候、

右ノ通被仰付候条、此旨寺社奉行へ申渡、可承向々へ
モ可申渡候、

正月

信濃

七八 齊興公少將任官ノ件 文化七年正月十三日

一 太守様御儀旧臘十六日

御城へ被為

召、少將御任官被仰出候旨御到来候条、此旨向々へ可

申候、

正月

〔島津久備〕
安房

信濃

七九 虎千代君紀州家智養子ノ件 文化七年正月

一 虎千代様御事

紀州様御智養子被仰出候旨、旧臘十一日御用番青山下野守様ヨリ被仰渡候段申来候条、此旨向々へ可申渡候、

正月

安房

八〇 齊興公ヨリ將軍ノ簾中へ献金ノ件 文化七年

正月

一 御簾中様へ 白銀十枚

太守様ヨリ

右ノ通向後 御参勤ノ節御献上被遊候様、御留守居御呼出ニテ御掛御老中松平伊豆守様ヨリ被仰渡候段申来候条、此旨向々へ可申候、
〔渡脱カ〕

正月

安房

八一 齊興公任官ニ付進上物省略ノ件 文化七年正

月

一 今度

少將御任官被 仰出候付テハ、御一門方ヲ初諸士迄使者並惣代被差越、進上物等有之事候へ共、当時格別御省略中付、此節ハ都テ其儀ニ不及筋被仰付候段申来候条、此旨向々へ可申渡候、

正月

安房

八二 安姫君改名ニツキ同唱遠慮ノ件 文化七年正

月

一 安姫様御事

岸姫君様ト御名御改被成候旨従

公義被仰渡候段申来候、依之右唱ノ名附居候者ハ可致遠慮候、此旨可承向々へ可申渡候、

正月

安房

八三 齊興公任官御礼ノ件 文化七年正月廿六日

一旧臘廿八日

太守様御任官ノ御礼被仰上候段御到来候条、此旨向々
へ可申渡候、

正月

安房

八四 規式上り廃止ノ件 文化七年正月

一御在府ノ節於御書院重陽ニ付御規式上り候儀、以来モ
御省略御年限中ニ付御引取被仰付候条、可承向々へ可
申渡候、

正月

信濃

八五 中急飛脚ノ件 文化七年二月

一諸向交代書役・小役人等ノ内、江戸表御用差支ノ趣ヲ以
中急等ノ儀向々頭人ヨリ申出事候へトモ、格外ノ御時
節柄故、以来不時ノ儀ニ付急ノ不差越候テ不叶節へ、於
江戸頭人ヨリ得差図吟味次第爰元へ問合申来答候間、
向後其通無之者ハ容易ニ被仰付間敷候条、交代ノ時節

不及延引様前ヨリ頭人氣ヲ附出立可申出旨、去ル西
年申渡ニ相成居候処、到頃日間ニハ取扱不行届向モ有
之、當時猶又格別御取縮ノ砌ニ候間、以来右申渡通於
江戸不申出者ハ、容易ニ中急等被仰付間敷候条、此旨
可承向々へ可申渡候、

但式日飛脚ノ場人柄見合ヲ以中急差立候儀へ、当分
通時々吟味次第ノ事候、

二月

安房

八六 芳蓮院・覺了院・深達院ノ御忌日ニ関スル

件 文化七年二月

一齊皇夫人芳蓮院様御正忌日御仕置ハ相除其外無御構、月次御忌
日ハ都テ無御構旨被究置候へ共、今度

御家督ニ付毎月御忌日御精進日被相立候付テハ、以来
御忌日御咎目ハ其外申渡事等外

御靈々様右御同様御精進日被立置候通被仰付候、

十二月廿二日

一覺了院様

七月十二日
一 深達院様

右御正忌日

御隠居様御部屋柄内御朝夕御精進被定置、御家督ノ節
ヨリ表向御精進被立置候処、此節

御隠居 御家督ニ付テハ

太守様御事ハ御統モ被為替候付、表向御精進日不被相
立

御隠居様御事ハ御部屋柄内ノ通被定置候条、此旨向々
へ可申渡候、

二月

安房

八七 寛二郎君帰国願許可ノ件 文化七年二月

一 寛二郎様御事御上氣御強御座候付、為御養生御国元へ
御越一往御逗留ニテ御入湯被遊度、御用番様へ御伺書
被差出候処、御伺之通被仰渡候旨申来候条、此旨向々
へ可申渡候、

二月

安房

八八 齊宣公諸社御参詣御代参ノ件 文化七年三月
一 五社へ

御着城脇並正月朔日 御参詣

御留守年正月朔日 御名代 御一門方

一 稻荷 八幡 天神 同

福ヶ迫 不動 諏訪

靈府堂 表御看経所へ

御着城並正月十五日ヨリ内一度 御参詣

御留守中正月十五日ヨリ内一度 御代参 若年寄

正月朔日御在府 御在国共 御代参 御側御用人

一 花尾山 郡山一之宮

連方故 兩御在国ニ一度 御参詣

御参詣無之御在国年一度 御名代御一門方

御祭礼 年始 御年忌ノ節 御代参御家老

右之通 太守様 御参詣御代参等被仰付候条、可承

向々へ可申渡候、

午
三月 相馬

江戸表

一芝神明宮

一御庭之諸堂社

年頭一度 御参詣

御国許

一稻ヶ諏訪社

一御庭之諸堂社

年頭一度 御参詣

是迄年頭其外式々 御代参有之来候、

一諸神社

年頭一度 御代参 御側御用人

但御祭日計

御代参有之分ハ其通可有之候、尤稻ヶ迫諏訪・芝神

明宮へハ御祭日

御誕生日等ノ

御代参ハ有来通

右之通

御隠居様御参詣 御代参被

仰付候条、可承向々へ可申渡候、

三月

相馬

八九 齊宣公御歴代霊屋代拜ノ件 文化七年三月

一得佛様

淨國院様

有邦院様

淨岸院様

慈徳院様

圓徳院様

慈照院様

正覺院様

右ハ

御隠居様御事 御下向被為在候へトモ、以来右

御霊々様へ御発駕前 御着城

御参府脇御家者

御代参、右ノ節

御物霊様へモ御代拜被仰付管候条、可承向々へ可申渡

候、

三月

相馬

九〇 齊興公任官口宣拝戴ノ件 文化七年三月廿六日

一太守様少將

御任官付口 宣

宣旨御頂戴ノ御使京都へ被差越、御官物御納無御滞、
口 宣 宣旨相渡先月十九日被遊御頂戴候段申来候
条、此旨向々へ可申渡候、

三月

信濃

九一 重豪公論達結党殿科ノ件 文化七年

○本文書は、第一二六号文書と同文により略す。

九二 齊興公任官ノ件 文化七年

○本文書は、第九〇号文書と同文により略す。

九三 重豪公論達ノ趣意達書 文化七年

○本文書は第一二七号文書と同文により略す。

九四 齊興公帰国ニツキ重豪公論達 文化七年

○本文書は第一二八号文書と同文により略す。

九五 齊興公帰国ニツキ論達 文化七年

○本文書は、第一二九号文書と同文により略す。

九六 容貌言語等ニ関スル論達 文化七年

御領國中御取締向并容貌言語等ノ儀

大御隠居様去々々御下向ノ砌、御ケ条書ヲ以御細密被
仰出置候処、従古来ノ風俗ニテ兎角旧俗ニ立帰候儀ノ
ミ有之候間、往々右通相守候様委曲別紙之通此節於江
戸島山數馬へ被 仰出候、畢竟間ニハ守リ薄キ向モ有
之候所ヨリ、又候被為及 御沙汰甚以奉恐入儀候条、
以来万端御趣意致堅ク相守往々右通候儀可心掛候、去
々々御細密被仰出候付テハ、一統承知ノ上後代子孫ニ
至忘却仕間敷旨御請書差上、血判迄モ被仰付置候付、
何レモ立直候様無之テハ不叶事候間、此節 仰出ノ御
趣意ヲ以テ猶又人々厚可奉汲請候、就中年若ノ面々へ
ハ父兄等ヨリ朝暮無間断可致教戒候、乍此上若守ノ
族モ候ハ、屹ト御取扱被 仰付、父兄等迄モ相当ノ御
咎目可被仰付候、此旨行届候様支配下下役等へモ時々

可被申含候、

四月

〔町田久規〕
監物

安房
〔新納久愈〕
内藏

九七 寛二郎君花岡家養子ニツキ諸文書書例ノ件

文化七年四月

一 寛二郎様御事、此節島津若狹殿養子被仰出候付テハ、
此以來御同列方諸書付其外何篇殿文字ノ管候、此旨諸
向為心得可申聞置候、

四月

安房

九八 寛二郎君花岡家養子ニツキ引越ノ件 文化七

年四月

一 寛二郎様御儀島津若狹殿養子被

仰出候付、明後廿九日九時御引越ノ管候、其節北御門
外ニテ御乘輿行列供廻等若狹殿方ヨリ可差越候、此旨
内用頼・御用人へ申渡、可承向へモ可申渡候、

四月

安房

九九 寛二郎君花岡家養子ニツキ祝儀ノ件 文化七

年四月廿七日

一 寛二郎様御事今日島津若狹殿養子被仰出候付、御三殿
様へ御祝儀可申上候、

四月

安房

一〇〇 風俗言語等ニ関スル親諭書 文化七年

領國中風俗言語容貌其外政事向万端且所帶方差迫り候
付、勝手方仕向等ノ儀先日直ニ微細申聞、猶書付ヲ以
申聞通ニ候、自ラ於国元家老・若年寄・大目附其外役
々々末々迄モ申聞御趣意可申渡事ニハ候へトモ、先度モ
申聞候通、去ル酉十月国元へ差越候上万端ノ儀委曲申
聞、殊ニ勝手方仕向替ノ儀ハ、猶又微細申聞ノ節ハ得
ト合点為致趣ニテ受書等迄モ差出、猶保書ヲ以申渡、
日用右ヲ本ニ致シ何篇可遂精勤吞込ノ事ナカラ、趣意
致齟齬此節時節柄誠ニ費ヲ不厭役々招呼候次第、又此

節申聞趣意モ此涯ハ得心為致様有之候得共、程過候へハ緩セ相成候儀難計、甚以心痛至極ニ候、夫故又々召呼再重申聞事候間、此上ハ国元役々屹ト相改メ、意味少モ無相違後代混ト相居リ候様可心掛候、趣法掛・側用人・勝手方用人・大坂御留守居其外勝手方支配役場一役一人定繰廻日勤申付、用向取扱申付候テハ、其一人ニ不限候故、用向不連続ノ意味等ニ心掛候向モ可有之カ、右様心得候テハ又趣意違ニ候、用向取扱ハ不依一人其役場ノ事候間、其役場へ召仕候役々ハ一身同体ニ候故、役場ヲ以連続イタシ候様可有之事ニ候、其一人ヲ以取扱候へハ、ヤハリ是迄ノ吟味役へ類シ往々心得違候、能々右ノ意味深ク味ヒ可申事ニ候、当時ハ勝手方へ出席ノ役々其一人ニ掛申付有之候付テハ、間ニハ諸人訴訟事等ニテ諸参会等有之哉モ難計、若哉右様ノ儀モ於有之ハ、吟味役ノ旧俗ニ立帰筋ニ候間、終ニハ最負ノ取扱モ有之ニ成立不可然事ニ候、何分諸向質素ニ実儀ヲ專ニシ、少モ無私不致精勤候テ不叶事候間、家老・若年寄・大目附能々趣意得心イタシ無忘却汲受

後代相居候様明暮尽心力、役々末々迄モ相流候様一涯可心掛候、此節モ趣意心得違又等閑ノ取計等有之候テハ決テ不相成候条、又々此等ノ旨申聞事ニ候、

五月

一〇一 若年者ノ言語風俗等ニ関スル親論書 文化

七年

与中年若者言語容貌風俗等ノ儀、大番頭・御小姓番頭專致教示、時々丁寧ニ申聞取締向行届候様可致事候処、間ニハ不頓着ニ打過キ候者モ有之、折角御趣意相守致取扱候者ニ相任セ、他ノ事様存候者モ有之哉ニ相聞候、不可然事候、右体ノ者ハ御家老・大目附氣ヲ付時々不差置申出候様被仰付候、其上ニテ屹ト思召モ可被為在候、何分支配頭人ヨリ等閑ニ打過候へハ、自然ト末々ニ至リ汲受薄相成事候間、能々心掛右ケ条ヲ本ニイタシ日用取締行届候様可致精勤候、

一〇二 諸川御普請御用金ノ件 文化七年

御内用金七万七千六百六十四兩二步、永百七十二文

右ハ此度濃州・勢州・尾州東海道筋川々御普請御用被

為蒙 仰候段ハ別紙ヲ以申渡通候、然ハ御普請御仕立

相濟御入用御出金御高割ヲ以右之被仰付候、左候テ御

上納方ノ儀ハ御支度次第御伺有之候様、先月四〔一、二、三〕被仰

渡候段申来候、

六月

監物

安房

〔鎌田政興〕
典膳

一〇三 齊興公任官口宣宣旨等到着ノ件 文化七年

六月二日

一此節被遊 御頂戴候口 宣

宣旨女房奉書書宰領被仰付、一昨晦日出水到着ノ段申越

候付、明後四日昼時御当地へ被着直ニ御本門罷通、荷

物ノ儀ハ虎ノ間鷹木ヨリ詰居ノ中小姓へ可引渡候、

御座へ可差通候、御手当ノ儀ハ別段申渡候、

六月

安房

一〇四 口宣宣旨等到着ニツキ手当ノ件 文化七年

六月三日

一 太守様少將御任官付口 宣

宣旨女房奉書明四日昼時御到来ノ筈候、依之御手当左

之通、

御本丸へ御到来ノ節

御本丸相開虎ノ間雁木ヨリ詰居ノ中小姓受取虎之間へ

相備、御用人御目付相詰、御記録奉行致取引荷作等解

調、内箱御記録奉行水仙ノ間へ可相備候、左候テ内箱

切封御家老座書役致開封、御家老中拝見相濟候上、御

記録奉行罷出本之通入付持下、

但着服麻袴

六月

安房

一〇五 齊興公任官口宣等到来ニツキ手当ニ関ス

ル件 文化七年

○本文書は、第一〇三号・第一〇四号文書と同文により略す。

一〇六 島津安藝名代出府ノ件 文化七年六月
一 島津安藝殿

右御名代島津玄蕃殿ニテ来年就

御初入部為御迎出府有之候様被仰付候条、此旨向々へ
可申渡候、

六月 安房

一〇七 齊宣公御隠居方支出金ノ件 文化七年七月

○本文書は、第七四号文書と同文により略す。

一〇八 太守公御発駕定日ノ件 文化七年七月

一二月

十五日 十九日 廿一日

右御国許御発駕御定日

四月

廿一日 廿二日 廿五日

右江戸御発駕御定日

右 御参勤御下国付、毎年御国元・江戸御発駕御日限、

以来右ノ通御定日ニ被仰付置候間、以上三日定ノ御拭^{〔式〕}
日^カ前年御通行ノ節宿々へ相違無相違様引結方致首尾旨
被 仰出候段申来候条、此旨向々へ可申渡候、

七月 將監

一〇九 太守公御発駕定日変更ノ件 文化七年九月

二月

六日 九日 十五日

右御国許 御発駕御定日先達テ申渡置候処、御差支ノ
儀有之、右之通被相替候段申来候、

但御掛目等ノ儀へ是迄申渡置通ニ候、

九月 右近

一一〇 川邊・出水^{〔邊〕}へ応場取立ノ件 文化七年八月

一川邊 出水

右此節ヨリ御鷹場被相建候条、向々へ可申渡候、
但出水ノ儀ハ先年ノ通方限ヲ以被相建候、

八月 安房

一一一 重陽規式廢止ノ件 文化七年九月

一重陽御規式ノ儀御省略御年限中且御留守年ニモ候故、

御引取被仰付候旨、去年九月申渡置候、以来共御在府

年ノ上リ物御引取被仰付候条、可承向々へ可申渡候、

九月

安房

一一二 御隱居家督改誓詞ノ件 文化七年十月

一今度就

御隱居家督改誓詞被仰付候段ハ先達申渡置候、依之

御先代勤方被仰付未誓詞不相濟面々ハ

御先代ノ誓詞前書迄読聞セ、改誓詞ノ儀ハ血判迄モ被

仰付管候条、其通取扱可致旨向々へ可致通達候、

十月

安房

一一三 佐竹右京大夫母堂卒去ニツキ忌服ノ件

文化七年十一月

一佐竹右京大夫様御母堂貞明院様御卒去付

太守様御母方御祖母ノ御統ニテ、御忌二十日、御服九
十日被遊御請候段申来候条、此旨向々へ可申渡候、

十一月

將監

一一四 御初入部ニツキ御供行列等ノ件 文化七年

十一月

一来年就

御初入部惣御供ノ節ハ、物頭御先乗仕候様御行列帳ニ

テ申渡置候得共、

御発駕御着城ノ節計 御先乗有之、其外ハ惣御供ノ節

迎モ 御先ニ不及旨被仰付候、

一具足箱粹屋形ノ儀御行列乗外ハ直触以上ノ御役限為持

可申、其外ハ粹屋形可致無用旨、去ル午年申渡有之候

ヘトモ、以来ハ直触以下御行列乗迎モ無粹ニテ具足箱

為持候様被仰付候、

右之通江戸ヨリ申来候条、此旨可承向々へ可申渡候、

十一月

安房

一一五 東海道人馬賃錢割増ニ関スル幕令ノ件

文化七年十一月

一此度東海道大磯・袋井兩宿困窮ニ付、人馬賃錢割増左之通可請取旨申渡、

已正月ヨリ寅十二月迄十ヶ年ノ内人馬賃錢

東海道

二割増申付置候処、猶又当 大磯 宿

午十月ヨリ未^{〔未カ〕}亥九月迄中 袋井 宿

五ヶ年ノ間三割増

右二ヶ宿割増錢申渡候間、可被得其意候、

右之趣向々へ可被相觸候、

午十月

別紙ノ通從 公義被仰渡候条、此旨与中支配中諸郷^{〔カ〕}ハ不洩様可被申渡者也、

十一月

御家老座

一一六 壽姬君誕生ノ件 文化七年十一月

一去年於高輪大奥御誕生ノ御女子様御名

^{〔御家老〕}壽姬様ト奉称候、最早御丈夫ニ被為成候付、此節御弘有之候条、向々へ可申渡候、

十一月

將監

一一七 壽姬君同唱遠慮ノ件 文化七年十一月廿七日

一去年十一月廿一日於高輪大奥御誕生之

御女子様御名 壽姬様ト奉称、御順ノ儀ハ富姫様御次候条、此旨奉承知、壽之字并同唱迄モ名附居候人ハ可致遠慮候、

十一月

將監

一一八 御供代出府ノ件 文化七年十一月

一来未年

御留守詰被仰付候面々、御供代ノ分ハ御発駕前致出府候様向々へ可申渡候、

十一月

^{〔川上久考〕}右近

〔表紙〕

齊興公史料

市來四郎編

自文化
至同 八年
九年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料（紙数八十三枚）」の記載あり〕

目録

- 島津登死去ニツキ重豪公忌服ノ件
- 寛二郎君養子届出ノ件
- 富姫君夭亡ノ件
- 大目附以上登城ニ関スル件
- 〔異国船打払に關する記事〕
- 御内證妹君死去ノ件
- 島津安藝御供ノ件
- 集会結党ニ関シ重豪公論達ノ件
- 〔重豪公論達ノ趣意達書〕
- 齊興公帰国ニツキ重豪公論達ノ件
- 〔齊興公帰国ニツキ論達〕
- 寛二郎君進上物ノ件
- 麗俗院忌日精進ノ件
- 齊興公將軍家ヨリ拝領物ノ件
- 御内證死去ノ件
- 御内證死去ニツキ太守公忌服ノ件
- 御内證法名ノ件
- 齊宣公へ八朔進上ノ件
- 重豪公湯治願許可ノ件
- 江戸上下面々人馬届出ノ件
- 重豪公江戸発駕ノ件
- 齊興公御帰国ニツキ御着拝領ノ件
- 重豪公政務御介助ノ始末
- 〔重豪公政務御介助ノ始末〕
- 〔齊興公帰国ニツキ御着拝領ノ件〕

〔將軍家齊一橋穆翁ヲ大御所ト称セントス〕

〔賢章院侍臣某ノ追悼文・和歌〕

省之進君元服ニツキ進上物ノ件

省之進君元服ニツキ進上物ノ件

加治木長年寺へ参詣ノ件

稻荷御参詣ノ件

春光院忌日變更ノ件

諏訪神事ニ関スル件

酒匂次郎左衛門社役勤ノ件

川上臨觴死去ニツキ重豪公忌服ノ件

重豪公帰府ノ件

島津若狹年中進上物ノ件

雅姫君法名ノ件

雅姫君重豪公七女
島津淡路守忠持夫人死去ニツキ忌服ノ件

武五郎君死去ノ件

武五郎君死去ニツキ忌服ノ件

武五郎君法名ノ件

阿久根町旅込ノ件

〔徳川十五代記抄〕

春光院忌日家老代参ノ件

朱紋〔挑カ〕焼灯使用心得ノ件

御用日變更ノ件

太守公増上寺火ノ番被命ノ件

遠慮文字ノ件

〔於八百ノ方名唱ノ件〕

〔松前様ヨリ此御方様へ被仰進候御知ラセノ写〕

道鑑公四百五十年回忌ノ件

公子方御台所御養ノ件

堀田豊前守御両敬被仰談ノ件

堀田備前守家族ノ件

靈舍院正忌日ノ件

日奈久町焼失ニツキ宿賦ノ件

重豪公九男桃次郎君黒田美濃守
長薄公誕生ノ件

桃次郎君命名同唱遠慮ノ件

於八百ノ方御門通行ノ件

帰国御暇願ノ件

〔青山五郎右衛門切米被下置ノ件〕

徒目付・横目等ノ勤向ニ関スル件

〔井伊兵部少輔・土井大炊頭申渡写〕

風俗其他ニツキ重豪公論達ノ件

一一九 島津登死去ニツキ重豪公忌服ノ件 文化八

年正月

一 島津登一昨夜病死ニ付、

大御隠居様御忌五日、御服十五日御掛被遊候、

一 右同断ニ付島津淡路守殿御事モ御忌掛ニ候、

正月

〔島津久備
安房〕

一二〇 寛二郎君養子届出ノ件 文化八年正月

一 寛二郎殿御事島津若狭殿養子被

仰出候段ハ、先達テ申渡置通候、依之去年十一月廿一

日御用番牧野備前守様へ御届書被差出候处、被成御落

手候旨申来候、

正月

〔川上久秀
右近〕

一二一 富姫君夭亡ノ件 文化八年正月

一 富姫様御事御病氣被成御座候处、御養生不被為叶先月

八日御夭亡被成候段御到来候、

一二二 全 富姫様御法名

全

一 麗岱院殿紅露雪顔大禪童女

正月

〔島津久泰
將監〕

一二三 大目付以上登城ニ関スル件 文化八年二月

一 大目付以上日勤乗物ニテ手鍵立サセ登

城有之来候へトモ、御儉約中ニ付、乗物台輪駕籠勝手

次第被仰付置、当時日勤台輪駕籠ニテ手鍵伏セサセ出

勤有之候へ共、乗物ノ場御儉約ニ付、右通ニテ殊ニ屹

ト出勤ノ事候間、手鍵立サセ致出勤外々へ屹ト相越候

節モ日勤全様可有之旨被

仰出候付、途中式対ノ儀ハ先年申渡有之節ノ通可被相

心得候、且シノヒ又ハ見廻先ノ向ニヨリ屹不立節ハ、

其節ノ時宜次第手鍵伏サセ候間、其折ハ式對ニ不及候
条、此旨向々へ不洩様可申渡候、

二月

安房

〔頭姓久喬〕
信濃

一二三 〔異国船打払に関する記事〕

〔文政乙〕

文化八年乙酉二月幕府統テ三タヒ令ヲ諸藩ニ下シテ曰

ク、夷船ヲ処スルノ方ハ文化ノ度ニ於テ更ニ布令セシ

カ前年英船長崎ニ於テ狼藉ヲ作シ、爾後亦相踵テ至リ

薪水食物ヲ乞モノ數回、甚シキニ至テハ、〔種カ〕槽ニ上陸シ、

我野牛等ヲ奪ヒ、横行殆ント極レリ、是レ等閑ニ附ス

ヘキモノニアラス、因テ今ヨリ後ハ独リ英船ノミナラ

ス蛮夷ノ船影ヲ見ハ、直ニ撃テ之ヲ卻ケ毫モ仮借スル

コトアル勿レ、蘭船ハ從來此限リニアラスト雖モ誤テ

之ヲ撃ツハ復タ尤ムル所ニアラス、是等ノ処置タル結

局覺ヲ他邦ニ開クノ基タリト雖トモ、我

皇國ヲ護スルニ切ニシテ他ニ違アラス、然ルヲ之ヲ奉

セス私ニ外夷ト相親ムカ如キアラハ、処スルニ嚴刑ヲ

以テセント〔編年雜錄・徳川十五代記・備
慨家列伝・続日本外史〕

一二四 御内證妹君死去ノ件 文化八年三月

一 御内證様御妹石野宰相様奥方様御事、先月十日被成御

卒去候付

御隠居付

御内證様御忌服被遊御請候段申来候、

三月

安房

一二五 島津安藝御供ノ件 文化八年三月

一 島津安藝殿

右ハ先月廿一日於御座々間御直ニ当年就御入部為御迎

出府有之候付、御下国御供被仰付候段申来候、

三月

安房

一二六 集会結党ニ関シ重豪公諭達ノ件 文化八年

三月

一 御領国ノ儀ハ不依大小身御譜代旧臣ノ事候へハ從

御先代様被定置候御制禁ノ趣致連続、聊モ無緩疎堅可相守ノ処、如何心得違候哉、此以前ニハ実学ト唱学ヲ結ヒ、其後モ右類ノ儀有之、又々近頃ニハ亡樺山主税〔久言〕、亡秩父太郎〔季休〕与党ヲ催シ、致夜会等類ヲ求 御政道ノ妨ニ相成御国中一統及混雜、既 公辺ヘモ内々ハ相聞候〔響之〕故、彼是 御賢慮ヲ以御取計被 仰付候付、不及意儀〔異之〕ニ候、就中毎朔ノ御条目ニモ、不依何色党ヲ結ヒ類ヲ引、或臆負致連判、其所ノ妨ニ相成候程ノ事ヲ相企候者ハ、可被行敵科旨被為裁御事候、剩余国ヘ相聞御外聞ニ可相掛トノ無弁モ、御譜代ノ御厚恩ヲモ忘候仕形、誠以不忠ノ至候条、右ノ者共ハ夫々相当ノ御取扱被仰付候、尤大小身共年若ノ面々学文武芸稽古付テハ、致集会互ニ文武忠孝ノ道ヲ相励、成長ニ随ヒ、御国家ノ御用相立候様ニトノ厚 思召ヲ以、先年造士館・演武館ヲモ御創立有之、猶又夜行・辻立風俗等ノ儀共、先年以来度々被為 仰出御事候処、布テハ右通夜会等致シ、党ヲ結ヒ候類ノ儀共相企、御仕置ノ妨ニ相成、別テ如何ノ至被

思召〔上カ〕迄、去ル巳年夜会等ノ儀共細々被 仰出置候、猶又向後右式党ヲ結ヒ候類ノ儀共相企候者ハ、明白糺方〔役取所番、家名可被召亮、其外身近親類共迄も評儀之上、脱カ〕ノ上大形ノ依輕重御咎目可被仰付候条、兼テ存其旨万一右様ノ取違有之者モ候ハ、夫々身近者共ヨリ氣ヲ付可加異見候、此旨屹ト可申渡旨 大御隠居様被 仰出候、

三月

一二七 〔重豪公諭達ノ趣意、達書 文化八年〕
御領国中ノ輩学文武芸ヲ可相嗜、且風俗等ノ儀付テモ、度々被仰渡事候条弥以致忘布間敷候、此節猶又 大隠居様 御配慮被為在、別紙ノ通分テ委敷被 仰出候、御趣意汲受、人々懸心頭屹ト可相守候、此旨申渡候様被仰出候、

四月

〔島津久泰〕
將 監
〔島津久備〕
安 房

一二八 齊興公帰国ニツキ重豪公諭達ノ件 文化八

年四月

一松平豊後守今般御暇被下、初テ被在邑候付テハ、未年若ノ儀ニモ有之候条、政事向是迄ノ通不崩様被入念、万端一己ノ存寄無之様有之度事ニ候、其許ヨリモ能々示談有之可然儀ト、何レモ申合候事ニ候、

今般御暇御給初テ 御下国ニ付、御老中様方被仰合、

御政事向ノ儀共、御別紙之通御用番土井大炊頭様ヨリ有馬左兵衛佐様ヲ以被 仰達、御三殿様被遊御承知、

從 御先代様御例モ無之、誠ニ御親敷御事共、別テ御

大幸ノ御儀被思召上候、依之未御年若ノ御事ニモ候ヘ

ハ、御家老・若年寄・大目付御政事向一涯入念、朝暮

掛心頭從前々被定置候御定事等、無緩疎可致沙汰候、

就中党ヲ〔乱脱カ〕結風俗御政道ノ妨ニモ相成候儀共、万一モ致

到来候テハ、对

公辺屹ト御申訳モ不被為在御事候条、御国内静謐ノ儀

ヲ專可心掛候、当時御介助中ナカラ、猶又今度御発駕

ニ付テモ御政事向ノ儀、從 太守様分テ御頼被 仰進、

甚以御心配被遊、先達テ以来追々被 仰出置候上ナカ

ラ、此節從

公辺御承知被遊候御旨趣モ有之、分テ被 仰出御事候間、御趣意ノ程厚奉汲請、聊モ決テ不致忘却、屹ト相守候様御役人限得ト可申聞旨

大御隠居様被 仰出候、

四月

一二九 齊興公帰国ニツキ論達 文化八年

今度初テ就テ

御下国、御用番様ヨリ仰達ノ趣御承知被遊、從

大御隠居様モ細々被

仰出候、此上〔乍脱カ〕万一異変ノ儀モ致到来候テハ、決テ不相

成事候条、急度可相守旨被 仰出候、

四月

一三〇 寛二郎君進上物ノ件 文化八年四月

一千鯛一箱ツ、御在国 御在府共

御三殿様へ

右年頭為祝儀表向進上

一御着代百疋ッ、

大御前様

御前様

御内證様へ

右全断

暑中

一素麵・西瓜〔瓜カ〕一種

寒中

一御着一折

御隠居様へ

右暑寒為伺御機嫌御内々 進上

但御在国之節計

御在府ノ節ハ伺御機嫌一通

一御着一折 御在国 御在府共

御同人様へ

右御誕生身魂為御祝儀表向進上

一御着一折 御在国 御在府共

御同人様へ

右御誕生日付表向進上

一御着一折 御同人様へ

右端午ノ為祝儀表向進上

上巳・端午・七夕・八朔・重陽

一祝詞一通 御三殿様へ

右ノ節々御内々ヨリ御祝詞

但御在国ノ節計

暑寒

一伺御機嫌一通 御在国 御在府共

御三殿様

大御前様

御前様

御内證様へ

右ノ節々御内々ヨリ伺御機嫌

一御祝詞一通 御三殿様へ

右ノ節々御内々ヨリ御祝詞

但御在国ノ節計

一 千鯛一箱ツ、御在国 御在府共

一 御祝詞一通

大御前様

御前様

御内證様へ

右歳暮ノ為御祝儀表向進上又ハ御祝詞

一 伺御機嫌一通 御隠居様へ

右初雪ノ節御内々ヨリ伺御機嫌

右ハ寛二郎殿年中進上物等ノ儀、若狹殿内用頼御用人

ヨリ得差凶候趣有之、元服相済迄ノ間右ノ通進上被仰

付候、尤臨時御祝儀事等ノ儀ハ時々可相伺旨、内用頼

御用人へ申渡、可承向へモ可申渡候、

但当時御儉約年限中故、年頭迄進上物被仰付候、

四月

安房

一三一 麗俗院忌日精進ノ件 文化八年五月

一 正月八日御正忌日

〔重妻女富姫〕
麗俗院様

右御正忌日迄御精進日被相立候、

五月

將監

一三二 齊興公將軍家ヨリ拝領物ノ件 文化八年五

月十七日

一 先月十五日以

上使松平伊豆守様

太守様初テ御国元へノ御暇御給、銀百枚・巻物三十御

拝領、從

大納言様モ以

上使松平能登守様、巻物二十被遊御拝領、同十九日御

登 城御礼被 仰上候処、御懇ノ被為蒙上意、御腰物

・御馬被遊御拝領候旨御到来候、

五月

將監

安房

一三三 御内證死去ノ件 文化八年六月晦日

〔於千万、齊宣生母〕

一 御内證様御病氣御養生不被為叶、去ル十四日被成御卒

去候段御到来候、

御隠居様

本文御忌日十三日被相定候、以後被仰渡ヲ可見合事

一御忌五十日

午刻

一御服十三ヶ月

六月

安房

操姫様

信濃

隨姫様

一御忌十五日

一三四 御内證死去ニツキ太守公忌服ノ件 文化八

一御服七十五日

年六月

右之通御忌服被遊御請候条、此旨向々へ可致通達候、

一御内證様御卒去ニ付御忌服左之通

太守様

一三五 御内證法名ノ件 文化八年七月九日

一御忌十五日

一御内證様御法名

一御服七十五日

春光院殿心月清凉大姉

右御父方御祖母様ニテ御忌三十日、御服百五十日被遊

右之通奉称候間、承知仕候様支配中へ可被申渡候、

御請答候へトモ、御隠居様御儀

七月

御家老座

〔重慶夫人、保姫〕
慈照院様御養子被為成候付、右之通半減ノ御忌服被遊

御請答候処、日数相過候付一日御遠慮、

大御隠居様

一三六 齊宣公へ八朔進上ノ件 文化八年七月

一御遠慮三日

一御隠居様へ当八朔進上物御忌中ニ付、来月十五日差上候様被仰付候、

七月 安房

一三七 重豪公湯治願許可ノ件 文化八年九月

一大御隠居様御事、御持病ノ御疝積其^{〔積〕}上御脚痛被遊御座候付、攝州有馬温泉へ為御湯治被遊

御光越度、御暇ノ御願被仰上趣有之候処、御願之通被仰出候段御到来候、

九月 〔藤田政興〕
典膳

一三八 江戸上下面々人馬届出ノ件 文化八年七月

一江戸上下ノ面々人馬届ノ儀ハ、先達テ委細申渡置候通ニテ、中急又ハ急飛脚等ニテ被差越候面々へモ同断、

東海道・木曾路共ニ問屋へ相掛臨時人馬相雇候ハ、致書留置、何方於駅人馬何程相雇候訳、江戸並於大坂

其届可申出候、

一東海道・伊勢路美濃並木曾路通行ノ面々、着出立ノ節御当地又ハ於大坂モ、何方通行ノ駅入用人馬何程、且

又於道中臨時相雇候儀モ有之候ハ、其段可申出旨細

々申渡ノ趣モ有之候へトモ、間ニハ届不申出者モ有之

哉ニ相見得候付、屹ト無間違様可申出候、左候テ右届書ノ儀ハ御用人ヨリ御留守居へ可相渡付、御留守居ヨ

リ致裏書物奉行へ差遣、右書付見届候上道中御賄料等可相渡候、右之通於江戸申渡候段申来候、

七月 典膳

一三九 重豪公江戸発駕ノ件 文化八年十月十三日

一大御隠居様御事有馬温泉へ為御湯治、先月十五日江戸被遊

御発駕候段御到来候、

十月 將監

一四〇 齊興公帰国ニツキ御着拝領ノ件 文化八年

十月十七日

一御家督初テ就

御帰国、為

御尋以宿次御奉書御着御拝領、明十九日御到来被遊

御頂戴筈候、

十月

安房

一四一 重豪公〔重豪公江戸発駕ノ件〕政務御介助ノ始末

○本文書は、第一三九号文書と同文により略す

一四二 〔齊興公帰国ニツキ御着拝領ノ件 文化八

年〕

○本文書は、第一四〇号文書と同文により略す。

一四三 〔重豪公政務御介助ノ始末〕

重豪公ハ英邁磊落ニマシクテ小事ニ拘リ玉ハス、御
隠居ナサレシヨリ各所ニ〔敬カ〕徴行セラレ人情形勢ヲ視察シ
玉ヒ、廣大院殿ヲ以テ内申セラレシコトモ妙カラサリ
シト云、有馬温泉湯御滞在中ニハ京都へ御徴行、近衛
家其他縁類堂上ヲモ御訪問、或宇知・奈良・吉野山辺
ニモ御漫遊、大坂辺ニハ数十日御滞留アリシト云、当
時諸大名ハ隠居ノ身ト雖モ幕府ノ許可ヲ得サレハ江戸

以外ニ出ルコトヲ得サルノ成規ナルニ、公ハ磊落不羈
ノ御性質ナルノミナラス、廣大院殿ノ御縁古〔敬カ〕ヲ以テ密
ニ上申セラレ、古西明寺蹟ニ徴ハレシト云、故ニ誰ア
ツテ啄ヲ容ル、コト能ハザリシトナム、

一四四 〔將軍家齊一橋穆翁ヲ大御所ト称セント

ス〕

夫人有栖川氏嗣子ナキヲ憂ヒ、家慶ノ弟政之助ヲ養テ
嗣ト為ス、八月一橋穆翁内大臣ニ準セラル、時人儀殿
殿ト称ス、初穆翁ヲ西城ニ迎へ尊テ大御所ト称セント
欲シ、諸レヲ松平定信・松平信明等ニ諮フ、皆以テ不
可ト為ス、家齊猶已マス、一日定信ヲ便座ニ召シ強テ
命ヲ下サントス、定信前議ヲ執テ勅カス、家齊色ヲ変
シテ内ニ入り刀ヲ抜テ出テ来リ、將ニ定信ヲ斬ラント
ス、近侍平岡頼長坐ニ在リ、其意ヲ知ラサル為子シテ〔敬カ〕
呼テ曰、雄刀一口ヲ越中守ニ賜フ、宜ク寵恩ヲ拜スヘ
シト、家齊之ヲ聞キ刀ヲ棄テ而シテ入ル、青山忠祐老
中ト為ル、家齊又之ヲ議ス、忠祐対テ曰ク、定信ノ言

八万世ノ公議ナリ、殿下其言ヲ用フ、実ニ社稷ノ福ナリ、抑々殿下橋侯ノ尊テ大御所ト為サント欲ス、固ト天倫ノ至孝ニ出ツト雖トモ、然レトモ事国制ニ悖ル、清揚甲公ノ大相国ニ拜スルヤ、蓋シ薨後ノ追尊、而シテ有徳公ノ生父紀伊侯光貞薨後猶ホ贈官ナシ、是宜ク法ルヘキモノ、況ンヤ一橋侯春秋猶富天下万世ヲ如何スヘキ、議遂ニ罷ム、是ヨリ先キ家齊日光廟ニ謁セント欲シ、老中水野忠成・若年寄植村家長ヲシテ、沿道ノ鄉村累リニ洪水凶荒ニ羅リ生ヲ聊ンセサル者已ニ数年、人民頗ル菜色アリ、請フ姑ク其期ヲ緩フセヨト、是ニ至テ廟ニ謁スルヲ止ム続日本外史、是月連日大雨、東海道水漲リテ行人ヲ沮ム、十月琉球国大ニ飢ユ民人大ニ死ス、

一四五 「賢章院侍臣某ノ追悼文・和歌」

去年ノ中秋アケノ夜

〔文政七年八月十六日死去〕

賢章院ノ君、秋ノ露トキヘサセ給ヒシニ、チカキコロ

一トセニモナラセ給ヒシユヘ、歌ヨミテ奉ルヘキノ仰

ヲ蒙リシニ、予ハ

君ノ世ニマシマセシトキ、御身チカクツカヘ奉リ、朝夕御恵ミヲウケシ身ニシナレハ、ヒトシホ過シコトトモイロイロオモヒツ、ケテ、ハヤイツノマニ期年ニモナラセ給ヒシヤト、ヒトリ月ニ向テヨノツネナキ事トモオモヒアハセシ折カラ、遥ニ念仏ノ声イト物スコク聞ヘケレハ、シノヒカタクオホヘ和歌ノ道学ヒシコトモナケレトモ、心ニウカヘルマ、三十モシアマリ一モシニツラネ手向ニソ侍ル、

こそこの秋過にし君を思ふにそ

月もなみたに雲かくれぬる

こそこの秋を思ふ心を雲やしる

いや照る月のかげもくもりつつ

一四六 省之進君元服ニツキ進上物ノ件 文化八年

十月

一 島津省之進殿元服ニ付、進上物左之通、

大御隠居様 御隠居様

一 御太刀・馬代銀三十兩ツ、

一 三種三荷ツ、

省之進殿ヨリ

太守様 大御隠居様 御隠居様

一 御太刀・馬代銀三十兩ツ、

兵庫殿ヨリ

右之通被仰付候、

十月

安房

一四七 省之進君元服ニツキ進上物ノ件 文化八年

十月

一 島津省之進殿元服ニ付進上物左之通、

大御前様 御前様

一 干鯛一箱ツ、

一 御樽代二百疋ツ、

省之進殿ヨリ

雅姫様 壽姫様 隨姫様

一 御着代百疋ツ、

右同人ヨリ

大御前様 御前様へ

一 干鯛一箱ツ、

兵庫殿ヨリ

雅姫様 壽姫様 隨姫様

一 御礼計

右同人ヨリ

太守様 大御隠居様 御隠居様

大御前様 御前様

一 干鯛一箱ツ、

兵庫殿内ヨリ

雅姫様 壽姫様 隨姫様

一 御礼計

右同人ヨリ

右之通進上又ハ御礼被仰付候、

十月

安房

一四八 加治木長年寺へ参詣ノ件 文化八年十月

一來月七日加治木長年寺へ

御参詣ニ付、三本御道具、六日ヨリ御光越、加治木飯

屋

御止宿、御往来御船ニテ八日被遊

御帰殿筈候、

十月

相馬

一四九 稻荷御参詣ノ件 文化八年十月

一來月三日

御初入部初テ稻荷神事ニ付

御参詣、直鎗流馬御覽、寶持院へ御入、

十月

相馬

一五〇 春光院忌日変更ノ件 文化八年十一月

一春光院様六月十四日御忌日ヲ、御内外共以來十三被相〔目脱之〕

替候旨申来候、

十一月

安房

一五一 諏訪神事ニ関スル件 文化八年十一月

一諏訪御神事ニ付、社役勤与合ノ内、伊地知家ノ儀モ相

勤来候へトモ、先達テ本家秩父太郎事被

聞召通趣有之家被召禿候付、右勤方被差免候条、是迄

社役勤来候面々へ寄々相逢候様、伊地知ノ内へ申渡、

可承向へモ可申渡候、

十一月

安房

一五二 酒匂次郎左衛門社役勤ノ件 文化八年十一月

小 番

酒匂次郎左衛門

右ハ諏訪御神事ニ付、社役勤与合ノ内伊地知家ノ儀誤

有之、此節被差免候付、以來跡代リ社役勤仰付候、尤

庶流別紙ノ面々モ、繰廻相勤候様被仰付候条、勤前ノ

節ハ時々見計ヲ以申渡、左候テ勤方仕向ノ儀与合同様

被仰付候間、承合可相勤旨申渡、可承向々へモ可申渡

候、

別紙名前ノ儀ハ略ス、

十一月

將監

安房

伊地知家カ諏訪社神事社役罷免セラレタルハ、秩父伊賀カ犯罪ニ起因セリ、伊地知家ハ元來秩父家ト氏姓同シキカ故、如此神祭ニ關係ヲモ免セラレタリ、

因ニ記ス、諏訪神社祭事ニ社役ヲ勤ムルハ、秩父・伊地知・長野・梶原等ノ数家、古代ヨリ祭事上輪番務ムルコトナリキ、是レ忠久公御入国ノ時付従家筋ノ内右ノ数家ナリ、諏訪神社祭事記ニ記スカ如シ、酒匂家モ付従ノ家系ナルハ皆人知ルカ如シ、茲ニ略ス、

一五三 川上臨觴死去ニツキ重豪公忌服ノ件 文化

八年十二月

一川上臨觴一昨夜病死ニ付

大御隠居様御忌五日、御服十五日御掛被遊候、

十二月

典膳

一五四 重豪公帰府ノ件 文化八年十二月

一大御隠居様御事、有馬御湯治被遊御相応、先月四日御帰府、猶御機嫌能被遊御座候段御到来候、

十二月

典膳

一五五 島津若狹年中進上物ノ件 文化九年正月

年頭

一御太刀一腰

一御馬代銀一枚

右御在府、御在国共

暑寒

一伺御機嫌一通

右御在府、御在国共

歳暮

一御肴一折

右御在国ノ節

但御儉約年限中御祝詞一通

右 同

一 御着代二百疋

右 御在府ノ節

但 書同断

一 御着一折

右 御発駕並御着城ノ節

但 書全断

右 太守様へ

年 頭

一 御太刀一腰宛

一 御馬代銀一枚宛

右 御在府、御在国共

暑 寒

一 伺御機嫌一通

右 御在府、御在国共

歳 暮

一 御着一折宛

右 御在国ノ節

但 御儉約年限中御祝詞一通

右 同

一 御着代二百疋ツ、

右 御在府ノ節

但 書全断

右 大御隠居様 御隠居様へ

年 頭

一 御着代三百疋宛

但 御儉約年限中御着代二百疋ツ、

暑 寒

一 伺御機嫌一通

歳 暮

一 御着代二百疋宛

但 御儉約年限中御祝詞一通

右 大御前様 御前様へ

右ハ島津若狭殿年中進上物右ノ通被仰付候、

正月

將監

一五六 雅姬君法名ノ件 文化九年二月

二月

安房

一雅姫様御法名

信濃

英祥院殿香譽清黨履操大姉

右之通候旨此節申来候、

二月

安房

一武五郎殿御卒去付御忌服左之通、

太守様

一五七

雅姫君 重豪公七女
島津淡路守忠持夫人

死去ニツキ忌服ノ

一御忌二十日

一御服九十日

件 文化九年二月

大御隠居様

一雅姫様御卒去ニ付

一御忌三日

一御服七日

太守様御忌二十日、御服九十日被遊御請答候へ共、御

御隠居様

忌日数相過候付一日被遊御遠慮候、

一御忌十日

一御服三十日

大御隠居様ニハ御忌十日、御服三十日

操姫様

隨姫様

御隠居様御忌二十日、御服九十日被遊御請候、

一御忌二十日

一御服九十日

二月

安房

右之通御忌服御請候、

二月

安房

一五八

武五郎君死去ノ件 文化九年二月廿一日

一武五郎殿御病氣御養生不被為叶、今卯上刻被成御卒去

一六〇 武五郎君法名ノ件 文化九年二月

候、

一武五郎殿御法名

レイガンインデンギソウリモン
靈舍院殿義相理演大禪童子

右之通奉称候、

全 全

一 靈舍院殿御遺体明廿四日暮六ツ時過福昌寺へ御入寺ノ

管候、

全 全

一 靈舍院殿明後廿七日暮六時御葬送ノ管候、

二月

安房

一六一 阿久根町旅込込ノ件 文化九年三月

一 阿久根町ノ義近年殊ノ外勞入、浦並々御奉公難相勤別
テ困究付、上下御奉公人泊ノ節、旅込込被仰付度願申
出趣有之、一往願ノ通旅込込代相当可請取旨被仰付候、
此旨向々へ可仰渡旨豊後殿御差函ニテ候、

三月

伊勢

雅樂

一六二 〔徳川十五代記抄〕

九年丙戌四月上總ノ国群盜蜂起、所在ノ民皆其難ニ遭
フ、五月江戸盜多ク夜間殺サル、者多シ、是月ヨリ東
国大ニ旱ス徳川十
五代記

一六三 春光院忌日家老代参ノ件 文化九年五月

一 毎月十三日 〔齊宣生母〕 春光院殿御忌日ニ付御精進日被立置、月

次朝計、御祥月終日、三十三回御忌迄ハ御正忌日並年
頭・盆・歳暮御家老、月次御忌日当番頭御代参、且盆

付当番頭御使ヲ以御燈炉御寺納被仰付、 御下国脇・

御発駕前 〔島津維也〕 有邦院様迄ノ

御牌 御参詣ノ御序、春光院様御牌前へ可被遊御拜候、
尤年頭・盆・歳暮等付、福昌寺へ 御参詣ノ御序 御
拜被為在候節ハ、別段 御代参被仰付不及候、且毎月
御忌日、御肴類進上並御咎目事不被仰付候、

一 御仏鑑御米三石・御銀五枚被召付、御施餓鬼ノ儀ハ七

月四日 〔島津元久〕 怒翁様 〔島津綱貴〕 大玄院様・御已前ノ御正院様其外

御夫人様御同日御執行被仰付、役僧・詰夫等ノ儀ハ有
邦院様御方へ被掛置候内ヨリ、兼役相勤候様被仰付候、

一 御隠居様ヨリ年頭・御年回御正忌日・益・歳暮御家老御代参

一 毎月御忌日朝夕御精進、益ニ付御側御用人御側役ノ間ヲ以、御燈炉御寺納被仰候、

但太守様 御隠居様ヨリ御燈炉御寺納ノ義ハ、御年限中ハ御拜殿ニ御寺納被候付候、

一 大御隠居様ヨリ御正忌日御番頭、御年回ノ節御家老御代参

右之通被相定候条、此節寺社奉行其外可承向へ申渡、御燈炉御寺納付テハ御使番御請持致取扱候様可申渡候、

五月

安房

一六四 朱紋^{〔挑カ〕}挑灯使用心得ノ件 文化九年五月

一 朱紋挑灯ノ儀ハ大目付御役火事騒動ノ場ニテ、何角差図ノ節為目印被相用、横目ノ儀モ火事場へ駈付、盜賊改又ハ諸下知等致、其外群集ノ場所へハ為締差越候付、朱紋ニ役名ヲ相記候挑灯目前ニ持セ来、藏方目附ノ儀モ同様申渡有之候、然処頃日御一門方并諸大身分ノ内、

間ニハヤツレニ朱紋提灯被相用候方モ有之由相聞得候右通ニテハ目印ニ相紛、对御役場差支相成候間、以来

ハ大目附以上並横目・藏方目付迄是迄ノ通朱紋ノ提灯相用、其外不断ハ勿論火事逆モ朱紋ノ提灯一切不相成候、此旨御一門方並諸大身分・御役人限致通達、横目

・藏方目附へモ可申渡候、

但奥向諸役場朱紋相用來候面々ハ、是迄ノ通可相心得候、

五月

安房

一六五 御用日変更ノ件 文化九年五月

一 毎月十六日

右ハ十三日御用日被定置候処御差支有之、右之通被相替候旨被仰出段申来候、

五月

安房

一六六 太守公増上寺火ノ番被命ノ件 文化九年五

月廿六日

一先月十九日御老中様御連名ノ以御奉書

太守様増上寺火ノ御番被為蒙

仰候段御到来候、

五月

安房

一六七 遠慮文字ノ件 文化九年六月

一舒 時 温 亮 諸 祀 豹 銀 兵 富 雅 寛

虎

右ハ

公義並此御方

御子様等ノ御名文字ニテ、実名等ニ遠慮申渡置候ヘト

モ、最早不及其儀候、

六月

信濃

一六八 於八百ノ方名唱ノ件 文化九年六月

一於八百殿

右以來於八百ノ御方ト相唱、女中五人被召付候、

六月

典膳

一六九 松前様ヨリ此御方様へ被仰進候御知ラセ

ノ写

以手紙啓上仕候、昨夕御用番土井大炊頭様ヨリ家来之者被召呼、東蝦夷地島々へ異国船来着及不法、且又箱館松前之沖間へ輕敷^(輕カ)船往通之様子ニ付、松前引払迄ニ海辺之手当無油断申付、箱館奉行へ可申渡旨御書付ヲ以被仰渡候、右為御知各様迄私共ヨリ宜可得御意旨、若狭守被申付候条、如此御座候、

松前若狭守内

六月四日

横井多官

松前若狭守様本御領分東蝦夷地へ、異国船サン越狼狽争乱及候由ニテ、出羽奥州之御大名へ段々御手当被仰付、追々彼方へ被差越候由、佐竹左京大夫様御方ハ公儀ヨリ人数五百人被サレ^(サレ)出旨、先月廿四日御達御座候処、翌廿五日ニハ無異儀蝦夷へ被差向之段、此御方様へモ佐竹様ヨリ為御知被成候、其書付^(サレ)左之通御座候、以手紙致啓上候、昨日土井大炊頭様ヨリ留守杯御呼出

ニテ罷出候処ニ、東蝦夷地へ異国人差越及狼狽之趣ニ付、御人数三百人程武器其外用意イタシ置候儀、御書付ヲ以被仰渡候処、先月廿四日箱館奉行羽月安藝守様ヨリ、左京太夫様御国元へ御達有之候ハ、東蝦夷及爭乱候ニ付、御人数五百人ホト箱館表へ可差出旨御達ニ付、翌廿五日右人数御出之段御国元ヨリ申来候ニ付、今朝御用番様へ御達被成候、右御知其御方様并御惣容様へ被仰進候故、此段各様迄宜可得御意旨、左京太夫様被仰越候条、如斯御座候、

六月四日

安田五兵衛

關口 金八

御使番 村上大學

御目付 遠山金四郎

右御留守居方へ參候由、

一七〇 (島津貞久) 道鑑公四百五十年回忌ノ件 文化九年七月四日

一道鑑様四百五十年御回忌御法事被為濟候、

七月

安房

一七一 公子方御台所御養ノ件 文化九年七月

一元姫君様 モト トモ

友松様

文姫君様 フミ

保之丞様 ヤス

要之丞様 ヤウ

御事

御台様御養被仰出候段從

公義被

仰渡候旨申来候、依之右唱ノ名附居候者ハ可致遠慮候、

七月

將監

一七二 堀田豊前守御両敬被仰談ノ件 文化九年七月

一堀田豊前守様

右ハ御家内様共以来御両敬被仰談度、於江戸此御方様

ヨリ被仰進趣有之、先月十日被応其意候旨申来候、

七月

將監

右御正忌日付御精進日被相立候、

八月

安房

一七三 堀田備前守家族ノ件 文化九年七月

一 堀田備前守様 御家内

御嫡子 堀田美濃守様

右ノ 御新造様

御二男 眞野亮之助様

御四男 堀田門次郎様

御女子 於滿様

於池様

御妹 於幸様

右之通候条、此旨可承向々へ可申渡候、

七月

將監

一七四 靈舍院正忌日ノ件 文化九年八月

一二月廿二日

靈舍院殿

一七五 日奈久町焼失ニツキ宿賦ノ件 文化九年九月十二日

一日奈久町焼失ニ付宿無之候付テハ、江戸其外交代ノ面々、上下ノ節其考ヲ以致宿賦候様被仰渡候、

九月

一七六 重豪公九男桃次郎君後黒田美濃守長薄公誕生ノ件

文化九年九月

一 去年三月朔日高輪於大奥

御男子様御誕生、御名

桃次郎様ト奉称、御丈夫被為成候付、此節

大御隠居様御九男御届被為濟候、

九月

安房

一七七 桃次郎君命名同唱遠慮ノ件 文化九年九月

一去年三月朔日高輪於大輿

御男子様 御誕生

御名 桃次郎様ト奉称、御順ノ儀ハ

壽姫様御次ニ被

仰出候条、此旨奉承知桃ノ字並同唱迄モ名ニ附居候人ハ可致遠慮候、

九月

安房

一七八 於八百ノ方御門通行ノ件 文化九年九月

一於八百ノ御方御門通融ノ節、両扉相開番人下座等ノ儀、並途中ニテ諸人參合候砌モ都テ是迄ノ通ニ候条、此旨可承向ヘ可申渡候、

全 全

一於八百御方事於八百ノ御方ト此御ノ字書認候様被 仰

出候、

九月

安房

一七九 帰国御暇願ノ件

一大御隠居様御筆仰出^マ

先達テ内々申越置候当秋其元入湯御暇申上差越候心得ニテ候処、

御台様神田橋ニテ御差留ニ相成御厭之趣、誠冥加至極難有仕合、何分畏リ御受申上、先ツ近年中ニハ御暇ノ儀ハ不相願候処、得ト相考候ニ、先年混雜後御老中方ヨリ内沙汰ノ趣モ有之、当時介助中ニ候ヘハ、何レ今一度ハ鳥渡差越、其元ノ様子不及見聞候テハ、永々ノ儀無覺束存候、其上其方共ヨリモ毎度願越候一筋モ有之、旁以此度猶又無拋詛合申立候ヘハ

御両方様共ニ御聞濟ニテ、国家長久難有仕合、来秋御暇申上候心得候、然ハ自分着ノ上彼は見聞致シ万端可申聞候ヘトモ、先夫迄容貌言語其外前々申渡置タル趣意等折角取調、行届候様各申談、末々迄モ可申渡置候、見聞ノ上万端届兼候筋合モ候得ハ、急度存寄モ有之候、此段前広申聞置候事、

十月朔日

国元家老中へ

右ニ付御家老衆連名ノ添書略ス、

一八〇 〔青山五郎右衛門切米被下置ノ件〕

御切米貳拾俵

町田監物差引

出水郷士

青山五郎右衛門

右ハ南蛮流砲術等致相伝、且種子島大筒並棒火矢等之火術致伝授免帳迄相請取業合宜、往々可御用立者ニ付、異国船御手当へ被掛置候処、門弟ヲモ多人數取立指南方致出精、殊ニ多年自分物入ヲ以テ芸熟致、旁御用立候御取次〔歌カ〕ヲ以此節被召出、其身一代御小与へ被入置、右之通御切米被下置候、

右御格之通可申渡候、

十一月

但馬

一八一 徒目付横目等ノ勤向ニ関スル件(重豪公)

文化九年十二月

大御隠居様御筆仰出

一徒目付・横目・蔵方目付・広敷横目ノ儀ハ、夫々掛ノ向見聞ノ為メ掛置、過半ハ一列ニテ勘定ヲモ相遂由候故、別テ大切成勤柄ニ候処、其意ヲ不汲受、間ニハ役場不相応ノ儀モ有之哉ニ相聞得、不将ノ至ニ候、諸蔵々並膳所・納戸方・広敷其外於勤場日用ノ損費迄モ屹ト令見聞、不正筋ノ儀ハ勿論、少事タリトモ見聞ノ次第不差置申出候様可申渡候、此上ナカラ万一不取締ノ趣モ候ハ、一涯重ク咎目可申付候、尤格別出精相勤候者ハ、品能可及沙汰候間、此段モ可申聞候事、一見聞役掛置候場所へ相勤候者ハ勿論、諸向へ分テ此節見聞ノ趣申付候間、已前ヨリ仕来ノ事タリトモ急度相改、実意ヲ以令精勤、当時分テ儉約ノ詮相立候様申渡、格別出精勤候者へハ、其功可相立候間、支配ノ者右心得ニテ召仕候様、細々以添書可申渡候、尤国許へモ同断可申越候、且隠目付申付置候間、諸向其旨可相心得候事、

右ニ付御家老衆添書略ス、

十二月

急度掛心頭、取調事等行届無延引物每涯々相〔マ、マ〕付候様
可被致取扱候、此旨御役人限可申渡候、

一八二 〔井伊兵部少輔・土井大炊頭申渡写〕

正

監物

右此涯蝦夷地へ異国船致来着候ニ付、彼地へ被差越候

安房

之旨可用意旨、於御右筆部屋縁〔頼之〕類若年寄可出座、井伊

典膳

兵部少輔申渡候、

津輕越中守

名代

那須與市

上文缺ク :

ナル廿枚 卷物五ツ

蝦夷地ニ異国船来着ニ付、御本ノマ、マ拝領被仰付御序無之候

ニ付、御目見不被仰付可入念旨上意、右ニ付御〔マ、マ〕蝦被下

候旨、於御国書院縁頼老中列座大炊頭申渡候、

一八三 風俗其他ニツキ重豪公諭達ノ件

御別紙之通此節從

大御隠居様被 仰出誠以奉恐入事候条、於諸向モ承知

〔表紙〕

齊興公史料

市来四郎編
自文化十年
至文化十一年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙数五七枚）」の記載あり〕

目録

- 一 江戸邸ニ於ケル諸向二年詰ノ件（文化十年正月）
- 一 靈舎院殿忌日変更ノ件（文化十年三月）
- 一 齊宣公受厄ニツキ願文中止ノ件（文化十年四月）
- 一 増上寺火ノ番引継ギノ件（文化十年五月）
- 一 上府道中継人馬ノ件（文化十年六月）
- 一 光舎院殿法号ノ件（文化十年七月）
- 一 於八百ノ方取扱ノ件（文化十年九月）

- 一 重豪公ノ論達ニ対スル請書ノ件（文化十年九月）
- 一 勝手方吟味役廃止ノ件（文化十年十月）
- 一 所帯向ニ関スル申出ノ件（文化十年十月）
- 一 御趣法方設置ノ件（文化十年十月）
- 一 閑姫及竹千代君誕生命名ノ件（文化十年十一月）
- 一 大將軍以下順称ノ件（文化十年十一月）
- 一 竹千代君同唱遠慮ノ件（文化十年十一月）
- 一 閑姫君御順及同唱遠慮ノ件（文化十年十一月）
- 一 竹千代君呈書等認方ノ件（文化十年十一月）
- 一 治五郎君誕生御順及同唱遠慮ノ件（文化十年十二月）
- 一 閑姫君縁組ノ件（文化十年十二月）
- 一 於長殿縁組ノ件（文化十年十二月）
- 一 閑姫君縁組引越ノ件（文化十一年正月）
- 一 島津筑後守叙爵ノ件（文化十一年正月）
- 一 白金今里邸取入ノ件（文化十一年二月）
- 一 長姫君出府並ニ改名ノ件（文化十一年二月）
- 一 竹千代君色直祝儀ニツキ三公拝領物ノ件（文化十一年三月）

- 一 処罰者役料米ノ件 (文化十一年三月)
- 一 白金今里邸引移期日ノ件 (文化十一年)
- 一 生駒大内藏養子並精進日通知ノ件 (文化十一年三月)
- 一 参府道中人馬繼立方ノ件 (文化十二年四月)
- 一 啓之助君復縁ノ件 (文化十一年四月)
- 一 啓之助君同唱遠慮並ニ聰姫君ト出府ノ件 (文化十一年四月)
- 一 啓之助君齊宣公七男ト届出ノ件 (文化十一年五月)
- 一 太守公増上寺火ノ番被命ノ報 (文化十一年五月)
- 一 太守公登城ノ報 (文化十一年五月)
- 一 年寄上席曾美死去ノ報 (文化十一年六月)
- 一 年寄曾美法号ノ件 (文化十一年六月)
- 一 齊宣公白金邸引移後諸規定ノ件 (文化十一年六月)
- 一 聰姫君出府届出ノ件 (文化十一年七月)
- 一 大風時諸役出府励行ノ件 (文化十二年七月)
- 一 齊宣公白金邸引移ノ件 (文化十一年七月)
- 一 聖堂积ノ件 (文化十一年七月)
- 一 聰姫・啓之助両君出発ノ件 (文化十一年八月)

一 地廻供ノ中減少ノ件 (文化十一年九月)

一 西方宿場ノ件 (文化十二年八月)

一 竹千代逝去ノ報 (文化十一年十月)

一 慈照院等忌日變更ノ件 (文化十二年十月)

〔竹千代様御院号被仰渡ノ報〕

一 達姫君誕生命名及同唱遠慮ノ件 (文化十一年十一月)

一 聰姫・啓之助両君着府ノ報 (文化十一年十二月)

一 公子姫ノ字ノ件 (文化十一年十二月)

一 太守公以下御名順ノ件 (文化十一年十二月)

一八四 江戸邸ニ於ケル諸向二年詰ノ件 文化十年

一 去ル辰年ヨリ五ケ年ノ間、分テ稠敷御儉約ニテ、御年限中諸向二年詰被仰付置、格別御取縮有之候ヘトモ、差テ其詮不相見得候、依之一往当分ノ通二年詰被仰付候、

右之通於江戸申渡有之候段申来候、

正月

〔島津久春〕
將監

一八五 靈合院殿忌日變更ノ件 文化十年

二月廿日

〔武五郎、齊宣男子〕
靈合院殿御正忌日二月廿二日候へトモ、御差支ノ儀有之、右ノ通被相替候、

三月

將監

一八六 齊宣公受厄ニツキ願文中止ノ件 文化十年

一御隠居様当年四十一御受厄ニ付、諸大身分・奥表諸御役人並諸士又ハ諸郷三町人相中迄、御願文先例差上来候へトモ、当時諸向困究ノ段被

聞召通候付、此節モ御願文不及差上、並自分心入ヲ以差上度存候向ハ勝手次第被仰付候、

四月

將監

一八七 増上寺火ノ番引継ギノ件 文化十年

一先月廿三日増上寺火ノ御番御代松平陸奥守様へ被仰付、御引渡相済候段申来候、

五月

將監

一八八 上府道中繼人馬ノ件 文化十年

一御当地ヨリ江戸へ被差越候面々、東海道・伊勢路・美濃路通行ノ節、繼人馬二十五人・二十五疋及以上候節ハ、御伺ニ相成候様道中御奉行衆ヨリ被仰渡、尤人馬何程ト御伺済ノ上ハ相減致通行候儀モ不相成候、依之以来仕向左之通、

一二十五人・二十五疋以上ノ人馬同日繼立候儀有之節ハ、往返日賦考ノ上出立日限、前以其訳可申出候、左候ハ、御免ノ上可被差立候、

一右人馬数ニ不及被差立候面々、御当地同日ニ出立不致候テモ、船中不順ニ有之候カ、又ハ何ソニ付相滞、多人数一所ニ着坂致シ、同日ニ罷立候テ人馬過上致候へハ可及差支候、上坂ノ上御留守居へ得差図候上可致通行候、

一右ニ付於道中先触外臨時雇人馬致候節ハ、何方於駅々何程ツ、何様ノ訳ニテ雇入候旨、日付迄書記江戸着ノ上御留守居役所へ届可申出候、

一御用物被差越候節迎モ、二十五人・二十五疋及以上候へハ、是以御伺無之候テハ不相叶事候故、受持御役場氣ヲ付可成丈右人馬數ヨリ内ニテ相濟候様可取計候、乍然急ニ不差越候テ不叶品モ有之、人馬過上致シ御伺ニ相成候儀間ニ合兼候節ハ、伏見ヨリ二手ニ可差越候間、右ノ趣於大坂宰領人ヨリ御留守居へ可得差戻候、

六月

將監

一八九 光舍院殿法号ノ件 文化十年

一光舍院心珠淨 大姉

右ハ、於^{〔彌〕}隣殿御母須賀法号右之通候、以来諸書付等モ光舍院殿ト、此殿ノ文字相用候様被仰付候、

七月

^{〔島津久備〕}安房

一九〇 於八百ノ方取扱ノ件 文化十年

一 於八百ノ御方^{〔所宣室〕}

右ハ 御内証様御全様何篇取計御柄居所等モ是迄 春

光院殿被成御座候場所へ御柄居有之候様、当分 御留

守ノ儀ニモ候間、御年寄ヲ初惣女中差寄相勤、追々於八百ノ御方思召ニ可有之候付、其上ニテ御付女中モ可被仰付候、尤年中表方ヨリ御渡方ノ儀モ是迄 春光院殿様御同様ノ振合ニテ、御広敷御用人取計被仰付候、

一於八百ノ御方御門通融ノ節、大戸相開本下座被仰付候間、途中ニテ諸人參逢候砌モ右ニ応ヘク候、

九月

安房

一九一 重豪公ノ諭達ニ対スル請書ノ件 文化十年

一此節

大御隠居様被遊 御下向、御領國中風俗ノ儀付細々被仰出候趣夫々奉承知通候、右付四家并御家老ヲ始一統家督ノ者ヨリ御請書血判ニテ差出、末々至リ候テモ其頭立候者ヨリ全断差出候様、左候テ右之趣家々ニ書留後代ニ至候テモ、聊忘却致間敷旨被 仰出候条、別紙案文ノ向ヲ以夫々御請書相認血判ノ上、支配頭等へ相付可差出候、此旨向々へ不洩様可申渡候、

但血判ノ儀付テハ、追テ何分可申渡候、

十月

(川上久志)
右近

將監

安房

一 御領國中風俗等ノ儀付、委細被

仰出候趣一々奉承知候、以来屹ト相改、後代子孫至リ

聊忘却仕間敷候、仍御請書如是御座候、以上、

年号月日

何某血判

九月

右同安房

一九二 勝手方吟味役廃止ノ件 文化十年

一 是迄御勝手方吟味役被仰付置候ヘトモ、此節被成御免、

一 往役場引取被仰付候条、此旨申渡可承向ヘモ可申渡

候、

十月

右近

一九三 所帯向ニ関スル申出ノ件 文化十年

○本文書は、後出の第二三九号文書と同文により略す。

一九四 御趣法方設置ノ件 文化十年

○本文書は、後出の第二四〇号文書の達と同文により略す。

一九五 閑姫及竹千代君誕生命名ノ件 文化十年

一 去年正月芝於大奥

御隠居様御女子様被遊 御誕生御名

閑姫様ト奉称候、最早御丈夫被為成候付、此節御弘有

之候、依之御役人限並詰衆明^(后カ)十五日御礼後居残候テ、

御三殿様 若殿様へ於席々謁御祝儀可被申上候、

一 今度御誕生ノ 若殿様、竹千代様ト奉称候旨被仰渡候

付、御名ノ文字遠慮ノ儀ハ別紙申渡通候、依之千代ト

統候唱モ遠慮致候様可申渡候事、

十一月

安房

一九六 大將軍以下順称ノ件 文化十年

一 公方様^(家斉)

大納言様^(家慶)

御台様

御簾中様 竹千代様

淑姫君様

右之通御順候旨被仰渡候段申来候、

十一月 安房

一今度御誕生ノ

若君様御事被遊 御官位候迄ハ、御呈書其外竹千代様
卜奉相認旨被仰渡候段申来候、

十一月 安房

一九七 竹千代君同唱遠慮ノ件 文化十年
一今度

若君様御誕生 竹千代様卜奉称候旨被仰渡候段申来候
依之 御名ノ文字並実名ニ相用候儀、且同唱ノ文字迄
モ遠慮可仕候、

十一月 安房

二〇〇 治五郎君誕生御順及同唱遠慮ノ件 文化十

年

二〇〇ノ一 御前様 御安産

御二男様御出生、御名治五郎様卜奉称、御順ノ儀ハ閑
姫様御次被仰出候条、此旨奉承知治ノ字並同唱迄モ名
付居候人ハ可致遠慮候、

二〇〇ノ二 全 全

一九八 閑姫君御順及同唱遠慮ノ件 文化十年
一去年正月芝於大奥

御隠居様御女子様被遊御誕生御名

閑姫様卜奉称候、御順ノ儀ハ 隨姫様御次候条、此旨
奉承知、閑ノ字並同唱迄モ名付居候人ハ可致遠慮候、

十一月 安房

一今般 御前様 御安産

御二男様御出生、御名治五郎様卜奉称、十一月十七日
御二男ノ御届被為濟候段御到来候、

十二月廿六日 右近

一九九 竹千代呈書等認方ノ件 文化十年

二〇一 閑姫君縁組ノ件 文化十年

一 閑姫様御事、松平久五郎改名様御縁与御取結被成度、
松平樂山様ヨリ無御抛被仰進趣有之、被応其意先月朔
日先御内々ニテ樂山様御方へ御引越被為濟候段御到来
候、

十二月廿六日

右近

二〇二 於長殿縁組ノ件 文化十年

一 於長殿

右ハ島津太郎次郎へ縁与被 仰出置候へトモ、被為在

二〇二 思召御取返被仰付候、

全 全

一 御同人御事、長姫様ト奉称候様被仰付、尤御順ノ儀ハ

隨姫様御次 閑姫様御頭へ被成御座候様被 仰付候、

全 全

一 於長殿御事、長姫様ト奉称候付、長ノ字並同唱迄モ名

付居候人ハ可致遠慮候、

〔十二月〕

右近カ

先達テ 長姫様御名遠慮ノ儀申渡置候へトモ、聰姫様

ト御名替付、最早不及其儀候、

戌二月

安房

十二月

右近

二〇三 閑姫君縁組引越ノ件 文化十一年

正月 安房

一 閑姫様御事、松平久五郎様へ御縁与御願ノ通被仰渡、

旧臘廿五日御引越ノ御届御用番へ被

仰出候段申来候、

全 全

一 閑姫様御事、松平久五郎様へ御縁組御願ノ通被仰渡候

付、久五郎様御名同名ノ者ハ遠慮可仕候、

二〇四 島津筑後守叙爵ノ件 文化十一年

又四郎殿御事

島津筑後守殿

右ハ旧臘十六日御叙爵被

仰出、右ノ通御改名被成候申来候、

正月

安房

全 全

二〇五 白金今里邸取入ノ件 文化十一年

二月 安房

一長姫様御事、

聰姫様

右之通御名替

大御前様御養被 仰出候、

一今度

御隠居様御屋敷白銀村今里ノ内百姓地面一畝ニシテ御

取入相成、御家作等御成就ノ上、追テ御引移被遊筈候

旨申来候、

全 全

一長姫様御事、

聰姫様ト奉称候付、聰ノ字並同唱迄モ名付居候人ハ可

致遠慮候、

二〇六 長姫君出府並ニ改名ノ件 文化十一年

二〇六ノ一
二月 安房

一長姫様御事、当秋中御出府被

仰出、島津啓之助殿ニモ同断、御供人数其外都テ御子

様方ノ通ニテ御物御計ヲ以、御一所ニ御出府有之候様

御内定候付、右体御例ヲ以致吟味、当時ノ儀故何篇御

手細ニ取調申出候様御広敷御用人ヘ申渡、可承向ヘモ

可申渡候、

二〇六ノ二
長姫様御改名達書

二〇七 竹千代君色直祝儀ニツキ三公拝領ノ件

文化十一年

三月 安房

一竹千代様御色直御祝儀付、從

竹千代様先月三日

上使松平周防守様ヲ以

御三殿様被遊御拝領物候段御到来候、

二〇八 処罰者役料米ノ件 文化十一年

三月 安房

一 不宜聞得等有之、何分申渡迄ノ間勤方差控慎罷居候様申渡置、後達テ御役等被差免候者、御役料米ノ儀ハ慎申渡前日迄ノ日割ヲ以差引可致候、尤慎申渡置候テモ役義不差免、逼塞遠慮等ノ輕御咎目申付候者ハ、慎内ノ被下方不及差引候条、此旨物奉行御代官へ申渡、可承向へモ可申渡候、

二〇九 白金今里邸引移期日ノ件 文化十一年

全 右近

一 白銀村・今里村百姓地面ノ内一畝ニ相円

御隠居様御名前ニテ御物屋敷御免有之候付、白金御屋敷ト相唱、諸書付等ニモ其通可仕候、左候テ 御殿向其外御出来ノ上当六月頃、

御隠居様

大御隠居様被遊御移御内定候、御移ノ上ハ万端高輪御屋敷御仕向ニ被準筈候条、向々其心得ニテ致取扱物毎

御手細ノ方ニ取調可仕候、

二一〇 生駒大内藏養子並精進日通知ノ件 文化十

一年

三月 右近

生駒大内藏様

右ハ丹羽左京大夫様御叔父修減様御事、御養子御願ノ通被

仰出旧冬御引取相濟、右付談合モ被為在候故、以来御兩敬被仰合度被仰進、先月廿日被応其意候段申来候、

全 全

一 生駒大内藏様 御精進日

五日 十六日 廿三日

右終日

十九日 廿一日

右朝計

右之通申来候、

全 全

一 生駒大内藏様 御家内

御養子

生駒修減様

大内藏様

奥方様

修減様

奥方様

安藤將曹様
御縁女

於中様

右之通申来候、

二一 参府道中人馬繼立方ノ件 文化十二年

一 江戸詰トシテ致往来候面々、於道中人馬繼立方ノ儀、
以来左ノ通、

一 繼人足二十五人

一 繼馬二十五疋

右ハ何ソ付御礼使並御用物才領其外間々交代等ニテ、
東海道致通行候節一日分右之通繼立候、右外ハ一人・

一疋タリトモ、

公辺へ御伺無之候テハ通行不相成候、

一 繼人足五六人ノ間

一 繼馬二三疋ノ間

右ハ美濃路ノ儀、一日分右人馬數ニテ罷通候儀ハ不苦
候、過上ニ及候へハ前条同断御伺無之候テハ通行不相
成候間、可成丈伊勢路可罷通候、

一 中山道・木曾路ノ儀ハ被究置候通、猶又無間違様可心
得候、

一 江戸致出立候節、人馬數届申出置候外ニ於道中臨時相
雇候節ハ、何月何日・何方於宿・幾人・何疋相雇候訳、
於大坂御留守居へ届可申出候、最早申出置候通無間違
候テモ其段可申出候、尤爰元ヨリ致出立候節ハ、於大
坂増減等ノ儀ハ於江戸可申出候、左候テ右届申出候節
役目等片書ニ相記、銘々名前相立同立一所ニ可申出候、
右ハ道中人馬繼立方ノ儀付テハ、先年ヨリ度々申渡趣
モ有之候処、間ニハ不行届儀モ有之不可然事候条、以
来右之通相心得、聊大形ノ儀有之間敷候、乍此上不守
ノ者モ候ハ、屹ト可及沙汰候、此旨不洩様向々へ可申
渡候、左候テ出立ノ節申出候節向々御用人ヨリ当人又

ハ支配頭等へ前文ノ趣無間違様時々可相達旨、是又可申渡候、

四月

〔新納久命〕
内藏

全 全

一啓之助殿御事、島津首令養子御取返被仰出啓之助様ト奉称候付、啓ノ字並同唱ノ名付居候人ハ可致遠慮候、

二二三 啓之助君復縁ノ件 文化十一年

四月 内藏

一啓之助様御事当秋

聰姫様御一所御出府被在候様被

一啓之助殿御事、島津首令養子被

仰出候段申来候、

仰出置候処、思召有之此節御取返被成候旨

全 全

大御隠居様被

一聰姫様 啓之助様御儀

仰出候、左候テ外

御出府ノ節御道中御休泊御一所ニテ、御宿札等ノ儀ハ

御子様方御同様此様文字相用、御順之儀ハ

啓之助様御名前ニテ被遊御通行答候、

聰姫様御次被仰付候旨、是又被

仰出

二二四 啓之助君齊宣公七男ト届出ノ件 文化十一年

御本丸へ御上有之候、

五月 内藏

二二三 啓之助君同唱遠慮並ニ聰姫君ト出府ノ件

一啓之助様御事此節

文化十一年

御隠居様御七男ノ御届被為濟候、

四月 内藏

二二五 太守公増上寺火ノ番被命ノ報 文化十一年

○本文書は、第一六六号文書と同文により略す。

一御年寄上席曾美病氣養生不相叶先月廿日致死去候、

御子様方御出生モ為被在御事候付

大御隠居様日数三日御遠慮被遊候、

二二六 太守公登城ノ報 文化十一年

五月 安房

二二八 年寄曾美法号ノ件 文化十一年

六月 右近

一 太守様御不快付御滞府被遊

御保養候処、御快御参府ノ御時節相成候付、御用番土

一 柏壽院殿貞節如純大姉

井大炊頭様・西丸御老中松平能登守様へ御対容ノ儀被

右ハ曾美法号右ノ通ニ候、以来諸書付等ニモ柏壽院殿

仰込、先月十一日

ト此殿文字相用候様被仰付候、

御見舞、

公辺御機嫌被相伺同十五日

二一九 齊宣公白金邸引移後諸規定ノ件 文化十一年

御登城御参府ノ御礼被仰上候処、御懇之被為蒙 上意、

御直御請被仰上、諸事御先格之通被為濟候段御到来候、

右之通御滞府後初テ 御出勤御参府ノ御礼迄モ被仰上

六月 右近

候、

一 御隠居様

一 年頭・節句日其外御祝儀伺

二二七 年寄上席曾美死去ノ報 文化十一年

大御前様白金御屋敷へ御引移ノ上ハ、左ノ通被仰付候、

六月十七日 右近

御機嫌又ハ何ソ付御礼申上候儀、且又御附人数着出立届振等ノ儀共何篇

大御隠居様御方御同様ノ仕向被仰付候、且

大御前様へ是迄御広敷へ罷通御祝儀等申上来候面々ハ

右ニ準申上候様被仰付候、

一御附御小納戸ヨリ御側目付・御供目付兼務被仰付候、

御厩ノ儀ハ御小納戸頭取ノ内へ御馬預兼務被仰付候、

一新番一人中小姓十人相詰候様被仰付候、

右ノ通被仰付候旨申来候、

二三〇 聰姫君出府届出ノ件 文化十一年

一聰姫様御儀当秋御出府付テハ、先月十八日御用番青山

下野守様へ御届被及候段申来候、

七月 内藏

二二二 大風時諸役出府励行ノ件 文化十一年

一大風ノ節請持ノ御座々奉行頭人ハ勿論、書役・小役人

当番・非番ニ不限罷出候様、先年被仰渡置候処、先夜

大風ノ刻モ無其儀候間、向後右様ノ節ハ屹ト罷出、若

異変ノ儀有之候ハ、御目付へ届可被申出旨、内藏殿ヨ

リ被仰渡候、

七月

御目付

二二三 齊宣公白金邸引移ノ件 文化十一年

一御隠居様

大御前様御事、先月十八日白銀御屋敷へ御引移被為濟

候段御到来候、

二二三ノ二 全 全

一御隠居様

大御前様御事、白銀御屋敷へ御引移被遊候付テハ、何

ソ付

上使御給等ノ節ハ上御屋敷ニテ御引請可被遊旨、御用

番へ御届被

仰出置候旨申来候、

七月

内藏

二二三 聖堂積ノ件 文化十一年

一聖堂積ノ儀当分名目迄被立置、春一度御名代等ハ有之、
(寛脱カ)

備物ハ輕キ品迄ニテ儀式ハ無之候処、以來春一度積ノ儀式執行候様被仰付候、左候テ當時殿敷御儉約中ノ事故、万端不及御入価様可取計旨被仰付候、

七月

内藏

二二四 聰姫・啓之助両君出発ノ件 文化十一年

一 聰姫様 啓之助様来ル廿七日被遊

御発興候、

八月

安房

二二五 地廻供ノ中減少ノ件 文化十一年

一 御先供兩人

一 御駕籠廻ノ内奥御小姓一人・奥御茶道一人

一 合羽籠二荷

右ハ御地廻御供立ノ内、右ノ通御減少ノ筋

公辺へ被為及御届候間、右外ニモ向々吟味ノ上可被相

減儀ハ其通可有之旨

大御隠居様御沙汰被為在候段申来候、

九月

右近

二二六 西方宿場ノ件 文化十一年

一 西方宿場ノ儀、浦人共近年相勞^{〔下〕}方等一円無之、往来

御奉公人宿等差支候付、江戸・大坂其外往来ノ御奉公

人西方泊ノ節、旅込仕調差出相当ノ旅込錢相請取候筋

被仰付被下度願申出趣有之、願ノ通被仰付旅込代相当

可相請取旨、向々へ不洩様可被仰渡旨右近殿御差函ニ

テ候、

八月廿三日

末川主膳

二二七 竹千代逝去ノ報 文化十一年

一 竹千代様御不例御養生不被為叶、八月廿六日被遊御逝

去候段御到来候、

十月二日

右近

二二八 慈照院等忌日変更ノ件 文化十一年

一 慈照院様

右御忌日九月廿六日 九月廿三日被相当候、

一 芳蓮院様

右御忌日六月十一日 六月八日ニ被相当候、

一 嶺松院様

右御忌日十一月二十日 十一月十九日被相替候、

一 寶臺院様

右御忌日三月三日 三月二日ニ被相替候、

右御靈々御忌日、右ノ通被相替候旨被仰出候段申来候、

二二九 竹千代様御院号被仰渡ノ報

全 全

一 竹千代様御院号

玉樹院ト奉称候旨、從

公儀被仰渡候段申来候、

十月

右近

二二〇 達姫君誕生命名及同唱遠慮ノ件 文化十一

年

一 今度於西丸

姫君様御誕生、御名

達姫君様ト奉称候段從

公儀被仰渡候旨申来候、依之右唱之名付居候者ハ可致

遠慮候、

十一月

内藏

二三一 聰姫・啓之助兩君着府ノ報 文化十一年

一 聰姫様 啓之助様長途御機嫌能先月六日被遊御着府候

段御到来候、

十二月

右近

二二二 公子姫ノ字ノ件 文化十一年

一 御子様方ノ御中、是迄御内輪ニテ姫ノ字被相用、表向

ハ不被相用事ニ候、以来モ弥其通可有之、乍然御近親

ノ御方様方へ御文等ニ相認候節、依時宜ハ姫ノ字相用

候儀モ可有之事候、

英姫様御事ハ御内輪表向共姫ノ字相用候様被仰出候、

十二月

右近

二三三 太守公以下御名順ノ件 文化十一年

一 太守様

大御隠居様

御隠居様

御前様

大御前様

若殿様

右ハ

御名順被相究置候へ共、以来ハ

公辺向他所御内輪共右之通被相究候、

〔表紙〕

齊興公史料

市來四郎編
自文化十年
至同十四年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料（紙数七〇枚）」の記載あり〕

目録

徳川十五代史

御用金ニ関スル達書

〔徳川十五代記抄〕

重豪公帰国ニ関スル論書

同上家老論達

御趣法方創設達書

御趣法方役所名達書

江戸落書

御船手御作事方上申書、地金用古鍋釜類ニ関スル件

〔物奉行方調査〕

齊宣公御隠棲達書

士分ニツキ齊宣公論達ノ件

白金邸称タル達書

齊宣公白金邸引移達書

齊宣公上使御給等引請届出ノ件

〔江戸大火記事〕

諸士ノ容貌言語風俗等ニツキ重豪公論達ノ件

六部体ノ者取締ニ関スル達書

風俗容貌言語等ノ取締ニ関スル件

同上ニツキ家老論達

〔参考 種子島時防日記抄〕

重豪公財政改革ノ布令

御用金上納ニ関スル達書

郁姫君御名認方ニ関スル達書

〔一橋治済記事〕

重豪公政事向ニ関スル論達

〔齊興公御添書〕

禄高課出米事件

〔水野忠邦外二名転封ノ記事〕

風俗言語容貌等ニ関スル論書

〔堀田正敦蝦夷地派遣ノ聞書〕

〔六部並大社参詣廻者取締ニ関スル達書〕

〔家慶公同唱遠慮ノ件〕

安田助左衛門日記

二三四 徳川十五代史

〔文政カ〕

文化十年丁亥二月准大臣一橋穆翁病ニ罹ル、家齊生父

ノ故ヲ以テ躬ラ其邸ニ臨ミ、之ヲ省ス是月二十日穆翁

薨ス、寛永寺ニ葬ル、更ニ一廟ヲ造リ私ニ謁ス、三月

天皇家齊ニ除服ノ宣下ヲ賜フ統日本、外史、是月

天皇詔シテ將軍家齊ヲ太政大臣ニ進メ、以テ在四十年

間ノ勤勞ヲ賞シ、世子家慶内大臣ニ遷ル、家齊・家慶

乃青山忠祐ヲシテ入朝セシメ金二千万ヲ

禁闕ニ納メ、銀百貫目ヲ毎年仙洞ニ納ムルノ例ヲ立テ、

関白ノ職俸五百匁ヲ増シ、且銀帛ヲ諸公卿ニ贈ル、源

氏・足利氏以來軍職ニ在リテ太政大臣ヲ兼ル者ハ独リ

家齊アルノミ、世以テ異数ト為ス、忠祐ノ東帰セント

スルヤ、

天皇賜フニ御衣一襲ヲ以テシテ其行ヲ勞ス、婦ニ及テ

家齊亦硯一面ヲ賜テ之ヲ勞ス、十月陸奥守伊達齊義仙台侯

卒ス、嗣子未タ定ラス、因テ喪ヲ秘ス、水野忠成、齊

義ノ老臣大條監物ヲ召シ謂テ曰ク、聞ク汝主疾病ナリ、

而シテ夫人年猶少シ、乃チ幕府ノ公子ヲ請ヒ之レニ配

シテ以テ嗣ト為ハ如何ン、監物対曰ク、寡君疾スト雖

トモ未タ死セルニアラス、夫人若シト雖トモ既ニ嫁ス、

嗣侯ヨリ之ヲ視レハ則チ母ナリ、臣未タ母ヲ奪テ妻ト

為ス者ヲ聞カサルナリ、且ツ寡君若シ死セハ則諸族ヲ

扱テ嗣ト為ス、是藩制ナリ、忠成勃然トシ曰、老臣豈

ニ止々汝一人ノミナランヤ、宜ク協議シテ以テ対フヘ

シ、監物対テ曰ク、縦令ヒ闔国之ヲ議スルモ亦或ハ淪

ル無ケン、請フ敢テ辞ス、忠成儼然トシテ而シテ起チ

願テ左右ニ謂テ曰ク、監物少シト雖トモ偉器ナリ、巨藩臣ヲ養フ知ルヘキノミト、議終ニ罷ム、

二三五 御用金ニ関スル達書

今般御用金申渡候ハ、当八月ヨリ追々一同請高申立候処、右ノ内ニハ御主意ヲ重シ一己ニハ格別ニ多出金限致度者モ有之、又ハ乍少分モ及カ候丈ケ差出度旨存候者モ有之様子ニ候ヘ共、左候テハ以後諸家用達金亦ハ商売筋取引或ハ仕入銀等ノ類、前々ヨリ仲間同様ニ取引合等ノ定申合置候類ノ者モ有之哉ニテ、此度右申合有之向ハ割合ヲ考合、右ニハツレ多出金致候欤又ハ御免ヲ相願上、中々一人立上納金致候テハ諸事ニ右金高相響キ、以後ハ割合ノ出金高可相増哉ニ儀ヲ存シ量リ、亦ハ他ノ出金高ノ手本ニ相成ソネミヲ受可申哉ナドノ斟酌致シ、実々不差支者モ互ニ金高ノ発言ヲ見合セ、又ハ品々困窮ヲ申立出金高ヲ減シ或ハ御免願候者モ不勘様ニ相聞ヘ候、是等ノ儀一応ハ無余儀様ニ相聞候ヘ共、此節ノ儀ハ右様ノ事ニ抱^(抱之)リ候筋ニハ毛頭無之候、

公儀ニテモ全ク此期難被差置時節ニ付、所々ヘモ御用金被 仰付、於当地如此度多人數ヘ被 仰付候事ニテ不通 御主意ニ候上 公儀ノ御用ニ差出シ候ヲ、諸家ノ用金ヲ初互ニ取引ノ見競ニ致シ候ハ、甚心得違ニ候得共、誰有テ右様ノ不道理ヲ申者モ有之間敷、万一此度右様ノ不道理ヲ申募リ候テ及迷惑候モノモ有之候ハ、前々仕来リニ不違事サヘ明カニ相成リ居候分ハ申立次第不道理申者候ハ、如何様トモ声掛ケ可遣候間、右様存シ過シ遠慮不致銘々力次第早々可申立候、都テ

公儀 御高恩ノ大成ルヲ不存者モ無之モノナカラ、又実々知人モ少ナキモノユヘ、左ニ申聞候ハ最早二百年余リ、天下ノ御泰平古今稀ナル事トモ可申候、乱世ニテハ百姓ハコネ田麦ナキトテ田々半生立頓ニ、敵国ヨリ人數ヲ出シ田ヲ為踏荒、麦モ実ニ可入前ヲ考長棹ニテ片ハシヨリナキ、且ツ敵国ノ力ヲヨハリ遣候事ハ常事ニテ、城下ヲ放火シ或ハ敵国ノ商家ニ乱入シ金銀ハ勿論、諸雜具迄モ遠慮ナク取返シ候事モ度々有之事ニ

テ、右様ノ時代トテモ盜賊ヲ初不筋ノモノ共ヲ御制道有之ユヘ朝暮安ク暮シ、出火ニ付テモ夫々ノ役人昼夜ノ無差別東西ヘ走り廻リ、暑寒ハ不及言ニ、危キヲモ不厭其防ヲ専ニ致事、上ニ立人差図無之テハ多人数寄り集リ候テモ其功甚薄モノニテ、右等ノ御入用ハ諸役人ヘノ御手当ヲ初無之不少事ニ候得ハ、目ニモ不立心付候者モナク、タトヘハ人ノ両親ノ恩程厚ハナク、父ナケレハ第一ニ此身カ生元モナク、母ナケレハ養フ便ナク、重キモ輕キモ是ヲノカレン人ハ一人モナキモノナルヲ、其広大ノ恩ハ常々アヘテ難有トモ不心付、偶々他人ムマキモノノ氣ニ叶ヘルモテアソヒニテモ呉候得ハ、其人ノ名ヲ覚ヘ其人ヲシトフハ凡小児ノナラヒナリ、是却テ父母ノ恩ノ余リ莫大ナル故、目ニモ耳ニモ不及、天日ノ高恩ハ心モ不附闇夜ニ僅ノ燈ヲ悦候類ニテ、

公儀ノ御恩ノ諸国ニ及事、父母ノ恩ノ如クナト実ニ知リ覚、主人ノ恩ヲ実ニ弁ヘタル人ハ、則忠臣孝子トモ人ニ呼ル、也、忠臣孝子何モ外ニ拔テ仕フルニモアラ

ス、唯其恩ノ実ニ深キ事ヲ知ルノミナリ、然ルニ多クハ父母ナキ後ニテハ如何トモ可致様ナシ、唯弔ヲ厚スルノミノモノモ多ク及見聞事ニ候、

公儀ノ御恩沢ヲ弁ヘ、常々銘々ノ家業ヲ不怠、少モ邪シマナク御法度ヲ守事御恩ヲ報奉ルノ一ツナリ、此度ノ如クノ時ニ至テ誠々実々銘々力丈ノ御用ヲ勤テコソ、多年ノ御報恩子孫永ク天ノ冥加ヲモ蒙リ、又ハ神仏モナニトテ見捨可給、此時其事ニ不心付打過テハ亦何時可有之事モ不被計候ヘハ、後悔致ストモ詮可薄ニ付一応可申聞也、

右之趣御沙汰有之、事ヲ分ケ被 仰諭候条不致会得、不束ノ御請高亦ハ御赦免日延等ノ儀、此上申出シ候モノ有之候ハ不被得止事、身体向御改被 仰付候儀モ可有之候間、其心得ヲ以テ病氣ニ候共本人押テ罷出御返答可申上候事、

右之趣御用金被 仰付候町人ヘ申諭候様被仰渡候ニ付町々為心得相達候、以上、

七月 日

二三六 「徳川十五代記抄」

七月、是月東海大水天龍川溢レテ湖ト為リ、矢矧ノ橋流出ス、十八日ニ至テ諸国大水、西海殊ニ甚シク、肥船ノ民流失スルモノ五百余、溺死スル者一万五千余人、船舶ノ沈没スルモノ其数ヲ知ラス徳川十五代記

二三七 重豪公帰国ニ関スル論書

○本文書は、第一七九号文書と同文により略す。

二三八 同上家老諭達

此節 大御隠居様被遊 御下向、御領國中風俗等ノ儀付細々被 仰出候趣夫々奉承知候通、右付四家並御家老ヲ始、一統家督ノ者ヨリ御請書血判ニテ差出、末々至候テモ其頭立候者ヨリ同断差出候様、左候テ右之趣家々ニ書留、後代ニ至リ候テモ聊志〔知カ〕布致間敷旨被 仰出候条、案文ノ向ヲ以夫々御請書相認血判ノ上支配頭等へ相付可差出候、此旨向々へ不洩様可申渡候、

但血判ノ儀付テハ追テ何分可申渡候、

十月

右近 將監

前記ノ如ク、樺山・秩父等カ犯罪ヨリシテ幕府ノ忌諱ニ触レ、齊宣公其責ニ当ラレ御退隠、齊興公御知政トナレリト雖モ未タ御若年ナレハ、重豪公政務御介助アルヘキ旨内示アリシニ依リ、御帰国アラセラレ百事整理セラル、ニ至レリ、御下着日ナラスシテ斯書発布セラレ、而シテ御一門家其他大小藩吏御請書ヲ呈シタリ、則チ書ノ如シ、実ニ前代未聞ノコトナリキ、

二三九 御趣法方創設達書

此節御趣法掛・御儉約掛・御側御用人其外御勝手方二階へ致日勤、諸向ヨリ差出候書付等相請取候様被仰付候テハ、何篇御所帯向ノ儀ハ勿論訴訟事等モ御所帯向ニ相拘リ候儀ハ都テ右役場へ申出、其外ノ儀ハ是迄ノ通御勝手方御用人定式ノ御役場へ可申出候、此旨向々

へ可申渡候、

十月

右近

二四〇 御趣法方役所名達書

此節御勝手方二階へ御趣法掛・御儉約掛等ノ御役々其外相詰、御勝手向ノ儀取扱被仰付候付、右役場御趣法方ト相唱候様被仰付候条、此旨申渡可承向へモ可申渡候、

十月

右近

當時財政困頓必迫ナルニ因リ、重豪公御帰国百事整理シ玉フニ、御趣法方ト唱へ財務上特権ヲ与へラレタル一局創設セラレタリ、

之ヲ掌レルハ国老一名・御側御用人・御側役・御納戸奉行ヲ以テシ、御親シク聞召サレ指揮セラレタリ、茲ノ年創設セラレ明治二年迄数十年ノ間財政ノ専務トナレリ、此時ヨリシテ御手許御内用方ト唱ルモ制レリ、

二四一 江戸落書

文化十年酉秋ノ比、江戸日本橋ヨリ西ノ方ニ当リ、アヤシキ猛獸金銀ヲ見テ笑ヒヲ生シ、米穀ノ下直ナル事ヲ忌ミ、不作飢饉ナラン事ヲヨロコヒ、至テ身輕クシテ飛脚ノ如ク故ニ身ヲ重クセント欲テ、人ノ骨ヲ盜ミ喰ヒ、又油汗ヲシホリタル人ノ金銀ヲネロフ、此猛獸天下ノ城下ニマンスル時ハ金銀米穀ヲ己カ心ニ自由ヲナス、然ル時ハ四民ノ愁大方ナラス、ムカシ由井・丸橋カ族ニモヒトシカラン、早ク智勇ノ武士出テ退治セスンバアルヘカラス、三才図絵ノ和名国乱根ト云、面ハ人間ノ頭髮ヲミタシ、明体狼ニ似テ下服ニ毛ナシ、額老寺ノ四ツ文字ライタ、キ、四足狐狸ニ似テ至テ爪ナカシ、蹴爪有能ク下ヲ突オトス、尻尾マムシニ似テ金銀有人ヲサス、唱声御用金ノト申ス、

此度、西ノ丸恐悦ニ町中一統ヨリ、御酒十樽・鯛十折献上仕候目銀、〔銀カ〕

西河岸会所ヲニミ樽 杉本コハシテモラヒ鯛

京都ヲ夜逃ニ歸リ樽 肥田ヲヒカシテシマヒ鯛

病氣ヲ御引ナサレ樽 〔脇カ〕 服坂出シテモラヒ鯛

近年出世イタシ樽 町年寄ヲヒカシ鯛

半分カコヘト馬鹿カ樽 御趣法ツブシテモラヒ鯛

町人一統コマリ樽 御冥賀ト、メテモラヒ鯛

仁義ノ道ヲワキマヘ樽 老中出シテモラヒ鯛

初藏御預ナサレ樽 石橋タ、ンデモラヒ鯛

西ノ丸御普請ナサレ樽 責ヲシモヘモラヒ鯛

国替仰付ラレ樽 松前モトシテ治メ鯛

二四二 御船手御作事方上申書 地金用古鍋・半釜

ニ関スル件 文化十年十一月廿五日

文化十年酉

一 地金用古鍋・半釜類

右ハ御方へ相屯候節地金用トシテ申受等相成候儀ハ有之間敷哉、於其儀ハ直段一斤ニ付何程ツ、ニテ候哉、

於御船手モ先年申受相成候儀有之候得共、時々直段高下ノ振合モ可有之、為念此旨御尋申進候、以上、

西閏十一月二十五日 御船手

本文ニ付

一 古鍋地金類一斤ニ付代錢二十四文

一 古釘類地金一斤ニ付代錢十六文

右之通御座候間御返答申達候、以上、

閏十一月廿五日

御作事方 御船手

二四三 〔物奉行方調〕

金藏御払

明和三年戌八月ヨリ同四年亥七月迄

一 小判金五百兩

一 老部金千百六十七切

一 銀四百三十一貫百九十八匁九分二厘六毛

内

百三十貫目

大坂為替払差引

三百一貫百九十八匁九分二厘六毛

一 錢十二万四千二百十八貫四百十四文

内

八万二千八百八十四貫二百八十七文

大坂為替払差引

五万二千九百三十四貫百二十三文

以上物奉行方調

赤米千六百石

五月中

一 真米千石

赤米千五百石

六月中

一 真米七百石

赤米九百石

七月中

一 真米五百石

赤米四百石

八月中

一 真米六百石

赤米五百石

九月中

一 真米六百石

赤米五百石

十月中

一 真米五百石

一 真米千五百石

二月中

一 真米千五百石

赤米千五百石

三月中

一 真米八百石

赤米八百石

四月中

一 真米千三百石

一 真米千三百石

一 真米千三百石

一 真米千三百石

一 真米千三百石

一 真米千三百石

一 真米千三百石

一 真米千三百石

一 真米千三百石

一 真米千三百石

赤米五百石

十一月中

一真米八百石

赤米八百石

十二月

一真米千石

赤米千石

外ニ真米二千二百五十六石

但二盃入

合二万二千五百五十六石

物奉行調

文化三寅八月ヨリ卯七月迄物奉行方調

一錢千八百八十貫文余

一真米二百五十石余

一赤米五斗一升八合

右三行諸職人賃払

一錢六百七十貫文余

右一行御藏日用賃

一真米七千五百七十五石余

一赤米四千八百九十石

一米三千百五十四石余

右三行御役料米 役料米 御切米

一真米九百二十石

一赤米三百四十八石

右二行年中御扶持米

一真米九十石

一赤米六十石

一錢二千九十貫文余

右三行御小姓其外御心付銀並御扶持米

一真米九百八十石

一赤米五百九十石

一米百九十九石

右三行助役々料米 御扶持米 御切米

一真米百石

一赤米十一石

一米七石

- 一 錢千三百十二貫文
- 右 四行御仏本ノマテ 払
- 一 錢二万二千三百三十九貫文
- 右 一行諸御買入物代
- 一 真米二百七十石
- 一 赤米二百石
- 一 米二十一石
- 一 錢千百卅七貫文
- 右 四行島渡海ノ人御扶持銀米
- 一 錢六百四十二貫文
- 右 一行御祈禱料
- 一 錢六千三百十三貫文
- 一 真米二百六石
- 〔下〕 一 米二十二石
- 一 銀七百五十目
- 右 四行方払
- 一 錢八百十七貫文
- 右 一行万受負賃
- 一 錢千三百十五貫文
- 右 一人足身代銀
- 一 錢一万七百八十六貫文余
- 一 真米二十一石余
- 右 二行樟腦仕込銀並払
- 一 真米九石
- 一 錢二千四十九文
- 右 二行別銀払
- 一 錢千五百二十九貫文
- 右 一行女中衣裳代並給分
- 一 錢一万千十八貫文
- 右 一行取下方払
- 一 真米五十九石
- 〔下〕 一 米六石
- 一 赤米三十石
- 一 錢八十九貫文
- 右 四行造土館払
- 一 錢四千百八十九貫文

右一行三島方御買物代

一錢五百二十二貫文

右一行御救銀

一真米二十七石

一錢二百四貫文

右四行頭屋方

一真米二百五十二石

一^{〔44〕}米三十五石

一銀百八十目

一錢六千三百八十七貫文

右四行御廐払

一錢五千九百五十八貫文

右一行明鑿代

一真米四十六石

一^{〔44〕}米四石

一赤米二十三石

一錢八百七十一貫文

右四行御葉園払

一米一万八千百五十六石三斗九升四合

但真・赤米

右一行寶曆六子年一ヶ年分金藏御払高

一米二万四千二百二十四石二斗四升九合

但真・赤米

右一行文化三寅八月ヨリ同四年卯七月マデ一ヶ年分全

断

差引重ミ五千九百六十七石八斗五升五合

一銀五百四十三貫三百七十九匁 但金込

右一行寶曆六子年一ヶ年分全断

一同千三百三十二貫三百七十五匁 但金込

右一行文化三寅八月ヨリ同四年卯七月マテ全断

差引重ミ五百八十八貫九百九十六匁

一錢六万八千八百二十貫六百四十七文

右一行寶曆六子年一ヶ年分全断

一同十三万三千三百四十八貫二百七十四文

右一行文化三寅八月ヨリ同四年卯七月マテ一ヶ年分全

断

差引重ミ七万五千五百四十五貫六百二十七文

右道奉行所

一米一万五千九百三十七石五斗九升

一米五十六石五斗六升六合

右一行明和元申八月ヨリ同二年酉七月マテ金藏御弘高

一錢十五貫九百七十二文

一同一万七千百十五石六升

右明時館

右一行明和二年酉八月ヨリ同三年戌七月マテ金藏御弘高

一米百五十七石一斗四升

高

一錢二十二貫文

一米三十石二斗二升五合

右御菓園方

一錢十一貫文

一米二十八石六斗

外ニ銀百六匁六分五厘御買下筆・紙・墨代・朱墨代

一錢二百八十八匁

右大番頭座

右織屋方

一米二百七石八斗八升

一米四十一石六斗

一銀二貫五十七匁八分七厘

右医学院方

一錢百五十八貫七百三十四文

一米二百十五石八斗八升四合

外ニ銀一貫七十一匁一分御買下筆・墨・唐朱墨・小文

一錢二百三十九貫三百三十文

筆代、

右御庭方

右造士館

一米百十八石三斗六升四合

一米百二十八石五斗九升三合

一錢百三十九貫七百六十文

一錢十一貫九百七十六文

右御飼鳥方

合米九百八十四石七斗九升

合銀二貫三百四十五匁八分七厘

金錢五百九十八貫七百八十文

右三行大番頭座ヨリ御飼鳥方マテ新御役場九ヶ所、勤人数御役料米・夫飯米其外諸品代

二四四 齊宣公御隠棲達書

○本文書は、第二〇五号文書と同文により略す。

二四五 土分ニツキ齊宣公諭達ノ件 文化十一年三月

一於他所御家中ノ者末々ニ至迄、少事ノ儀迎無調法有之候へハ、兼テノ被候付様大形ノ体ニ相聞得 御名ヲ出事候間、此旨不致忘却家来下々迄諸事ヲ相慎候様トノ儀従前々ノ御大法ニ候間、人々其覚悟ハ有之筈候へ共、輕者末々ニ至候テハ物毎勸弁薄取違候儀モ有之事候間此旨ヲ猶又屹ト可申付置候、勿論御当地又ハ道中筋ニテハ一涯行当等無之様相心掛、無用ノ場所等ハ不立障

万端可相慎候、乍其上万一不慮ノ儀致到来候へ、

忽ノ働不致、可成丈其場ヲ致堪忍、其節ノ応時宜夫々

可相届向へ相届、筋々ノ取計可致候、仮令末々ノ者タ

リ共一分ノ立候様無之候テ不叶事候、兎角手前ノ不慎

ヨリ事起リ候へハ、其身ノ不覚ハ勿論、御外聞ニモ相

掛候間兼テ右ノ所ヲ不致忘却平生ヲ相慎候様、支配頭

・主人ヨリ毎度敵敷可申付候、尤他所旅申付候者ハ人

柄一涯致吟味、勿論召連候家来下人ノ儀モ同断ノ事候

間、万一不埒ノ仕形有之候へ、依事頭人・主人迄モ

可及迷惑候、

右ノ通

御隠居様被

仰出候条聊モ無忘却屹ト可相守候、

三月

右近

安房

二四六 白金邸称タル達書

○本文書は、第二〇九号文書と同文により略す。

二四七 齊宣公白金邸引移達書

○本文書は、第二二二号文書の一と同文により略す。

二四八 齊宣公上使御給等引請届出ノ件

○本文書は、第二二二号文書の二と同文により略す。

二四九 〔江戸大火記事〕

〔文政カ〕
十二年二月 天皇詔シテ正一位太政大臣ヲ一橋治濟ニ
追贈ス、後四年ニ至テ

天皇親シク宸翰ヲ染メ、最樹院ノ三字ヲ書シテ之ヲ賜
ヒ其廟額ト為ス、是歲三月江戸神田ヨリ失火シ南北一
里余、東西二十余町其災ニ罹ル、諸侯ノ邸四十七・旗
本以下ノ邸九百余・民屋十一万八千余・倉庫千六百三
十余・架橋五十灰燼ニ属シ死スル者千九百人、十一月
京師八坂ノ老嫗天主教ヲ奉シ、妖術ヲ行テ愚民ヲ惑ス
事覚レテ磔セラル、其五人亦其刑ニ処セラル、

二五〇 諸士ノ容貌・言語・風俗等ニツキ重豪公

諭達ノ件 文化十二年三月

一去年 御下向ノ節御領國中御取締向ハ勿論、容貌・
言語等ノ儀御細密御ケ条書等ヲ以被仰出、御一門方・
大目附以上へハ、御直ニ被仰出候付、諸向奉承知万端
御趣意通相守様ト被思召上候、然共従古来ノ風俗ニテ
兎角ニ旧俗ニ立埒儀ノミ有之候間、往々〔マツ〕通相守候様
猶又可申渡候、且又学文・武芸ノ儀毎度 御沙汰モ被
為 在候上ナカラモ、猶又御ケ条書ヲ以モ細々被 仰
出置、第一士持前之事情間致練熟候様無油断可相心掛、
尤師匠家ノ儀ハ指南方可致精勤候、勿論言行不正候テ
ハ芸術之本意ニモ不相叶筈候間、容貌・言語・風俗等
ノ儀モ師範家ヨリ兼テ可致教戒、若不相用候者師弟ノ
道相省者候条、夫々從師家可致破門候、且又諸御役所
向へ相勤候者モ同断ノ儀候間、仮令日用ノ御用向ハ兎
哉角相弁候テモ御趣意ニ不相叶、不行跡ノ者ハ往々御
用ニモ難相立事候条、支配頭等ヨリ御趣意通立直候様
時々申聞、乍其上モ不相用言語・容貌等不宜者ハ、専

御役場ノ風俗ニモ相掛事候間、其勤向可差免候、分テ造士館ノ儀ハ学館ノ儀ニテ御領國中ノ目当ニモ相成事候条、一涯子弟教育可為第一候、去々年 御下向ノ儀ハ御政務筋 公辺へ御申立、乍 御老年様御下向被遊タル御事候付、急度仰出ノ詮相立一統御趣意通不立直候テハ、公辺御閣合モ如何敷殊更当時御介助中ノ御事候得ハ、被对 公辺御申訳モ無之御迷惑ニモ相掛候条御領國中ノ面々聊モ無忘却堅可相守旨、末々迄モ可申渡候、右之通大御隠居様被 仰候、^{〔出脱カ〕}

三月

一御領國中御取締向並容貌・言語等ノ儀

大御隠居様去々年御下向ノ砌、御ケ条書ヲ以御細密被仰出置候処、古来ノ風俗ニテ兎角旧俗ニ立帰候儀ノミ有之候間、往々^{〔トク〕} 通相守候様、委曲別紙之通此節於江戸畠山數馬へ被仰出候、畢竟間ニハ被守薄向モ有之候処ヨリ、又候被為及 御沙汰甚以奉恐入儀候条、以来万端御趣意通堅相守、往々^{〔トク〕} 通候儀可心掛候、去々年

御細密被 仰出候付テハ、一統承知ノ上後代子孫ニ至リ聊忘却仕間敷旨、御請書差上血判迄モ被 仰付置候付、何レモ立直候様無之テハ不叶事候間、此節 仰出ノ御趣意ヲ以猶又人々厚可奉汲請候、就中年若ノ面々へハ父兄等ヨリ朝暮無間断可致教戒候、乍此上若不守ノ族モ候ハ、屹ト御取扱被 仰付、父兄等迄モ相当ノ御咎目可被 仰付候、此旨行届候様支配下下役等へモ時々可申含候、

一去ル辰年 大御隠居様又ハ御介助被成進、其砌御儉約

御年限中ナカラ五ケ年ノ間猶又稠敷御取締向鎖細被 仰出、諸入用困窮ノ乍時節難被黙止、出銀米並給分引方迄モ被仰付、大坂新御仕送等ノ儀ハ 御下知被為立、追々御仕送物等モ相重旁ニ付相応ノ御出目有之、夫丈ケ三都ノ御借財モ先年ヨリハ相減、御役々ハ勿論一統出精ノ廉モ相心得 御満足被思召上候、然共基莫太ノ御借財高故中々以御所帯方御立行ノ方ニハ未到候付、御年限ニモ相滿候得共、無拠又々去ル酉年ヨリ来ル卯年迄七ケ年、是迄ノ通御儉約被 仰出、三都ノ御借財

御趣法向モ被相替、彼是御吟味被仰付御事ニ候、依之於向々緩セノ儀無之様候得共、兎角ニ其際ノ様無之物每廢弛ノ方ニ成行、仰出ノ御趣意不相立方ニ相成儀モ有之、不可然事候条、無緩疎様可心掛候、勿論御役場勤人数ヲ初、諸向減少方ノ儀モ押テ被仰付候テハ、差支モ有之積ト被 思召上候得共、尚御時節難差置無被仰出置候処、追々取締筋申立連々本之通相成振合ニテ、御取縮向被 仰出候詮モ無之、仰出ヲ奉輕筋ニ相当甚以不可然儀ニ候、且又御国役モ難被為勤程ニ成立ヘク御時節故 上々様御身辺ノ儀迄モ御事ヲ被為缺御不如意ニテ被為在御事候処、右様ノ汲受モ無之等閑ノ方ニ相見得、旁以別テ如何ノ至ニ候、依之於諸向右等ノ所得ト汲受滅方被仰付候所ヲ以、御差支不相成様申談可致弁別候、右ニ付テハ丈夫ケ万端ニ付諸向昼夜可致骨折儀ニテ 御氣之毒被 思召上候得共、此節ノ儀ハ被為及 御老年、至テ御心慮御世話被遊候御事候間、是非御取縮ノ詮不相立候テハ不叶儀候処、何レノ筋ニモ御仰出ノ御趣意〔イ、イ〕 通兼候間、急度取守昼夜掛心

頭精々致御用弁候様 思召候、就中大奥向ノ御取縮向〔イ、イ〕 通候様分テ可申渡候、尤是迄段々御儉約モ被仰付候後ニテ最早吟味ノ致様モ無之抔ト、諸向等閑ニ打過候テハ決テ不相成候付、日ニ新ニ尽心力候様於無之ハ、御所帶方御立直ノ期ハ有之間敷候条、一統此旨ヲ〔イ、イ〕 最初 仰出ノ御趣意無忘却、猶又鎖細尽吟味可致精勤旨大御隠居様被 仰出候、

四月

監物

安房

内藏

二五一 六部体ノ者取締ニ関スル達書

御領内へ入来候六部体之者往来宿次ヲ以相付来候得共向後不及其儀、入来候於番所証文等見届、造成者ハ無口能差通、番人ヨリ是迄ノ通付状相認当人へ相渡且道案内ノ者召附来候得共、此節ヨリ不召付候間、付状通順路致通行候様分テ可申聞候、左右証文等不案内有之候カ又ハ辺路ヨリ入来候者ハ一切差通間敷候、

右之通諸所境目番所へ申渡、左候テ付狀順郷次書又ハ御当地諸郷共ニ順外不致徘徊様ト之義ハ、去ル子年委曲申渡候通候条、町奉行其外可承向々へ申渡、諸郷私領へモ可申渡候、

十一月

安房

典膳

二五二 風俗・容貌・言語等ノ取締ニ関スル件

文化十二年十二月

一屋敷中風俗・容貌・言語且取締等ノ儀毎度申聞通リニ候、猶又緩セノ様可致事ニ候、将又此節別紙申聞通候數省略筋申付候付テハ、乍此上取締向行届候様ニ可有之候、頃日至リ間ニハ外方参会等相催候向モ有之哉ニ聞^{〔マカ〕}リ候処、当時ハ所帯向等極々難渋ノ砌ニテ、其心得モ可有之ノ所外出ニ及度々候得ハ、ヲノツカラ末々不勘弁ノ儀令致来終ニハ難渋筋申立、剩他借等及増長首尾不行届公証等ニモ及不外聞ノ至ニ候、畢竟不勘弁ノ所ヨリ右様ニ成立、且又折々屋敷内諸所へ相集酒宴

ヲ催シ、祝ニ祝事等ノ節身分不相応ノ仕向モ有之、不入及物入時節ヲモ不弁、尚以不可然事ニ候、向後屹ト取締申付候、就中支配頭並役儀等トモ相動候面々ハ勿論、目附役等ハ屋敷中取締ニ相成候職分候条、聊取違ハ無之答候得共、一涯身ヲ相慎見聞可致候、乍其上不取締ノ儀モ有之候ハ、屹ト存寄有之候付、分テ稠敷可申渡候、尤言語・容貌等ノ儀何分度モ申聞候得共、^{〔マカ〕}兎角ニ汲受薄直リ兼候、就中江戸勤役中ハ外方応答モ致事候得ハ、人々折角掛心頭不外分無之様可心掛候、此上不守ノ者ハ以来江戸並他所勤申付間敷候条、取違無之様可申付置候、此等ノ趣申聞候事、

十二月

家老中江

二五三 同上ニツキ家老諭達 文化十三年

此節江戸御屋敷中風俗・容貌・言語且取締等ノ儀トモ、御別紙之通 大御隠居様御筆ヲ以被仰出候条、兼テ江戸詰等被仰付候面々始、一統仰出ノ趣謹テ可奉承知、

於御当地モ右ノ 御趣意ニ随物毎質素ニ心掛、無益ノ
参会等相催、其外祝事等ノ節モ不相応ノ仕向無之様堅
相守、諸事不加勸弁候、且風俗並容貌・言語等ノ儀ハ
毎度被 仰出御事候間、屹ト相直候様可致候、就中支
配頭又ハ御役等相勤候面々ハ勿論、目附役等ハ夫々身
分ヲ相慎可致見聞候、左候テ支配有之向ハ支配下末々
迄モ、前文ノ趣意ヲ以取締向等可申渡候、

正月

監物

安房

二五四 参考 種子島時昉日記抄

郁君様御事、鹿兒島御発興、大坂へ暫御滞留ノ上御上

京ニテ文化十三年子四月十五日

近衛忠熙公へ御婚姻ニ付、御広敷番之頭ニテ御用掛且

御供等被仰付、御着坂前以江戸ヨリ致出坂居

御上京致御供

近衛様於大御書院 左大臣某前公

少將忠熙公御太刀・御馬代献備 御目見候事、

二五五 重豪公財政改革ノ布令

所帯向不如意ニ付先年以来度々省略法申付、勝手方
仕向等迄モ相替へ分テ取締申付候得共、其詮不相見段
々入用向相重、当年モ五万兩余ノ及不足候由、依之此
節猶又存寄ノ趣有之、産物代金高且江戸統料三都借財
利分等取調申付候所、三ヶ年相並シ一ヶ年分ノ産物料
臨時相込十三万兩余ニ及居候、左候へハ三都ノ借財利
分ニモ毛頭不引足故ヲ以年々過分ノ及不足候、去ル巴
年江戸定式五万兩ニ定置候処、無抛臨時等相重右通不
引足趣ニ付、此節二万兩相重メ、都合七万兩ニテ定式
相濟候様イタシ度、右ノ七万兩ヲ元ニイシ、向々ヨリ
取シラへ申出候様可取計候、勿論諸役場等減少ノ儀モ
已年委敷申付候処、頃日ニ至リ追々故障筋申立、最初
ノ趣意ヲ相崩シ何分最通兼候、此節ハ急度往年相居リ
候様向々ニテ可遂吟味候、尤産物料十四万兩ヲ以、三
都割合江戸統料七万兩、外ニ三都借財利払等イタシ、
且京・大坂定式入用等ハ可成長ケ差操リヲ以相払、成

丈余銀相残り候様可取計候、尤差掛リノ吉凶等ハ不及是非候ヘトモ、折角定式外入用無之様取計、尤右七万兩統方月割等且難黙止臨時入用等例年十一月迄ニ産物料惣立、於大坂一ヶ年分ノ金割可相定候、其上ニテ不時ノ入用向等可成長致作略候カ、差掛ラサル儀ハ相延、来年ノ金割ニテ可相調候、定式・臨時共ニ年々屹ト前年金割相居候様可取計候、右通相究候上ハ年々不及難渋ニモ、且損益モ相見得取締モ可相届候、勿論於国元猶又細密遂吟味、定式仕送物並新仕送ノ品共無間断差送り、惣高十四万兩ヨリ不引入様極々可遂吟味候、自然新送品ノ内不引合品有之候ハ、外品ニ操替（操乙）、少事モ損益無之様可取計候、何分此節ノ儀後年最通屹ト相居リ候様可取計候事、

十二月

家老中へ

二五六 御用金上納ニ関スル達書

御用金七万七千六百六拾四兩貳步、永百七拾貳文

右ハ、此度濃州・勢州・尾州・東海道筋川々御普請御

用被為蒙 仰候段ハ、別紙ヲ以テ申渡通候、然ハ御普請御仕立相済、御入用御出金御高割ヲ以テ、右之通被仰付候、左候テ御上納可申儀ハ御支度次第御伺有之候様、先月四日被仰渡候段申来候、此旨表方へ致通達、奥掛・御勝手方へモ可相達候、

六月

監物

安房

典膳

御金納被仰渡候御大名方左之通、

伊達遠江守様

一金一万貳千八百拾八兩三歩

花立左近將監様

一金一万五拾五兩一歩

小笠原大膳大夫様

一金一万九千貳百貳十八兩三歩

一阿部鐵丸様御出金

伊達様御同様

松平主殿頭様

一金八千四百四十八兩

松平伊賀守様

一金六千七百九十三兩三歩

縮拾四万七千八百貳拾八兩

二五七 郁姫君御名認方ニ関スル達書

近衛様へ御縁中御使へ、往来ノ節ハ、大守様ヲ始、御法ノ様、殿文字相用候様トノ御事候へトモ、御断被仰進、郁姫様御名御口上書別紙通ニ相認様ト可相認、且又、誰若様御方へ御同様可相心得旨申来候、

正月

監物

二五八 「一橋治濟記事」

三月二十八日、一橋大納言治濟卿（穆翁ト称ス或ハ儀同ト称フ）芝邸ニ御貴臨、散楽ヲ催サレ御饗応アリ、卿ハ

將軍家齊公ノ^{「三弟故」}三弟故、齊就公ノ^{「弟ナリ」}弟ナリ、英姫君ノ実祖父ナリト云フ、

二五九 重豪公政事向ニ関スル論書

去ル酉年、公辺へ申立候趣有之、乍老年国元へ差越着涯ヨリ万事ヲ差置、存寄ノ一条一門方ヲ始重役ノ面々へ得ト申聞、其趣意諸役々へ委細申渡候得共、何分其節計リニテ兎角不汲受、其後態々役々招呼段々申聞趣有之候へトモ、今以詮立候訳モ無之、去年上野善兵衛・堀殿衛兩人へモ委細申含差遣候へトモ、何分不容易儀ニテ、中ニモ所帶向ノ儀今ニ極難渋ノ時節急々可取直期モ未相見得、仕向ヲモ相替へ候へトモ、存寄通不行届全取扱候役々不頓着ニテ趣意不掛心頭所ヨリ其詮不相見得、依取計ハ何程ノ事ニ候トモ是非其趣意不相立候テ不叶ノ処ニ決テ左様ノ振合ニ無之候、此已後ノ儀ハ万事無油断念頃^{「頭之」}ニ掛ケ取扱精勤可致候、左候テ勝手向取直シ候ハ、自ラ末々マテ物事緩セニ成立永久可令安堵候、将又是迄諸役相勤候者共、自己ノ勝手ヲ

存込候テハ色々ノ手段ヲ廻シ、或ハ利欲ニ迷ヒ候テ、

夫々役儀ノ差別ヲモ不弁、面皮恥辱ヲモ不顧制法ヲ破
 リ候族モ有之、誠ニ此等ハ世外ト乍申、猶此上共ニ折
 角入念急度相守油断有之間敷候、右ノ趣意是迄申聞候
 上ナカラ 公辺へモ専申出遠国迄モ差越令下知候へト
 モ、其詮無之候テハ 公辺へ対シ面皮ニモ拘リ何分ニ
 モ不相濟、勿論先年介助ノ儀相断候へトモ難默止不得
 止事、国家ノ為ヲ存シ乍極老再令介助候ニ付テハ、猶
 又不依大小下知ノ趣相弁へ取扱可致候、尤依生質ハ無
 是非不行届者モ可有之候へトモ、先ツ一体ノ仕向甚等
 閑ノ趣ニ相聞得、幾度申聞候テモ不最通、畢竟差図不
 行届筋ニ当リ、先祖へ対シ候テモ申訳ナキ次第甚令心
 配候、右様ノ趣此節マテハ委曲申聞候へハ、何レトモ
 其詮不相立候上ハ、介助相断引取候ヨリ外思慮無之候、
 此趣国元へ申越於江戸モ一統申渡同様可相心得候、此
 旨申聞候、

六月

内藏へ

二六〇 齊興公御添書

今度 大御隠居様以御自筆被 仰出趣、去酉年 公辺
 へ被仰立趣有之 御下向ノ節モ 思召ノ程一門方並重
 役共へ得ト被仰聞趣夫々申渡候へトモ、其節迄ニテ兎
 角汲受薄ク、其後モ度々被 仰出趣有之候へトモ、何
 レ最通兼甚被遊御心配候間此度迄ハ委曲被仰聞、乍此
 上其詮不相立候ハ、御介助モ御断リ被遊外無之トノ
 趣細々被 仰出誠ニ恐入次第候、万一御断被 仰下
 儀ニモ相成候テハ、何トモ恐入儀ニテ甚令心痛候、乍
 御老年色々被尽 御心苦御介助被成下御事、誠不輕難
 有次第難申尽儀ニ候間、追々被仰出候御旨趣、一門方
 ヲ始重役ノ面々ハ不及申、諸役々末々マテモ得ト汲受、
 往々最通被遊 御安慮候様、面々可相心得旨申渡、就
 中各儀ハ昼夜共油断ナク尽心力、急度其詮相立候様可
 令精勤候、

七月

家老中へ

二六一 禄高課出米事件

所帶方極々難渋成立居候上、今般川々御普請御用金蒙仰候付、三都借入又ハ差出金等ヲ以乍漸全金納相濟候然処右補方ノ儀役々及吟味候ヘトモ、産物又ハ株立候出方不相見得、重々出米ノ儀家老中ヨリ申出趣有之候ヘトモ、領國中諸役人極々困窮ノ折柄ニ候得ハ、其通ニモ不申付候処、此上何様尽吟味候テモ詮立候程ノ儀無之、何レノ筋五ヶ年ノ間重出米ノ儀及再三家老中願ノ趣有之候ヘトモ、一旦前文通申渡置候上ハ、諸人困窮難捨置事ニ候、併此上術計為尽果末ニ候ハ、重出米ノ外出銀等不相見得段、役々及吟味細々申出、猶外ニ無余儀相聞得候次第モ有之、兎角繰合難相成付テハ是又難黙止、畢竟仁政ニモ相拘不容易事候ヘトモ、御用金ノ儀ハ專国役ノ事故、無是非願通城下ハ一升五合・諸郷ハ二升ニテ願、年限相減シ三ヶ年ノ間格別ノ儀ヲ以テ米申付候、以来右様ノ願一往不聞濟上ハ決テ不相成事候、

右之趣国元家老中其外一統末々迄モ不洩様可申聞候、

八月

二六二 〔水野忠邦外二名転封ノ記事〕

肥前唐津ヨリ

遠州濱松へ

〔忠邦〕
水野左近將監

遠州濱松ヨリ

奥州棚倉へ

〔正甫〕
井上河内守

奥州棚倉ヨリ

肥前唐津へ

〔長昌〕
小笠原主殿頭

二六三 風俗・言語・容貌等ニ関スル論書

領國中風俗・言語・容貌其外政事向万端且所帶方差迫候付、勝手方仕向等之儀先日直ニ微細申聞、猶書付ヲ以申聞通ニ候、自ラ於国元家老・若年寄・大目付其外役々末々迄モ申聞、御趣意可申渡事ニハ候得共、此度モ申聞候通、去ル西十月国元へ差越候上、万端之義委曲申聞、殊勝手方仕向替ノ儀ハ、猶又微細申聞之節ハ得ト合点為致趣ニテ、受書等迄モ差出、猶ヲ保書ヲ以

申渡、日用右ヲ本ニ致シ何篇可遂精勤吞込之事ナカラ
 趣意致艱難、此節時節柄誠費ヲ不厭役々招呼候次第ニ
 テ、又此節申聞御趣意モ此涯ハ得心為致様有之候得共、
 程過候へハ緩セ相成候儀難計、甚以心痛至極ニ候、夫
 故又々招呼再重申聞事候間、此上ハ国元役々屹ト相改
 意味少モ無相違、後代混ト相居候様可心掛候、趣法掛
 ・側用人・勝手方支配役場一役一人定、繰廻日勤申付
 用向取扱申付候テハ、其一人ニ不限ノ故、用向不連続
 ノ意味等ニ心得候向モ可有之カ、右様心得候テハ又趣
 意違ニ候、用向扱ハ不依一人其役場之事候間、其役場
 へ召仕候役々ハ一身同体ニ候故、役場ヲ以連続イタシ
 候様可有之事ニ候、其一人ヲ以取扱候へハ、ヤハリ是
 迄ノ吟味役へ類シ往々心得違多候、能々右ノ意味深ク
 味モ可申事ニ候、当時ハ勝手方へ出席ノ役々其一人ニ
 掛可申付有之候付テハ、間ニハ諸人訴訟事等ニテ諸參
 会等有之哉モ難計、若哉右様之儀モ於有之ハ、吟味役
 ノ旧俗ニ立帰候筋ニ候間、終ニハ蠟頁ノ取扱ニモ有之
 ニ成立不可然事ニ候、何分諸向質素ニ実儀ヲ專ニ故少

之
 モ無私不致精勤候テ不叶事候間、家老・若年寄・大目
 附能々趣意得心イタシ、無忘却汲受、後代相居候様朝
 暮尽心力、役々末々迄モ相流候様一涯可心掛候、此節
 モ趣意心得違又等閑ノ取計等有之候テハ決テ不相成候
 条、又々此等ノ旨申聞事ニ候、

五月

二六四 〔堀田正敦蝦夷地派遣ノ聞書〕

若年寄

堀田攝津守様

右蝦夷地へ異国船来着月狼籍申候ニ付、為御見廻彼地

〔ヤリ〕

〔被差遣旨被仰渡候由、

右異国船數艘ト申事候得トモ、火焚煙ヲタ、セ候ニ付

何拾艘ト申儀始終見分カタク由承申候、石火矢銃手強

ク相放、南部様人数之内捕籠子為致ト申事モ有之ナト

、イロノノ評判余ナト手アヤカシノ様子聞得申候、

本ノママ

卯七月十一日、写アヤマリ落字多可有之、糺合ナシ、

二六五 六部並大社參詣廻国者取締ニ関スル達書

文化十四年丑七月

六部並大社參詣廻國者御領内へ入来之儀ニ

付、町奉行所書役迄相糺候処、左之通申出候

近年六部並大社參詣廻國者、御領内へ諸所辺鄙ノ所迄

モ猥致徘徊候聞得有之、甚以不可然、第一御国政之妨

相成候間、向後右体之者諸所境目番所へ入来候へ、別

紙被定置候參詣所順路郷々可差通候、右ニ付テハ寶永

三戊年申渡有之候通承知候、痛所等之者ハ格別一宿其

外堂泊・野宿等一切不相成候間、入来候番所ヨリ順郷

次書ヲ以可被差通トノ付状相渡、其者ニモ右之趣堅申

聞可差通旨、此節諸所境目番所へ申渡候間、諸郷之面

々其通相心得、以後右体之者差越候節ハ順郷次書イタ

シ可差通候、若順路外罷通堂泊・野宿等ニテ猥致徘徊

候者於有之ハ、其所ヨリ所次ニテ境目番所ヨリ追返、

其届町奉行所へ早速可申出候、尤御城下へ参着之節モ、

順路不罷通方々致徘徊者モ有之候ハ、封謝不相成様、

町中ハ店掛之者ヨリ問屋ニ差越様申付、勿論武士小路

之儀廻、〔以下欠失〕

二六六 〔家慶公同唱遠慮ノ件〕

一若君様御名

家慶公ト奉称候付、慶之文字名並名乗用候儀、尤同唱

ニテモ遠慮可仕候、

右之通表方へ致通達奥掛御勝手方へモ可相達候、

但琉球島々へモ可被申渡旨琉球掛へ相達、諸郷ノ儀

ハ地頭・領主・大番頭ヨリノ可被申渡候、

正月

久馬

二六七 安田助左衛門日記

文化十四年巳正月前髮取被仰付、其後同年寺社方檢者

被仰付相勤、同八月ヨリ御代官所書役被仰付相勤居候

処、文政七年申閏八月御家老座清書掛書役被仰付、同

八年依願助右衛門ト改名、同七年申七月安田五兵衛繼

目養子被仰付、其後追々繰上同十三年寅正月御家老座

書役被仰付候、其同文政十年亥年格別ノ御省略筋被

仰出掛リ被仰付、且又天保四年、〔以下欠〕